

第2節 遺構・遺物の概略

調査成果については、次章で時代順に述べるが、ここでは全体の遺構・遺物の状況を地区別に簡単にまとめておくこととする

調査区は、南北方向に狭長な形状をしていることから、便宜上、調査区を横切る2本の道で大きく3地区に分け、さらに遺構の集中する中央部を2分割することにし、北から北区・中央北区・中央南区・南区と呼称する。

北区は、全体に遺物包含層の残存状況は悪く、遺物量は少ない。遺構もあまりまとまって検出されたものはなく、ピット状の小穴は多くみられるが、柱穴となるものはほとんどないと考えられ、集落の存在は想定できない。その中で、北端部において柱穴と考えられるピット群が比較的まとまって検出されており、調査区の北側で確認されている中世の集落の一部になる可能性がある。ただし、狭い範囲での検出であり、建物の復原などできないことから、不明な部分は多い。この区の南端部で、あまり広い範囲ではないが、ピット群と溝がまとまっている部分があり、集落が営まれていた可能性がある。遺物量は少ないが、溝から古代の遺物が出土している。また、前節でふれた暗褐色シルト層が広がっている状況もみられるが、ここからは遺構・遺物は検出されていない。

中央北区では、遺物包含層の残存状況は比較的良好であり、北半部では奈良時代の遺構・遺物がまとまって検出された。特に、北区と中央北区を画する道路に近い部分に遺構が集中しており、調査区に隣接した地点で、以前おこなわれた泉南市教育委員会による調査でも、同時期の遺構・遺物が検出されている。このため、道路の北側ではみつからないものの、道路に面した部分で集落が営まれていたことがわかる。掘立柱建物を構成するピット群や土坑、溝などがまとまっており、土坑の中には廃棄土坑もあることから、良好な一括遺物が出土している。柱穴には、方形のものや円形のもののみられ、掘立柱建物の主軸方向の差から2時期以上のまとまりが想定される。ただ、遺物の時期差はあまり認められないことから、この集落の存続時期は長くはなく、この時期のみに限定されるものといえる。出土遺物の中には、形を復元することはできないが、製塩土器の破片が多くみられ、この集落でも塩づくりをおこなっていたことが想定される。また、須恵器の中には溶着して変形したものや、窯壁が付着したものもみられることから、近接して須恵器窯がつくられていたことが考えられる。また、時期は古代であるが、甕でつくられた小児棺をおさめた墓も検出されている。

南半部は、耕作地の区画で一段高くなっているが、北半部と同様に、遺物包含層の残存状況は良好である。遺構面は、中世後期の遺構面と地山面の2面が認められる。主に、中世後期の遺構面(上面)で遺構がまとまってみつかった。南端部で、方形にめぐる溝が検出され

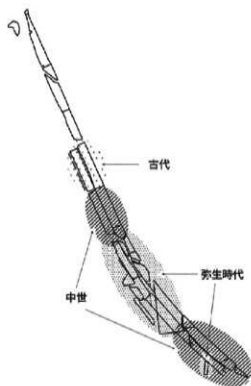


図14 遺構分布概略図

ており、多くの礫とともに瓦類が多量に出土している。同様に、中央南部でも隣接する北端部で瓦類が多量に出土している。これらは、調査区の東半部に集中しており、西半部ではみつかっていない。建物の配置などははっきりしないが、この部分から調査区東側にかけて広がる、寺院関連の建物が存在した可能性は高い。この寺院は、中世末に廃絶したものと考えられるが、これ以降、調査区内で近世の寺院跡や瓦類などは検出されていない。この地区の東側には、現在の馬場集落が存在することから、集落内に移転したことも想定される。地山面で検出される新たな遺構はあまりなく、古代以前の遺構は確認されていない。

中央南部では、整地による削平がほぼ全面にわたっており、遺物包含層の残存状況は悪いが、地山面において、弥生時代中期末の集落を検出した。他の地区に比べ遺構が密集しており、竪穴住居をはじめとして、柱穴と考えられるピット群が多量にみつまっている。集落は、西側に金熊寺川（男里川）を望む沖積段丘上に営まれている。調査区の西側縁辺部に段丘崖があり、これに沿って大溝が延びている。自然流路を利用したものと考えられるが、北半部で大きく蛇行して調査区内に入り込んだ後、再び西側へ延びる。このため、北半部は調査区のほとんどを大溝が占めているが、現代の水路が一部重複してつくられているため、全体を明らかにすることはできなかった。ただ、水路と重複していない部分の調査により、部分的には埋土や遺物の状況を確認することができた。その結果、大溝の存続時期は比較的短期間であり、土器や礫などで一気に埋められていることがわかった。遺物量はかなり多量であるが、完形のものや形を復元できるものがほとんどなく、集落内で不要となった土器を徐々に埋めたというような状況ではない。時期差もあまりなく、弥生時代中期末にほぼ限定されることから、良好な一括遺物である。これまでに泉南地域で、この時期の土器が一括で多量に出土した例はなく、貴重な資料ということができる。

集落内では、竪穴住居を32棟以上確認することができたが、規模、形状、構造などの点で多様にわたっており、同一集落内でこれほど異なった竪穴住居が同時に存在していたことは、稀な状況だと考えられる。また、竪穴住居は単独でつくられたものは少なく、建替えによる重複や拡張された状況を呈するものがほとんどである。大溝を除くと、全体に集落内からの遺物量は少なく、竪穴住居内からはさらに少ない。

南区は、整地による削平がほぼ全面にわたっており、遺物包含層の残存状況は良好ではない。遺構の検出状況も、本線内では、南端部で中世のピット群や土坑などのまとまりが一部検出されたのみである。これに対し、本線から南西に突出するかたちで設定された地下道部分では、狭い範囲内で近世の攪乱がみられるものの、遺構面が2面確認され、中世前期と弥生時代中期末の遺構が検出された。上面の遺構面では、中世前期の集落の一部を検出し、ピット群や土坑、鍛冶炉を扱った痕跡などがみられる。遺物では、瓦器椀や白磁碗などのほか、スラグやふいごの羽口なども出土し、金属加工がおこなっていたことがわかる。地山面では、弥生時代中期末の方形周溝墓を検出し、墳丘は削平されているものの、供献土器の一部が出土している。本線内でも方形周溝墓の一部と考えられる溝が検出されており、ほぼ完形に復元できる供献土器の一部が出土している。このため、複数の方形周溝墓が存在することが判明し、集落と同時期であることから、全容ははっきりしないものの、集落からやや離れた地区に設けられた墓域と考えることができる。

第6章 調査成果

約10年に及ぶ調査で、調査区がかなり細分されている。このため、同一の遺構を複数年にわたって分割したかたちで調査した部分が多く、統一的ではないため、調査担当者により解釈が異なる場合もある。今回の整理にあたっては、第3章で述べたように、なるべく統一化した状況で全体をみることができるようにした。調査時点で、調査区毎に個別の成果は簡単にまとめられていたが、全体をまとめたことがなく、最終の整理段階になって、ようやく時期毎の様相をみることができるようになった。このため、ここでは調査区や調査年次にこだわらず、時期別にまとめていくことにする。

第1節 縄文時代以前の遺物

調査区内で、縄文時代以前の遺構は検出されておらず、遺物包含層も確認されていない。男里遺跡全体でも、縄文時代以前の遺構は検出されておらず、部分的に北端部で晩期の遺物包含層がみつかったのみである。近いところでは、男里川の支流である菟砥川と山中川にはさまれた丘陵上に、後期から晩期の集落である向出遺跡が存在していることから、集落などの生活の痕跡が残っている可能性はあるといえる。また、調査区の西側にある、双子池からも縄文晩期末から弥生前期の遺物が出土している。

調査区内で出土した縄文土器は8点である(図16、図版30)。器形や時期に差はあるが、いずれも後世の遺物包含層や遺構埋土からみつかったもので、ほとんど磨耗した状況である。出土地点を図示した(図15)が、特に集中はみられない。ただ、後の弥生集落が営まれる段丘上に分布していることから、縄文時代にこの部分で建物などがつくられていた可能性も考えられる。また、縄文時代のものと考えられる石鏃も出土しているが、弥生時代の石鏃などと混ざっているため、打製石器は弥生時代の項でまとめて述べることにする。

図16-1は、深鉢の胴部で、一辺約10cmの破片である。比較的焼成が良好で、外面に約8mm幅の半截竹管による垂下沈線が平行に施されている。内面には指頭圧痕がはっきりと残っている。胎土は暗褐色を呈しており、生駒西麓産と考えられる。後世の遺構埋土から出土しているが、保存状態がよく、この個体に限っては、ほとんど磨耗をうけておらず、あまり遠くからもたらされたものとは考えられない。出土地付近から他の個体はみつからないが、この付近で使用されていたことが想定される。船元Ⅲ式の特徴をもったものであることから、縄文中期末から後期初頭と考えられ、現在のところ、男里遺跡で最古の土器である。泉南地域では、中期以前の土器の出土例は数点しかない。

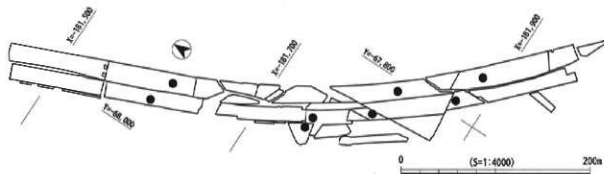


図15 縄文土器出土位置図

2は、深鉢の胴部と考えられ、一辺約2cmの破片である。外面に約3mm幅のやや太い沈線が施されている。沈線に隣接した部分に、縄文と考えられるような痕跡がわずかに残る。小破片のためはっきりしないが、瀬戸内の福田KⅡあるいは一乗寺K式の特徴をもった文様ということができ、後期の宮滝式直前と考えられる。3は、器形ははっきりしないが、口縁部に近い部分の破片である。胎土は灰色から暗灰色を呈している。内面に凹線が施されており、宮滝式の特徴をもった文様と考えられる。4は、浅鉢の胴部と考えられ、縦約2.5cm、横約4cmの破片である。外面には、水平方向に延びる2本の平行沈線と、斜め方向にのびる2本のU字状の沈線が施されている。他の土器に比べ、やや白っぽい胎土である。小破片のため文様の全容などは不明であるが、北白川上層式の特徴をもった文様ということができ、後期と考えられる。5は、深鉢の胴部と考えられ、縦約2.5cm、横約5cmの破片である。外面に約2mm幅の沈線が施されており、隣接した部分に、斜め方向の縄文が明瞭に残っている。胎土は暗褐色を呈している。弥生集落の堅穴住居埋土から出土しているが、かなり磨耗しており、割れ口が丸みを帯びている。小破片のためはっきりしないが、元住吉山式の特徴をもった文様ということができ、後期と考えられる。6は、波状口縁をもつ深鉢の口縁部と考えられ、波頂部分の破片である。胎土は暗褐色を呈しており、生駒西麓産と考えられる。口縁部は強い屈曲によって強調されており、外面は鈎状に突出している。口縁端部外面には沈線が施されるほか、鈎状に突出した部分の上部にも2本の平行した沈線が見える。また、鈎状に突出した部分の下部には、全容ははっきりしないものの、渦巻きと考えられる文様が施されている。元住吉山式の特徴をもった文様ということができ、後期と考えられる。図版30-1413は、深鉢の胴部と考えられ、縦約2.5cm、横約6cmの破片である。外面に約2mm幅の縦方向の沈線が、複数施されている。胎土は黒褐色を呈している。小破片のため文様の全容などは不明であるが、北白川上層式の特徴をもった文様ということができ、後期と考えられる。

7は、深鉢の口縁部である。口縁端部にやや幅広い突帯を巡らせており、下部と上面に刻目が施されている。さらに屈曲する肩部にも刻目突帯が巡らされている。胎土には砂粒が多く含まれており、やや白っぽい。船橋式と考えられ、晩期である。調査区内で出土した縄文晩期の土器は1点であるが、男里遺跡内でみつかった縄文晩期の土器の中では古いものである。

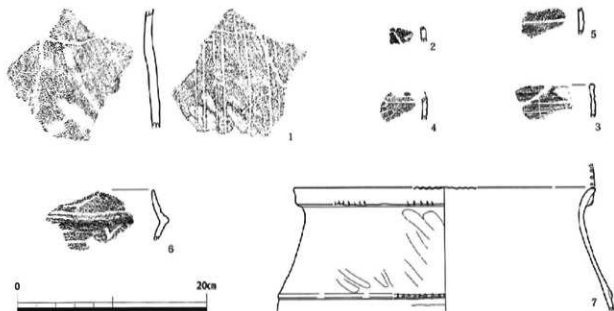


図16 縄文土器

第2節 弥生時代の遺構・遺物

従来、男里遺跡は弥生時代中期の遺跡として認識されていたが、調査面積が狭く、実態はあまりつかめていなかった。今回の調査では、部分的ではあるが、弥生時代中期末の集落をまとめたかたちで確認することができた。竪穴住居を主体とした居住域と墓域のセット関係が明らかになるとともに、集落に伴う大溝が検出された。竪穴住居をはじめとして居住域からの遺物出土量は少ないが、大溝から多量の遺物が出土したことで、弥生集落の時期を示す良好な資料を得ることができた。さらに集落の周辺部で、遺物包含層よりほぼ形の復元できる土器が数点出土している。ここでは、弥生時代の成果を弥生集落の居住域、大溝、墓域と周辺部の遺物出土状況に分けて述べることにする。

1. 居住域

弥生集落は、主に調査区のうち中央南区に広がっており、やや離れて南区の西側に墓域をもつ。居住域は中央南区のほぼ全面に展開しており、30棟余りの竪穴住居と多量のピット群が検出された。今回の調査で明らかとなった部分は、弥生集落のうち西端部分と考えられる。南北方向にトレンチをいれたかたちとなったため、竪穴住居などの遺構の分布状況から、弥生集落の居住域の規模は、南北約200mと推定することができる。調査区の東側では調査がほとんどおこなわれていないため、遺構の分布状況は不明である。ただ、現地地形からの推測では、東西約100mの規模をもっていたものと考えられる。

(1) 層序

弥生集落の居住域にあたる遺構密集部分は、現在の交差点がつくられているため、横切る道路などにより、調査区がかなり細分されている。この部分で、弥生時代の遺構が多く検出されたことから、弥生時代の堆積状況を見るために、トレンチの壁断面をあげておく。調査区が細分されていることから、調査時の壁断面の方向は異なっていたが、反転して同一方向からの視点にそろえている。主に中央南区のうち、遺構の密集している部分（K区南部西壁・P区北部東壁・T区東壁）の断面図を採用した。

K区南部西壁は、居住域の北端部で大溝に隣接する部分にあたる。ここでは、旧耕作土層が約20cm堆積しており、地山面まで達している。中世後期以降の整地などにより、弥生時代の遺物包含層がほとんど削平されている状況であるため、旧耕作土層を除去すると地山面が現れ、そのまま弥生時代の遺構検出ができるほどであった。遺構面も表面は削平されているものと考えられ、ピットや竪穴住居などは上部が失われている可能性が高い。地山は、砂混じりシルト層と礫より小さい礫を多く含む層が混在している。礫層はかなり締まっているが、遺構の分布状況に差はない。

P区北部東壁は、居住域の北部にあたり、竪穴住居が密集する部分である。ここでも、旧耕作土層が約20cm堆積しており、地山面まで達している部分もある。中世後期以降の整地などにより削平を受けているが、弥生時代の遺物包含層は、おおむね5～10cmほど残存している。ただし、全体に遺物包含層からの遺物出土量は少ない。古代や中世の遺物包含層は認められない。地山は、砂混じりシルト層と礫より小さい礫を多く含む層が混在しているが、ここでは締まった礫層部分は比較的少ない。

T区東壁は、居住域の南部にあたり、竪穴住居やピット群が北部の密集部分に比べて、やや少なくなる部分である。地山面は南に向かって緩やかに上がる傾向であるが、盛土はさらに厚く堆積しており、南端部では約1.2mにもおよぶ。また、区画により堆積状況の違いはあるが、旧耕作土も20～80cm堆積しており、中世後期以降の整地が頻繁におこなわれていたことがわかる。この部分でも、遺物包含層の削平は免れておらず、残存していない部分のみみられる。古代や中世の遺物包含層はみられないが、地

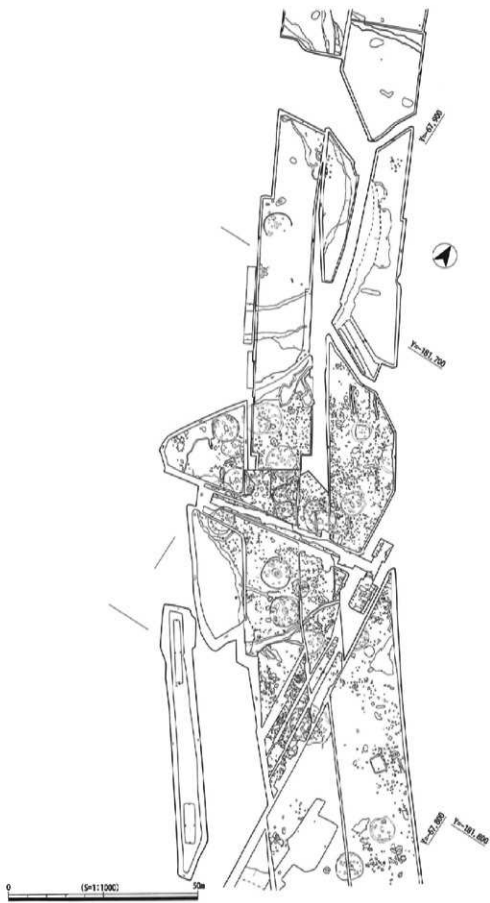
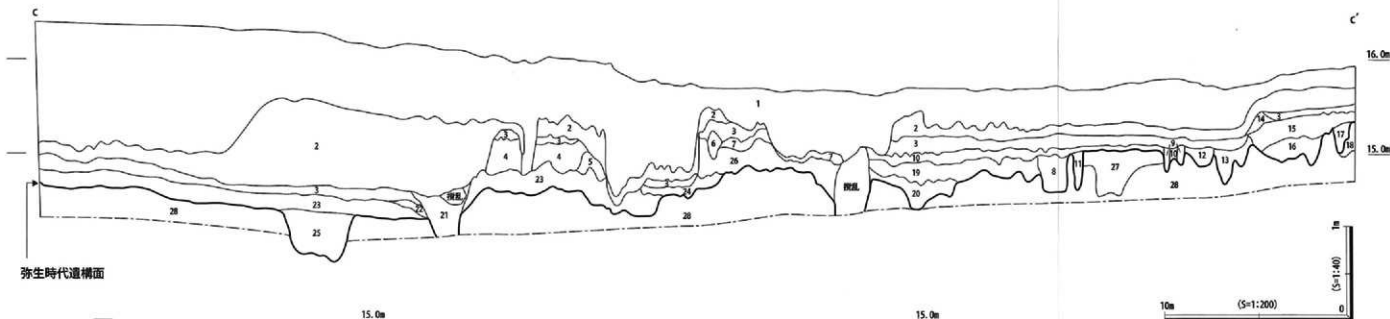
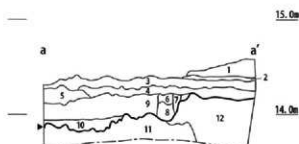


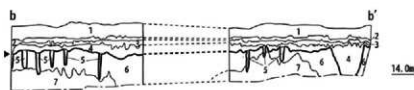
圖17 弥生時代遺構平面圖



弥生時代遺構面



- | | |
|---------------------------------|---------------------------------|
| 1. N 5/0 灰色 シルト | 7. 10YR 5/2 褐色 砂混じりシルト |
| 2. 10YR 7/2 にぶい黄褐色 砂混じりシルト | 8. 10YR 7/4 にぶい黄褐色 砂混じりシルト Fe含む |
| 3. 10YR 7/4 にぶい黄褐色 砂混じりシルト 粘土含む | 9. 10YR 5/2 褐色 砂混じりシルト 粘土含む |
| 4. 10YR 7/4 にぶい黄褐色 砂混じりシルト | 10. 10YR 5/2 灰黄褐色 砂混じりシルト |
| 5. 10YR 7/3 にぶい黄褐色 砂混じりシルト | 11. 10YR 5/2 褐色 礫 |
| 6. 10YR 7/2 にぶい黄褐色 砂混じりシルト | 12. 10YR 7/6 明黄褐色 砂混じりシルト |



- | |
|---------------------------|
| 1. 2.5Y 4/1 黄灰色 シルト |
| 2. 2.5Y 5/1 黄灰色 シルト |
| 3. 10YR 6/8 明黄褐色 粘土質シルト |
| 4. 10YR 4/3 にぶい黄褐色 粘土質シルト |
| 5. 10YR 5/2 にぶい黄褐色 粘土質シルト |
| 6. 10YR 5/2 にぶい黄褐色 砂質シルト |
| 7. 礫層 |

- | | | |
|---------------------|---------|--------|
| 1. 盛土 | | |
| 2. 7.5Y 6/1 灰色 | シルト | |
| 3. 5YR 5/8 明灰褐色 | 粘土 | |
| 4. 2.5Y 6/2 灰黄色 | シルト | |
| 5. 10YR 7/3 にぶい黄褐色 | 礫混じりシルト | 礫多量に含む |
| 6. 10YR 7/3 にぶい黄褐色 | 礫混じりシルト | 粘土含む |
| 7. 10YR 5/2 灰黄褐色 | シルト | |
| 8. 10YR 5/3 にぶい黄褐色 | シルト | |
| 9. 10YR 7/3 にぶい黄褐色 | 礫混じりシルト | 粘土含む |
| 10. 10YR 7/8 明黄褐色 | 礫混じりシルト | 粘土含む |
| 11. 10YR 6/2 灰黄褐色 | シルト | |
| 12. 10YR 7/3 にぶい黄褐色 | 礫混じりシルト | 礫多量に含む |
| 13. 10YR 7/3 にぶい黄褐色 | 礫混じりシルト | 粘土含む |
| 14. 10YR 7/4 黄褐色 | 粘土 | |
| 15. 10YR 5/4 にぶい黄褐色 | 礫混じりシルト | 粘土含む |
| 16. 10YR 5/2 灰黄褐色 | シルト | |
| 17. 10YR 4/2 灰黄褐色 | シルト | |
| 18. 10YR 5/3 にぶい黄褐色 | シルト | |
| 19. 2.5Y 5/3 灰黄色 | 礫混じりシルト | |
| 20. 10YR 7/3 にぶい黄色 | 礫混じりシルト | 礫多量に含む |
| 21. R 7/0 灰色 | 粘土 | |
| 22. 10YR 7/8 黄褐色 | シルト | |
| 23. 7.5YR 5/2 灰褐色 | シルト | |
| 24. 2.5Y 6/2 灰黄色 | シルト | |
| 25. 10YR 3/2 黄褐色 | シルト | |
| 26. 10YR 7/4 黄褐色 | 礫混じりシルト | |
| 27. 10YR 8/6 黄褐色 | 礫混じりシルト | |
| 28. 10YR 5/3 にぶい黄褐色 | シルト | |

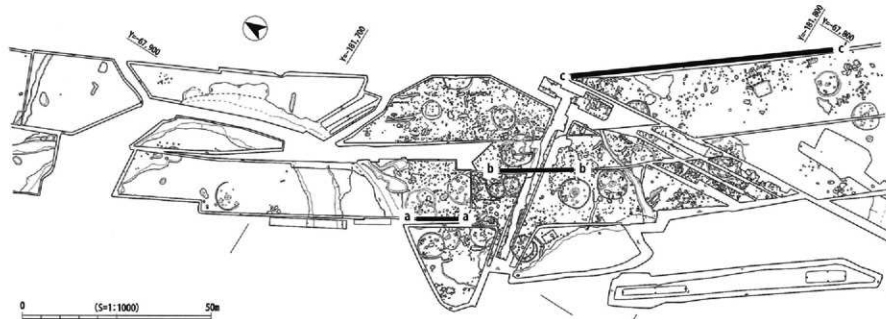


図18 弥生時代遺構検出部分土層断面図

山直上に残る弥生時代の遺物包含層が、10～40cm程度確認できる。黄褐色シルト層が主体であるが、径1～5cmの礫を含む。ただし、全体に遺物量は少なく、形を復元できるものはほとんどなく、小破片のみである。地山は、にぶい黄褐色シルト層が主体であるが、ほかと同様に、拳大より小さい礫で構成された礫層が部分的に露出している。礫を多く含むことから、全体に締まった状況である。

中央南区では、層序は上から盛土、旧耕作土、床土、遺物包含層であり、厚さの違いはあるものの、基本的には同じ堆積状況である。ただし、中世後期以降の度重なる造成により、中世や古代の遺物包含層は削平されており、一部地山まで及んでいる。さらに、集落に近いことから、近代以降の道路や水路の整備による攪乱が随所に見られる。特に、北半部のⅠ区では、現代の建物の基礎部分が残存していたため、整地によって遺物包含層は削平されており、基礎による攪乱が多い。そのため、遺構検出面は地山面であり、ほとんどが弥生時代のものである。一部上部を削平されているものの、遺構の保存状態はほぼ良好であり、竪穴住居や多くのピット群などが密集したかたちで検出された。

(2) 竪穴住居

弥生集落の主体をなすのは、竪穴住居である。今回の調査では32棟が確認されたが、重複するものがあることから、さらに多くの竪穴住居が存在する可能性は高い。竪穴住居が密集する地区で、調査区が細分されていることから、竪穴住居の調査にあたっても複数の調査区に分割され、調査年次が異なるものが多い。このため、調査担当者が異なるなど、同一条件で調査された竪穴住居が少なく、成果に若干の差異が認められる。整理にあたって、なるべく統一的な見解でまとめるようにしたが、そろわない部分もあり、疑問の残る成果もみられる。ここでは、調査時の見解を尊重するようにし、あえて無理な統一ははからないこととした。そのため、平面図の表現等に不統一が見られる部分がある。

竪穴住居は、調査終了時にすべて砂による埋め戻しによって遺構保存されている。諸条件の違いから、調査終了時の形状に若干の違いが生じている。基本的には全掘するようにつとめたが、平成15年度の調査(その9)では、将来的に埋土を再検証することを考慮し、あえて土層観察用畦を残したまま埋め戻している。このため、平面図にも土層観察用畦を表現するようにした。

竪穴住居は、調査時の見解の差異はあるものの、構造や規模などが多種にわたっており、同様の住居で構成された集落とはいえない状況である。また、重複してつくられているものが多く、建て替えや拡張が頻繁におこなわれていたことが想定される。後述するが、地山が軟らかいシルト層で掘削が容易な場所が空いているにもかかわらず、礫層で固く締まっている場所で建て替えをおこなっている状況がみられる。さらに、分布状況にもやや偏りがみられる。

中央南区の北半部は、大溝が縦断していることから、他の遺構はほとんど検出されていないが、大溝を隔てた対岸部分で竪穴住居が検出された。このことは、大溝が集落を画するものではなく、両側に建物が存在していたことを表している。以前に、調査区の西側でおこなわれた泉南市教育委員会の調査で竪穴住居がみつまっていることから、複数の竪穴住居が大溝を隔てた西側にひろがっている様子がうかがわれる。大溝のすぐ南側の中央部は、竪穴住居が密集したかたちで検出された。重複したものがほとんどで、単独のものは少ない。密集するなかで若干のまとまりは認められるが、位置的なもののみで、意味合いを探るまでには至っていない。また、僅々の重複関係は解明できるものの、時期別の隣接する竪穴住居とのセット関係などは、はっきりしない部分が多い。南半部では、竪穴住居は重複したものはなく、単独でつくられており、数も急に減る。

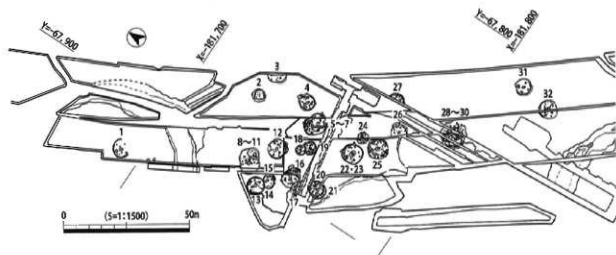


図19 竪穴住居分布図

前述したように、竪穴住居は同じものでも、調査年次が異なることから、複数の遺構名称が与えられているものがほとんどであった。そのため、今回の整理では新規に番号をつけ、混乱のないようにした。基本的には北から順番につけたものであり、重複関係などを考慮したものではないため、新旧で番号が逆転することもありうる。

竪穴住居1 (図20～22、図版3、31)

中央南区の北端部にあたるK区の北半部で検出された。弥生集落の西側を走る大溝がやや東に屈曲し、調査区を横切った北側に位置しており、弥生集落とは大溝を隔てた対岸にあたる。この部分では単独で検出されており、調査区内で隣接する竪穴住居はみつかっていない。地山まで及ぶ削平をうけているため、上部は失われており、床面付近がろうじて残存しているのみである。さらに南東部は、床面まで削平されているため、壁溝も失われている。

平面略円形を呈しており、全容は不明であるが、規模は、最大径約7.4mを測る。深さは、最も残存状況が良い北側部分で5cmが遺存している。ほとんど埋土が残存していない状況であるが、貼床は確認されていない。埋土は、にぶい黄褐色砂質土である。建て替えや拡張はおこなわれていない。

内部でピットは多く検出されているが、支柱穴は4基と考えられる。いずれも平面円形または楕円形を呈しており、残存部で径30～50cmを測る。他の柱穴に比べて北西部の柱穴が若干大きい。埋土は、黒褐色粘質土である。壁溝は、全周するものと考えられるが、南東部は失われている。規模は、検出面で幅約30cm、深さ5cmを測り、断面U字状を呈する。埋土は、住居埋土と同じにぶい黄褐色シルトである。壁溝内部からは、杭の痕跡は確認されていない。

中央よりやや西側で土坑が検出されており、南北方向がやや長い平面楕円形を呈する。規模は、検出面で長径1.6m、短径1.1m、深さ0.4mを測り、断面U字状を呈する。埋土は、2層に分かれており、上からにぶい黄褐色粘質シルト、黒褐色砂混じり粘質土である。炉として使われたものといえるが、あまり顕著な炭層はみられない。下層には炭化物を多量に含んでいる。また、近接して2基のピットが検出されており、埋土は、にぶい黄褐色シルトが主体で、炭化物を多量に含んでいる。これらは、炉とはいえず、炉に付随して灰や炭などを蓄えるピットと考えることができる。他に関連する遺構は検出されていない。

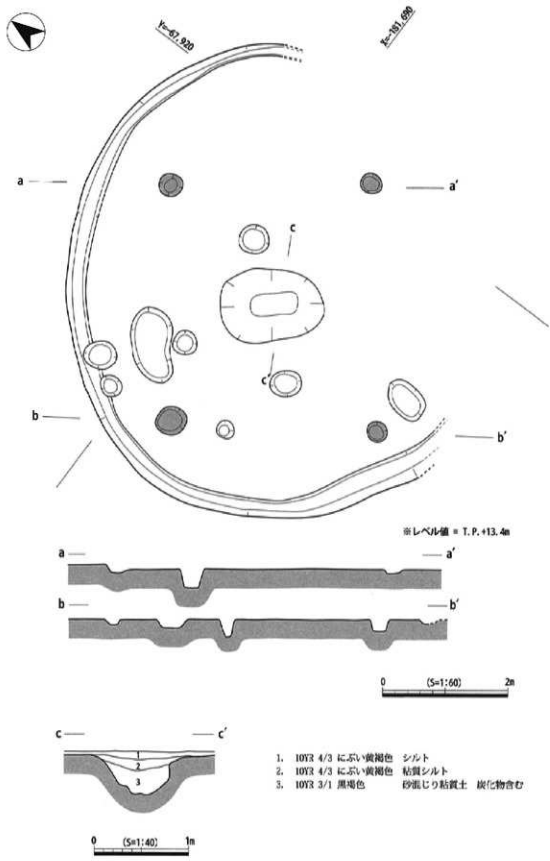


図20 竪穴住居 1 平・断面図



図21 竪穴住居1出土土器

遺物は、埋土中から弥生土器が少量出土した。形を復元できるものではなく、図化できた土器片は4点である。図21-8は、壺の肩部で、水平方向の直線文と波状文の帯描文が明瞭に残る。交互に描かれており、各3本の単位で確認できる。9は、壺の口縁部である。口縁部が、くの字状にほぼ直角に外反する。10・11はいずれも底部で、壺か甕の明確な区別はできない。底部外面に、指によるナデ調整の痕跡が明瞭に残る。図22-12は、砥石であるが、台石の可能性もある。砂岩製で、周縁に打撃痕があり、一部割れている。

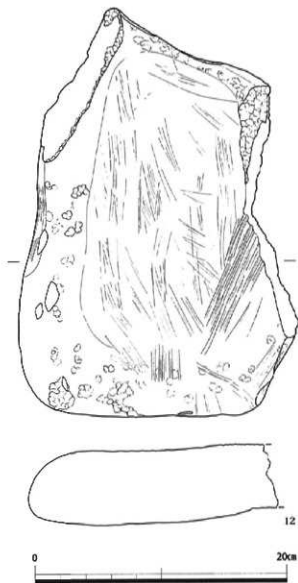


図22 竪穴住居1出土磨製石器

平面形は不整形を呈しており、規模は、検出面で最大径約5.5m、深さは、中央部で30cmを測る。東側を除いた部分の壁面に沿って、削り出しにより幅0.6～1.0mの高床部が巡っており、中央部の床面との比高差は約25cmある。中央部は、隅丸方形を呈しており、一辺約3.5

竪穴住居2 (図23、24、図版3、31)

中央南区の中央東側にあたるL区のやや北寄りで見出された。弥生集落の竪穴住居が密集した部分の東側に位置しており、竪穴住居3と約5m離れて隣接する。周囲にはピット群や土坑がみられるが、竪穴住居の重複はなく、単独で見出されている。地山まで及び削平をうけているため、上部はやや失われている。

平面形は不整形を呈しており、規模は、検出面で最大径約5.5m、深さは、中央部で30cmを測る。東側を除いた部分の壁面に沿って、削り出しにより幅0.6～1.0mの高床部が巡っており、中央部の床面との比高差は約25cmある。中央部は、隅丸方形を呈しており、一辺約3.5

mを測る。壁溝や貼床は確認されていない。円形の竪穴住居と方形の竪穴住居の重複したかたちとも見えるが、単独の建物であり、建て替えや拡張がおこなわれたものではないと考えられる。内部でピットは多く検出されているが、支柱穴は4基と考えられる。いずれも平面円形または楕円形を呈しており、残存部で径約20cmを測る。内部からは、杭の痕跡は確認されていない。

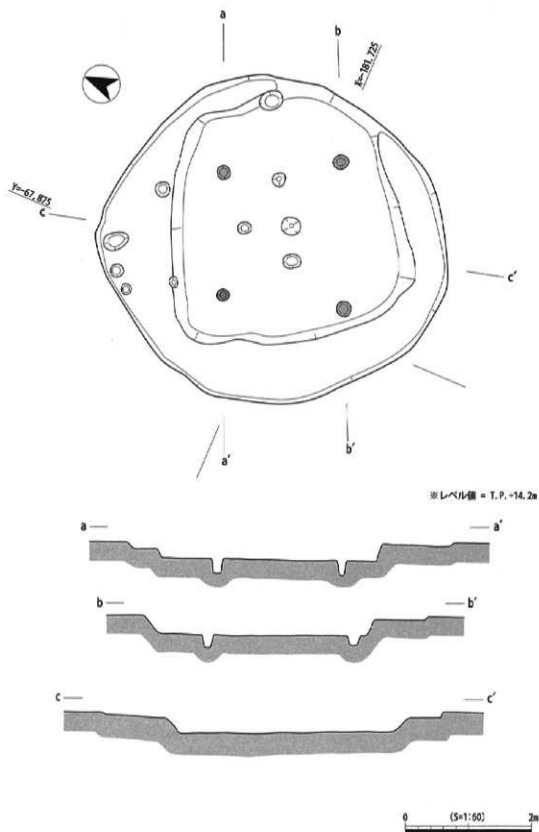


図23 竪穴住居2平・断面図

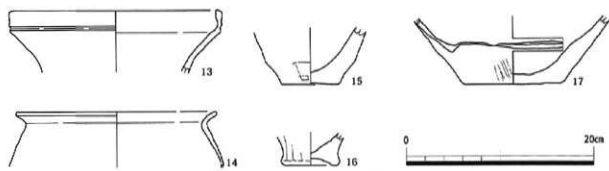


図24 竪穴住居2出土土器

中央部のほぼ中央に位置する土坑がみつかり、柱穴とほぼ同様の平面楕円形を呈する。規模は、検出面で径約30cmを測るが、炭化物などはみつかっておらず、炉の可能性は低い。ただし、竪穴住居1と同様に近接して2基のピットが検出されている。いずれも炭化物は含んでいないが、炉に付随して灰や炭などを蓄えるピットの可能性も考えられ、総合すると竪穴住居の炉関係施設と見ることもできる。他に関連する遺構は検出されていない。

遺物は、埋土中から弥生土器が少量出土した。形を復元できるものではなく、区化できた土器片は5点である。図24-13は、受け口状口縁の壺である。口縁部には文様はみられない。14は、甕の口縁部である。口縁部が、くの字状にほぼ直角に外反する。やや口縁部が広がる。15は底部で、壺か甕の明確な区別はできない。外面に横方向のヘラケズリ調整が施されている。16は甕の底部である。蓋の可能性もある。外面に縦方向のヘラケズリ調整が施されている。17は壺の底部である。

埋土をはじめ、周辺の溝や土坑から多量のサヌカイトが出土している。平面形がやや特異なかたちであり、生活の痕跡があまりないことから、石器製作工房の可能性も考えられる。この形状の竪穴住居は、調査区内でみつかっておらず、現在のところこの1棟のみである。他の遺跡の検出例としては、同様の竪穴住居が、徳島市の矢野遺跡でみつまっている。この例は弥生後期であり、竪穴住居2とは時期が異なるが、形状は類似している。ここでは、テラス状の張り出し部がつくられているが、竪穴住居2では確認されていない。

竪穴住居3 (図25、26、32、図版4、31)

中央南区の中央東側にあたるL区の東端部で検出された。弥生集落の竪穴住居が密集した部分の東側に位置しており、竪穴住居2の南東で約5m離れて隣接する。ほぼ西半部が検出されており、東半部は調査区外に広がる。周囲にはピット群や土坑がみられるが、竪穴住居の重複はなく、単独で検出されている。壁溝は部分的に認められる。

平面形は不整円形を呈しており、全容は不明であるが、規模は最大径約8.0m、深さは、40cmを測る。埋土は、褐色シルトが基本である。床面付近に暗褐色シルト層が認められ、貼床の可能性もあるが、一部のピットの埋土にもなっているため、はっきりしない。建て替えや拡張はおこなわれていない。

内部でピットは多く検出されているが、全容が不明なことから、主柱穴は確定できない。いずれも平面円形または楕円形を呈しており、径30～60cmを測る。埋土は、褐色シルトが主体で、黄褐色シルトが入るものもみられる。壁溝は全周するものと考えられるが、一部ははっきりしない部分もある。規模は、検出面で幅10～20cm、深さは最大で約5cmを測る。埋土は、住居埋土下層と同じ暗褐色シルトである。壁溝内部からは、杭の痕跡は確認されていない。中央土坑は、調査区外にあるものと考えられ、検出されていない。

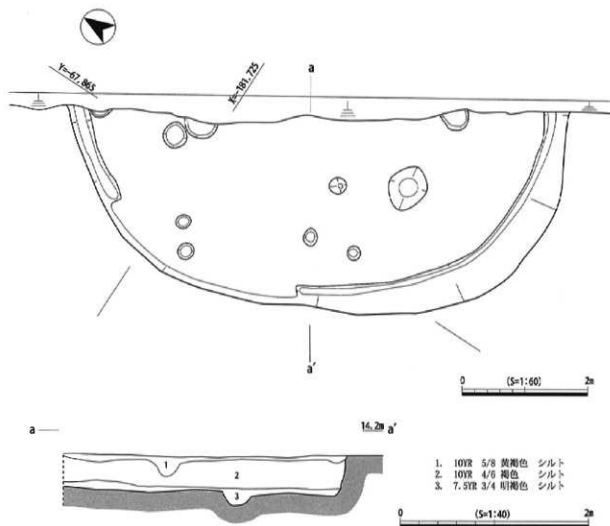


図25 竪穴住居3平・断面図

遺物は、埋土中から弥生土器が比較的多量に出土したが、完形に復元できるものはなかった。図26-18は、壺の口縁部である。口縁端部を肥厚させており、やや上につまみあげている。外面には凹縁が巡る。19は、受け口状口縁の壺である。口縁部外面には上半部に竊状文、下半部に斜め方向の刺突文が施されている。口縁端部は内湾する。20は、壺の口縁部である。口縁部内面には斜め方向の刺突文が2列施されている（内側のものは扇形文気味）。21は、直口壺の口縁部である。口縁がやや内湾している。口縁部内面は肥厚しており、外面には突帯が1条施されている。22は、壺の口縁部である。口縁端部は、断面T字状につまみあげており、外面に凹縁が巡る。頸部にも凹縁が巡る。23は、真鍮壺形土器の口縁部である。口縁部内面は肥厚しており、口縁端部外面には、幅約5mmの太い凹縁が巡る。内面には指頭圧痕がみられ、外面にはタタキ目が残っている。24は、壺の口縁部である。口縁端部を下方方向に広げている。口縁部内面には、斜め方向の刺突文が施されており、外面には凹縁が巡る。

25は、高杯脚台部である。最終的には蓋に転用されていたものと考えられる。脚部部分に煤が付着している。26は、高杯杯部の口縁部である。口縁部内面は肥厚しており、やや内湾している。27は、甕の口縁部である。口縁部が、くの字状にはほぼ直角に外反する。口縁端部をやや下方方向に広げている。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。28は、甕の口縁部である。口縁部内面は肥厚している。29は、

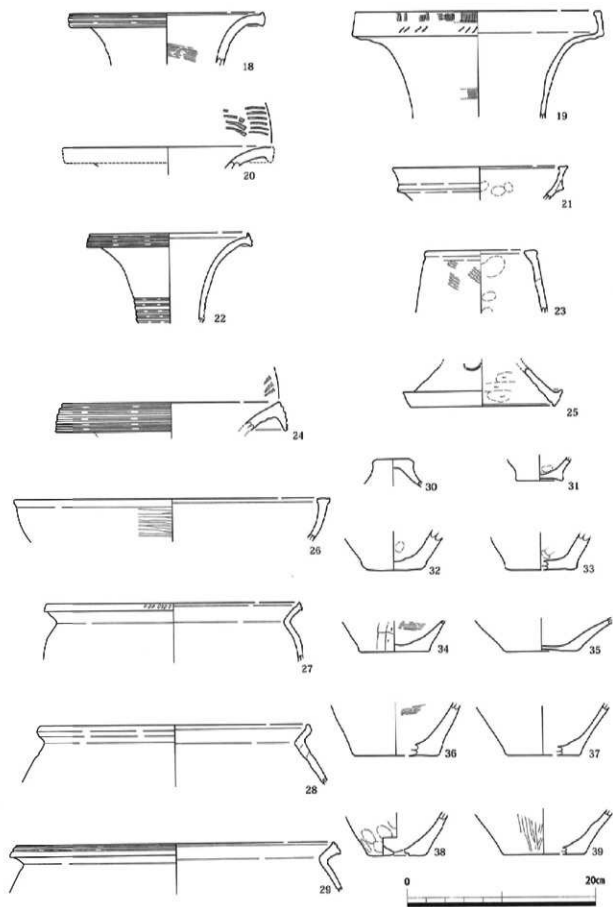


图26 整穴住层3出土土器

裏の口縁部である。口縁端部は肥厚しており、外面に凹線が巡る。30は、蓋である。31は、裏の底部で、底はややへこんでいる。32は、真蛸壺形土器の底部である。底はやや丸みを帯びる。内面には指頭圧痕がみられる。33は、裏の底部と考えられるが、真蛸壺形土器の可能性もある。34は、裏の底部である。外面には縦方向のケズリが見られ、底は平坦である。35は、壺の底部で、底はややへこんでいる。36は、真蛸壺形土器の底部である。底は平坦である。37は、壺の底部で、底は平坦である。38は、甔の底部である。裏を転用したものととも考えられるが、底に焼成前穿孔が施されていることから、用途を限ってつくられたものと判断した。外面には、指頭圧痕が顕著にみられる。39は、壺の底部で、底は平坦である。外面には、縦方向のヘラミガキがみられる。

石器では、図32-60～63の石畿が出土している。60は凸基式で、先端と基部が欠損している。61は凸基Ⅱ式で、ほぼ完形品である。62は有茎式で、基部が欠損するほか、一部摩滅している。63は凹基式で、かえり部が一部剥離している。

竪穴住居4（図27、28、31、32、図版4、31）

中央南区の中央東側にあたるL区の南半部で検出された。弥生集落の竪穴住居が密集した部分の東側に位置しており、竪穴住居5・6・7と約2.5m離れて隣接する。また、竪穴住居3の南に位置しており、約10m離れている。周囲にはピット群や土坑がみられるが、竪穴住居の重複はなく、単独で検出されている。壁溝は全周している。

平面略円形を呈しており、規模は、最大径約6.5m、深さ約30cmを測る。埋土は、3層に分かれており、上から明黄褐色シルト、暗褐色粘質シルト、褐色粘質シルトである。床面付近に褐色粘質シルト層が認められ、貼床とも考えられるが、この層より下で炉やピットなどが検出されているため、可能性は低いものといえる。建て替えや拡張はおこなわれていない。

内部でピットは多く検出されているが、主柱穴は4基と考えられる。いずれも平面円形または楕円形を呈しており、残存部で径30～80cm、深さ30～40cmを測る。大きさはそろっておらず、北西部の柱穴が小さく、南東部の柱穴が大きい。埋土は、褐色粘質シルトが主体であり、暗褐色粘質シルトが入るものも見られる。壁溝は全周しており、規模はやや大きく、検出面で幅約45cm、深さ15cmを測り、断面U字状を呈する。埋土は、明褐色粘質シルトである。壁溝内部からは、杭の痕跡は確認されていない。

ほぼ中央で、土坑が検出されており、東西方向に長い平面長楕円形を呈する。規模は、検出面で長径1.8m、短径0.9m、深さ0.4mを測り、断面U字状を呈する。埋土は、褐色粘質シルトである。炉として使われたものといえるが、あまり顕著な炭層はみられない。内部の両端でピットが検出されており、特異な形状といえることができる。このような炉をもつ竪穴住居は、いわゆる「松菊里型住居」と呼ばれる形状に類似するものと考えられる。中央土坑の形状からみると、「松菊里型住居」のうち、「休岩里型住居」の形状に類似している。松菊里遺跡は、弥生時代早期に相当する時期のもので、男里遺跡で検出された弥生集落とは、時期が大幅に異なる。ただし、現在までに日本で検出されている「松菊里型住居」は、弥生時代早期から九州を中心にみられるが、形態を変えながら弥生時代中期まで存続している。本来の「松菊里型住居」は、中央土坑と両端の2本の主柱穴のみで構成されているものであるが、これ以外に4本以上の主柱穴が配置されるものを「発展松菊里型住居」と呼んでいる。この形状は、日本における「松菊里型住居」の最終段階のもので、弥生時代前期から中期前半まで見られる。男里弥生集落は、弥生時代中期末であるが、竪穴住居4は明らかに4本の主柱穴を持っていることから、「発展松菊里型住居」に属するものといえる。近畿地方で見られる「松菊里型住居」は、時期的にも新しいものが多い

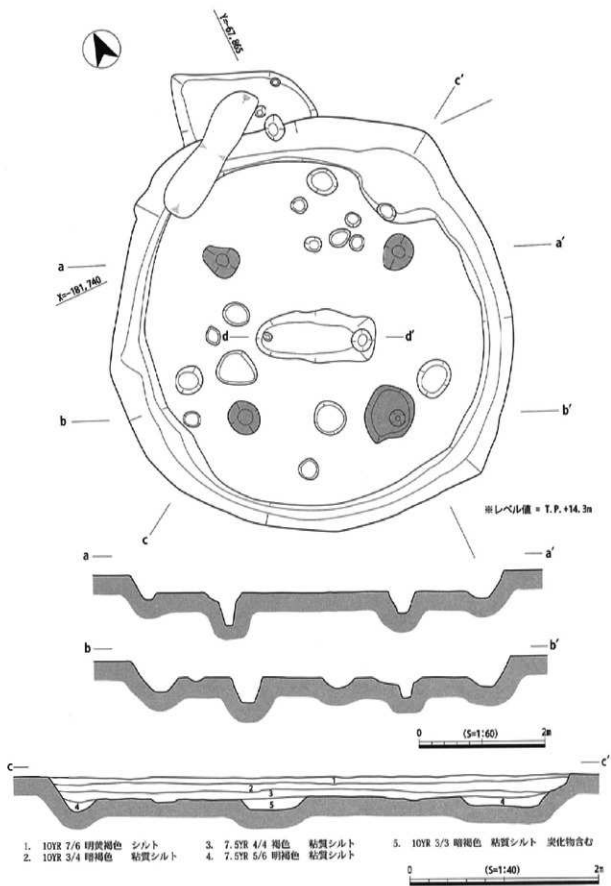


図27 竪穴住居4平・断面図

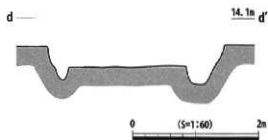


図28 竅穴住層4中央土坑断面図

や香川県（坂出市下川津遺跡）で類例が報告されており、「出入口」の可能性が指摘されている。直接の関連性は今のところ不明であるが、地理的に十分交流できる場所であるため、無関係とは言い切れないものと考えられる。

この他に、やや大きめのピットが見られるため、炉に付随して灰や炭などを蓄えるピットの存在も考えられる。ただし、埋土から炭化物などは検出されていないため、可能性のひとつとしてあげておくのみとする。

遺物は、埋土中から弥生土器が多く出土しているが、完形に復元できるものはなかった。出土状況に関しては、特に集中するなどの特徴はなかった。図31-41は、壺の口縁部である。口縁部などに文様はみられない。42は、壺の口縁部である。口縁端部を肥厚させており、外面に凹線が巡る。43は、受け口状口縁の壺である。口縁端部はやや開き気味で、外面には文様はみられない。44は、甕の上半部である。口縁部は、くの字状に外反するが、角度はゆるい。胎土に結晶片岩を含んでいないが、紀伊産と考えられる。45は、細頸壺の口縁部である。外面に凹線が密に巡っており、口縁端部には円形浮文が3点一組で付けられている。また、中ほどには斜め方向の刺突文が1列巡っている。口縁端部はやや内湾気味である。胎土の特徴から紀伊産と考えられる。46は、壺の口縁部である。口縁端部を下方に広げている。内面には指頭圧痕などの調整痕跡が残る。胎土の特徴から生駒西産産と考えられる。47は、甕の口縁部である。口縁部は、くの字状にほぼ直角に外反する。胎土の特徴から紀伊産と考えられる。48は、小型壺の底部と考えられる。手づくねでつくられている。49は、甕の底部で、底はややへこんでいる。50は、底部で、壺か甕の明確な区別はできないが、外面に縦方向の調整痕が残る。51は、真鍮壺形土器の下半部である。底は平坦である、内面には指頭圧痕がみられるほか、底部内面にはヘラ状工具による調整痕が明瞭に残る。

石器では、各種の製品が出土している。図32-64・65・67は、石鏃である。64は有茎式で、先端部が欠損しているほか、基部が摩滅している。65は凸基Ⅱ式で、基部が一部摩滅している。67は凹基無茎式で、先端部が欠損している。縄文時代の混入品である。66・68～70は石鏃である。66は、石鏃を転用したもので、先端部が欠損している。68はⅠ類で、上端部が欠損しており、鏃部に使用痕がみられる。69と70はⅢ類で、上下両端の鏃部に使用痕がみられる。70は、金山産の可能性がある。71は、石槍であるが、石小刀の可能性もある。基部の破片であり、上下を大幅に欠損している。一部に自然面が残存している。72は、石鏃の未成品と考えられるが、確定できない。片面に大きな剥離面が残存している。73は、スクレイパーである。刃部に細かい剥離があり、片面には自然面や大きな剥離面が残存している。

ことから、九州などのように、直接的に渡来したものと考えることはできないようであるが、間接的な影響を受けているものと考えられる。この形状の竅穴住居は、今回の調査では他にみつかっておらず、特異な存在とすることができる。

また、北側には、テラス状の張り出し部がある。このような形態の張り出しについては、弥生時代後期の例であるが、徳島県（徳島市矢野遺跡・板野郡黒谷川郡頭遺跡）

竪穴住居4は、平面形に特徴があり、四国やさらに西の地域の影響を受けたことが考えられるが、出土遺物には、このような特徴はみられず、在地的な状況を示している。紀伊産や生駒西麓産の土器が含まれているが、男里弥生集落の中では特異な出土状況をしているわけではない。

竪穴住居5・6・7（図29～32、図版5、32）

中央南区のほぼ中央部にあたるM区の北半部で検出された。弥生集落の竪穴住居が密集した部分のやや東側に位置しており、東側の竪穴住居4と約2.5m離れて隣接する。また、西側には竪穴住居18・19が約2.5m離れて隣接する。南側は、東西方向の攪乱があるためはっきりしない部分もあるが、隣接して竪穴住居は存在していないものと考えられ、最も近接した竪穴住居22・23とは約10m離れている。周囲にはピット群や土坑が多くみられる。竪穴住居が重複したかたちで検出されており、壁溝などの状況から、建て替えや拡張が多くみられ、さらに多くの竪穴住居が重複する可能性がある。

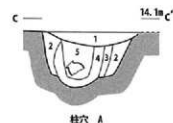
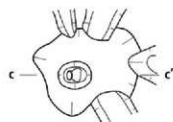
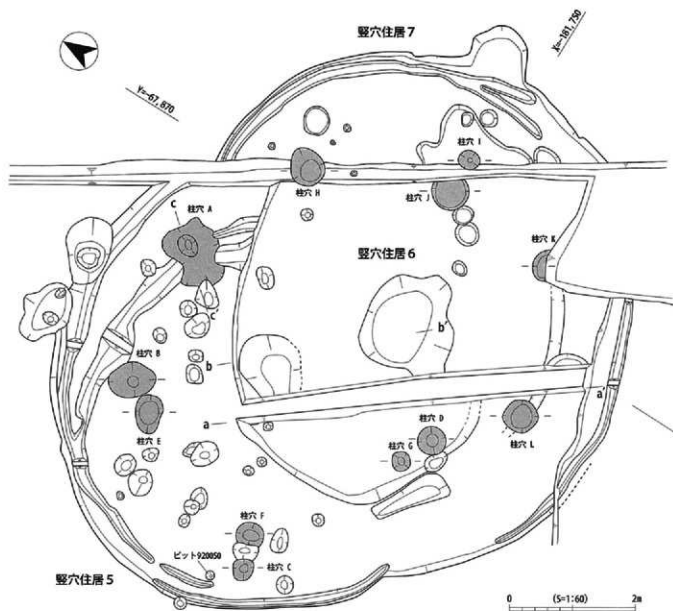
平面形や中央土坑、埋土の観察により、最終的には3棟以上の竪穴住居の重複が認められる。M区では取らず、一部東側のL区にひろがっている。検出時には、2棟の竪穴住居が重複していることが考えられたが、前後関係は判別できなかった。床面検出時に、2面の床面およびそれに伴う2基の炉跡が検出されたため、2棟の竪穴住居が重複していることが判明した。上面で検出された竪穴住居を残したため、掘り下げることができず、規模ははっきりしないが、埋土の観察や壁溝の検討によって、さらに1棟の竪穴住居を復原することができたため、3棟の竪穴住居の重複と判断した。貼床が施されている部分が確認されているほか、炉や多くの柱穴が検出されているが、上部構造を復原できるほどではないため、詳細ははっきりしない。重複した建物を、古い順に下から竪穴住居5、竪穴住居6、竪穴住居7と呼称した。

最下層に位置する竪穴住居5は、平面略円形を呈しており、南半部が竪穴住居6に切られているため、全容は不明である。規模は、最大径約7.3m、深さは、北側部分で約20cmを測る。壁溝の状況から、後に北方向に約1m拡張していることがわかる。ほとんど埋土が残存していない状況であるが、にぶい黄橙色砂混じりシルトである。貼床は、確認されていない。

内部でピットは多く検出されており、特定はむずかしいが、最初の竪穴住居の主柱穴は4基と考えられる。いずれも平面円形または楕円形を呈しており、残存部で径約40cm、深さ約20cmを測る。埋土は、灰色粗砂混じりシルトである。拡張後は、主柱穴は1基増えて5基になったものと考えられ、構造がやや変化している。壁溝は、全周するものと考えられるが、最初の竪穴住居のものは、北側のみ残存しており、他の部分は失われている。規模は、検出面で幅20～30cm、深さ約5cmを測り、断面U字状を呈する。埋土は、にぶい黄橙色砂混じりシルトで、炭化物を含む。壁溝内部からは、杭の痕跡は確認されていない。拡張後の壁溝は、ほぼ全周するものと考えられるが、南側は竪穴住居7に切られているため失われている。規模や埋土は、ほぼ同じであり、内部からは杭の痕跡は確認されていない。

中央よりやや南側で、土坑が検出されており、東西方向がやや長い平面楕円形を呈する。規模は、検出面で長径1.1m、短径0.9m、深さ0.3mを測り、断面U字状を呈する。埋土は、褐灰色砂混じりシルトで、炭化物を多量に含んでいる。炉として使われたものと考えられるが、炉に付随して灰や炭などを蓄えるピットはみつからない。

竪穴住居5に伴う遺構として、土器埋納ピットが検出された。もとは竪穴住居5の拡張に伴って新たにつくられた柱穴であるが、その底部付近から壺とサヌカイトが出土した。埋土は、灰黄褐色砂混じりシルトが基本で、炭化物も若干含まれるが、地山がブロック状に混じっている。かなり締まった状態で

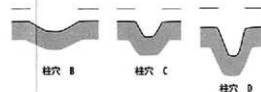


1. 10YR 4/2 灰黄褐色 細砂混じりシルト 細砂混じりシルト
2. 10YR 7/4 にぶい黄褐色 細砂混じりシルト ブロック含む
3. 10YR 6/2 灰黄褐色 細砂混じりシルト 炭化物を多量に含む
4. 10YR 4/2 灰黄褐色 細砂混じりシルト 炭くしまる
5. 10YR 5/4 にぶい黄褐色 細砂混じりシルト 炭化物を含む

0 (S=1:40) 1m

竪穴住居5 拡張部

※レベル値 = T.P.+14.1m



竪穴住居5



竪穴住居7

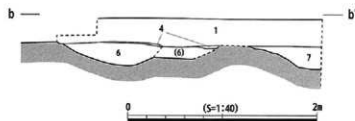
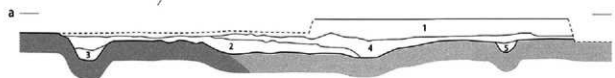


0 (S=1:60) 2m

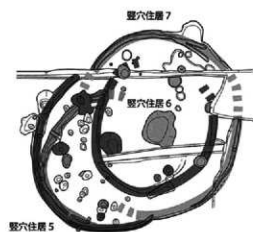
竪穴住居5

0 (S=1:60) 2m

※レベル値 = T.P.+14.2m



1. 10YR 5/3 にぶい黄褐色 砂混じりシルト (竪穴住居7 埋土)
2. 10YR 6/4 にぶい黄褐色 砂混じりシルト 炭化物を含む (竪穴住居6 埋土)
3. 10YR 6/2 灰黄褐色 砂混じりシルト 炭化物を多量に含む
4. 10YR 6/1 灰灰色 砂混じりシルト 炭化物を多量に含む (竪穴住居7 貼床)
5. 10YR 6/4 にぶい黄褐色 砂混じりシルト (竪穴住居6 埋土)
6. 10YR 4/1 靑灰色 砂混じりシルト 炭化物を多量に含む
7. 10YR 4/1 靑灰色 砂混じりシルト 炭化物を多量に含む



竪穴住居5・6・7切り合い関係



竪穴住居5 (※拡張あり) 竪穴住居6 竪穴住居7

図29 竪穴住居5・6・7平・断面図

埋められている。土器を意図的に埋めたものと考えられるが、土器の内部からは何も出土していない。また、壺は、底部が欠損した状況であることから、葬祭などに関係する遺構の可能性が考えられる。後述するが、このピットの北側には、小児用と考えられる土器棺が埋葬された土坑が検出されている。このため、小児用の墓の可能性もある。

竪穴住居6は、竪穴住居5の拡張後につくられている。竪穴住居5の南半部を切っているが、後につくられた竪穴住居7が完全に重複しており、全容ははっきりしない。竪穴住居7は、竪穴住居6の建て替えの可能性もある。壁溝が東側に残存していたことから、外形を知ることができる。それによると、平面形は不整形を呈しており、規模は、最大径約5.0m、深さは、中央部で約10cmを測る。埋土は、上層が竪穴住居7の貼床で、下層にぶい黄褐色砂混じりシルトである。柱穴の特定はできなかったため、上層構造も不明である。壁溝は、検出面で幅約20cm、深さ約10cmを測り、断面U字状を呈する。埋土は、にぶい黄褐色砂混じりシルトで、竪穴住居5の壁溝埋土と類似している。壁溝内部からは、杭の痕跡は確認されていない。

ほぼ中央に土坑が存在したと考えられるが、同じ位置に竪穴住居7の中央土坑がつくられていることから、不明である。この部分の埋土の観察からも竪穴住居6につながる手がかりはみつからなかった。竪穴住居7の炉をつくる際に、竪穴住居6の中央土坑をそのまま利用したか、再掘削した可能性が考えられる。

最上層に位置する竪穴住居7は、平面略円形を呈しているが、北半部の竪穴住居5と重複している部分があるため、明確に掘り分けることができなかった。規模は、最大径約8.3m、深さは、南側部分で約20cmを測る。壁溝の状況から、明確ではないが、東側で一部拡張している可能性がある。埋土は、にぶい黄褐色砂混じりシルトである。貼床はしっかりしており、褐灰色砂混じりシルトを主体として、ブロック状に埋められている。炭化物も若干含まれる。床面を平坦にするために埋められていることから、層の厚さは一定していない。

内部でピットは多く検出されており、特定はむずかしいが、主柱穴は3基まで確認した。いずれも平面円形または楕円形を呈しており、残存部で径約40cm、深さ20～40cmを測る。埋土は、にぶい黄褐色粗砂混じりシルトである。壁溝は、ほぼ全周するものと考えられ、検出面で幅約20cm、深さ約10cmを測り、断面U字状を呈する。埋土は、にぶい黄褐色砂混じりシルトで、竪穴住居5や6の壁溝埋土と類似している。炭化物も若干含まれる。壁溝内部からは、杭の痕跡は確認されていない。

ほぼ中央で土坑が検出されており、不整形を呈する。検出面は、貼床の上面であり、確実にこの竪穴住居7に伴う炉と考えられる。周囲の床面に、炭化物が多量に散らばった状況であった。規模は、検出面で最大径約1.5m、深さ0.4mを測り、断面U字状を呈する。埋土は、褐灰色砂混じりシルトで、炭化物を多量に含んでいる。竪穴住居5などの埋土と類似している。炉に付随して灰や炭などを蓄えるピットはみつかっていない。

このほかに、内部で検出されたピット920050から、まとまってサヌカイトチップが多量に出土している。全体に小片であり、石核などはみられない。石器製作をおこなっていたものと考えられるが、竪穴住居内では、サヌカイトチップが散らばっている状況は確認されていない。

遺物は、埋土から弥生土器が多く出土しているが、いずれも小片で、形を復元できるものは少ない。ピットから出土したものを除いて、明確にどの竪穴住居に属するものかははっきりしない。ここで図示できた遺物に関しては、東端部でみつまっていることから、竪穴住居7に関連する可能性が高いものと考え

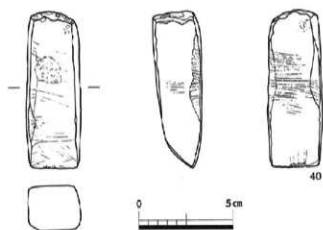


图30 豎穴住居5·6·7出土磨製石器

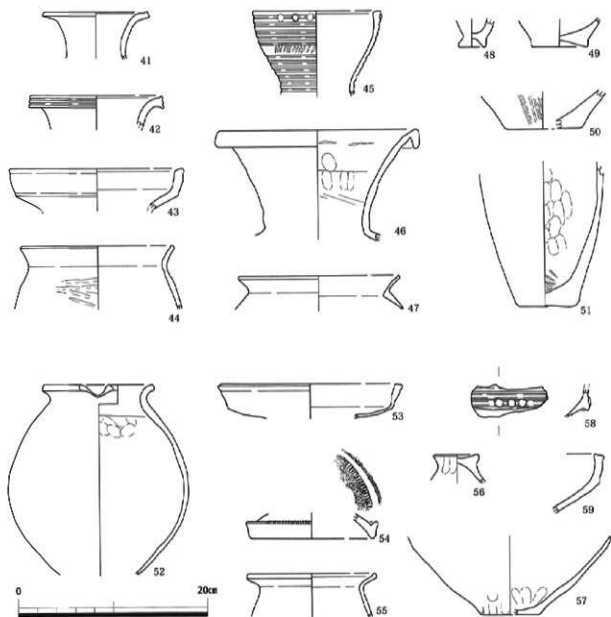


图31 豎穴住居4、5·6·7、8出土土器

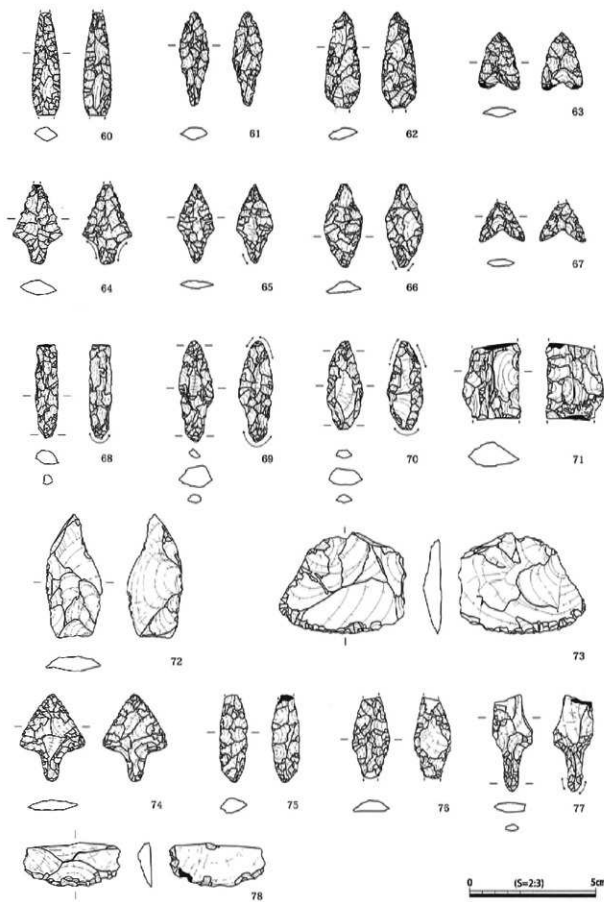


图32 竖穴住层3、4、5·6·7出土打製石器

られる。図31-52は、ピットから出土したもので、底部を欠損した壺である。口縁部に片口がつけられている。体部内面には指頭圧痕が残っている。外面に煤が付着している。53は、高杯杯部の口縁部である。口縁部内面は肥厚しており、口縁がやや広がる。54は、高杯脚台部である。端部を上方に広げており、その上面に刻目を入れている。55は、甕の口縁部である。口縁部が、くの字状に屈曲しており、口縁部内面が肥厚している。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。56は、裏蓋のつまみ部と考えられるが、底部の可能性もある。外面に縦方向のナデ調整がみられる。胎土の特徴から、生駒西麓産と考えられる。57は、壺か甕の底部で、底は平坦である。体部内面には指頭圧痕が残っている。

打製石器では、図化できたものを図32に示す。図版73-1444は、埋土から出土した石槍破片や楔形石器、剥片などを集めたものである。一部、金山産を含んでいるものと考えられる。74-76は、石鏃である。74は、有茎式で完形品である。75は凸基Ⅱ式で、先端部が欠損している。76は、凸基Ⅱ式である。77はⅠ類の石鏃で、鏃部に使用痕がみられる。78はスクレイパーで、片面に大きな剥離面がある。また、図化できなかったが、図版69-1435・1436は、凸基Ⅱ式の石鏃である。断面菱形で厚みをもつ。なお、図版73-1443は、ピット920050から出土したサヌカイトチップの集合である。金山産が若干混じっているものと考えられる。磨製石器では、図30-12の柱状片刃石斧がある。緑色片岩製であり、刃先に使用による線条痕がみられる。

竪穴住居 8・9・10・11 (図31、33、38、図版6、7)

中央南区のほぼ中央部にあたるN区の南端部で検出された。一部は西側のO区まで広がる。弥生集落の西側を走る大溝がやや東に屈曲し、調査区を横切った南側に位置しており、大溝に隣接している。弥生集落の竪穴住居が密集した部分の北端部に位置しており、西側の竪穴住居13と約2m離れて隣接する。また、南側には竪穴住居12が約3.5m離れて隣接する。東側は、隣接して竪穴住居は存在していないものと考えられ、最も近接した竪穴住居2とは約18m離れている。周囲には、ピット群や土坑が多くみられる。竪穴住居が重複したかたちで検出されており、埋土などの状況から、建て替えが多くみられる。少し離れた部分がシルト質の地山で比較的掘削しやすいにもかかわらず、地山が礫層で掘削しにくい部分に竪穴建物が重複してつくられている状況である。

検出時には、2棟の竪穴住居が重複していることが考えられたが、それぞれの竪穴住居を明確に判別することはできないほどであった。埋土の観察により、最終的には4棟の竪穴住居の重複が認められたが、規模が小さく、平面形がかなり不定型なものもあり、建物として機能していたものかどうか疑わしいものもある。貼床が施されている部分が確認されているほか、炉や多くの柱穴が検出されているが、上部構造を復原することはできない。重複した建物を、古い順に下から竪穴住居8、竪穴住居9、竪穴住居10、竪穴住居11と呼称した。

最下層に位置する竪穴住居8は、平面不整形円形を呈しており、東側が竪穴住居9・10・11に切られている。さらに西側はO区まで広がるが、N区との間に未調査部分があるため、全容は不明である。規模は、長径約8.0m、短径約7.2m、深さは、中央部分で約25cmを測る。埋土は、灰黄褐色砂混じりシルトである。貼床は、約3cmの厚さで残存しており、にぶい褐色砂混じりシルトににぶい黄褐色砂混じりシルトがブロック状に混じる。内部でピットが検出されているが、全容が不明なため、主柱穴は特定できない。壁溝は検出されていない。ほぼ中央部で土坑が検出されたが、炭化物は見られないことから、炉とは確定できない。

竪穴住居9は、竪穴住居8の北東部を切っているが、調査時には平面形で判別することはできなかった。

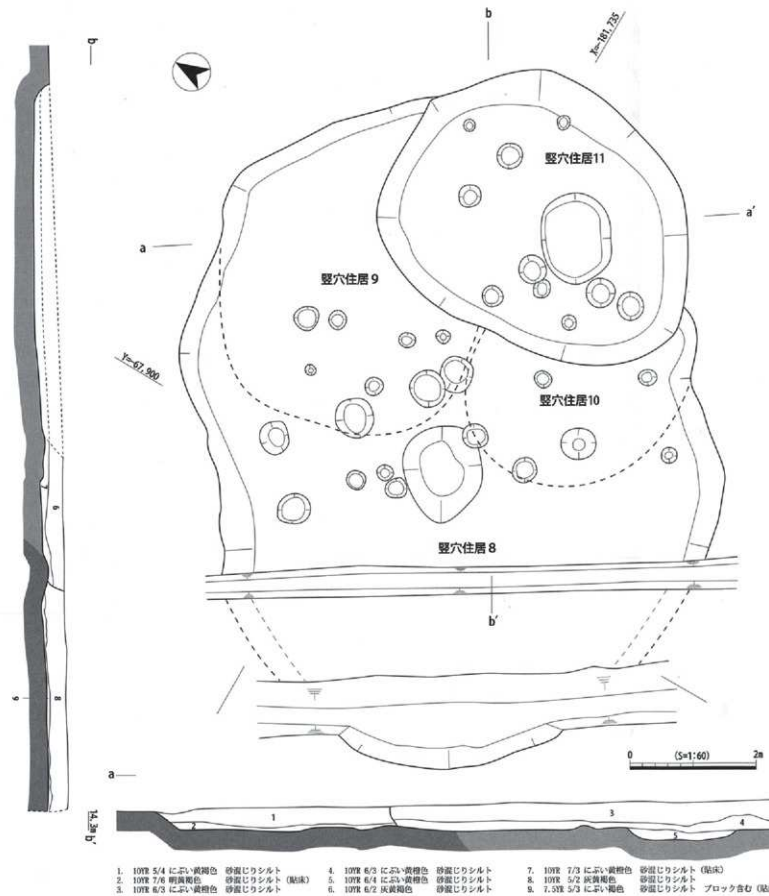
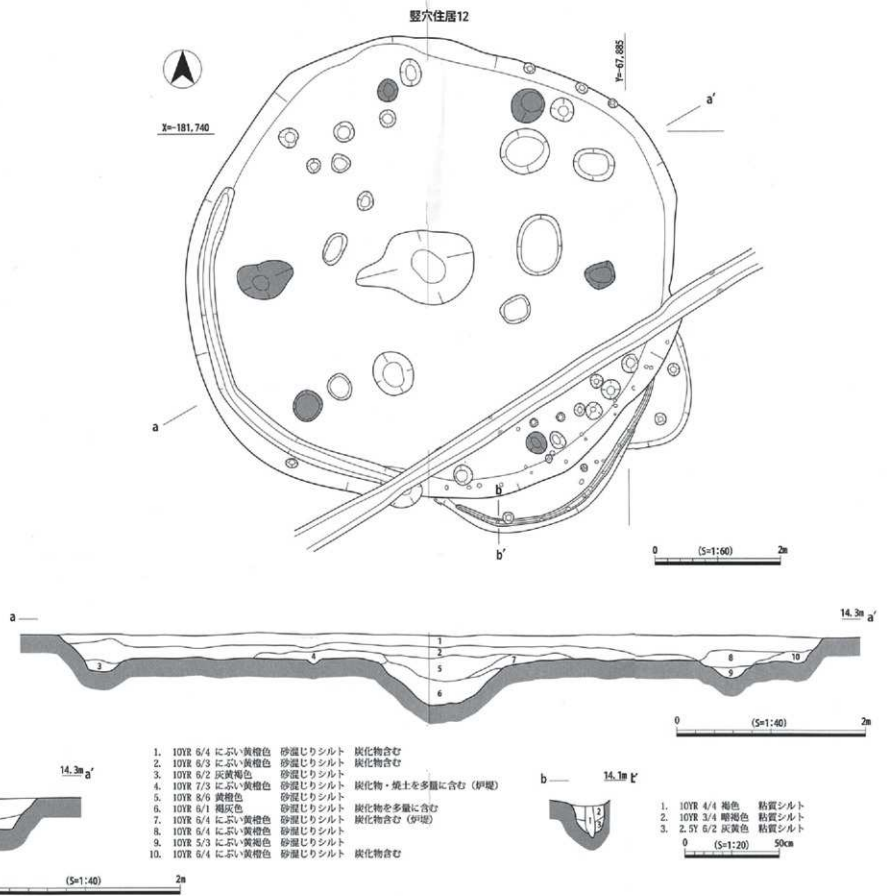


図33 竪穴住居8・9・10・11・12平・断面図



た。この部分に残した土層観察用畦の断面観察によりみつかったものであるため、平面形をはじめとして、不明な点が多い。竪穴住居11に切られていることは確実であるが、竪穴住居10とは重複関係がないため、前後関係は不明である。また、竪穴住居8より後につくられたものと考えられるが、明確な前後関係を示す土層の確認はおこなっていない。

平面形は、不明ながらも略円形を呈しているものと考えられ、推定規模は径約4.0m、深さは現状で約20cmを測る。埋土は、にぶい黄褐色砂混じりシルトである。貼床は、部分的に約4cmの厚さで残存しており、明黄褐色砂混じりシルトである。内部でピットが検出されているが、全容が不明なため、主柱穴は特定できない。壁溝は検出されていない。中央土坑も検出されておらず、炉は確定できない。

竪穴住居10は、竪穴住居8の南東端部を切っているが、竪穴住居9と同様に、調査時には平面形で判別することはできなかった。この部分に残した土層観察用畦の断面観察によりみつかったものであるため、平面形をはじめとして、不明な点が多い。重複関係では、竪穴住居11に切られており、竪穴住居8より後につくられたものであるが、竪穴住居9とは重複関係がないため、前後関係は不明である。

平面形は、不明ながらも略円形を呈しているものと考えられ、推定規模は、径約3.0m、深さは現状で約15cmを測る。埋土は、灰黄褐色砂混じりシルトである。貼床は、部分的に約5cmの厚さで残存しており、にぶい黄褐色砂混じりシルトである。内部でピットが検出されているが、全容が不明なため、主柱穴は特定できない。壁溝は検出されていない。中央土坑も検出されておらず、炉は確定できない。

竪穴住居9・10は、柱穴や炉などの施設がそろっておらず、全容がはっきりしないため、竪穴住居と考えにくい部分もある。ただし、明らかに貼床が設けられていることが確認されたため、なんらかの施設がつくられていたことは確かである。

最上層に位置する竪穴住居11は、平面不整楕円形を呈している。重複する4棟の竪穴住居の中では、最も新しいものである。規模は、長径約4.8m、短径約3.6m、深さは、現状で約30cmを測る。埋土は、にぶい黄褐色砂混じりシルトである。貼床は確認されていない。内部でピットが検出されているが、主柱穴は特定できない。壁溝は検出されていない。

中央やや南寄り土坑が検出されており、平面形は楕円形を呈する。規模は、検出面で長径約1.2m、短径約0.9m、深さは、現状で約10cmを測る。埋土は、にぶい黄褐色砂混じりシルトが主体で、炭化物を含んでいる。炉として使われたものと考えられる。

竪穴住居11も、柱穴などの施設がそろっておらず、全容がはっきりしないため、竪穴住居と考えにくい部分もある。ただし、明らかに炉が設けられていることから、竪穴住居9・10と同様に、なんらかの施設がつくられていたことは確かであるといえる。

遺物は、埋土から弥生土器が多く出土しているが、いずれも小片で、形を復元できるものは少ない。そのうち、図化できたものは、竪穴住居8から出土したもののみである。図31-58は、複合鉢の鉢部である。鉢部の端部分にあたり、外面に水平方向の凹線が巡っている上に、円形浮文が3点一組で付けられている。59は、高杯杯部の口縁部である。口縁端部はやや肥厚させており、内湾気味である。

石器のうち、図化できたものは、竪穴住居8から出土したもののみである。鎌である。108は凹基式である。小型のもので、重量は1gにも満たない。109は、凸基Ⅱ式である。110・111は石鏃の未成品と考えられるが、確定できない。いずれも、先端付近に自然面が残っている。

竪穴住居12 (図33、36、38、39、図版6、7、32)

中央南区のほぼ中央部にあたるN区の南端部で検出された。一部は、南側のN区まで広がる。弥生集落の竪穴住居が密集した部分の北側に位置しており、北側の竪穴住居8・9・10・11と約3.0m離れて隣接する。また、南側には竪穴住居18が約2.5m離れて隣接する。東側は、未調査部分はあるものの、隣接して竪穴住居は存在していないものと考えられ、最も近接した竪穴住居2とは約15m離れている。周囲にはピット群や土坑がみられる。拡張はみられるが、竪穴住居の重複はなく、単独で検出されている。壁溝は、南西部にのみ残存している。

平面略円形を呈しており、規模は最大径約7.0m、深さ約20cmを測る。埋土は、にぶい黄褐色砂混じりシルトが主体である。検出面の地山はシルト層であり、締まった礫層は現れていない。床面には貼床は認められなかった。建て替えはおこなわれていないが、壁溝の状況から、一部南東方向に約0.6m拡張していることがわかる。

内部でピットは多く検出されており、特定はむずかしいが、主柱穴は6基と考えられる。いずれも平面円形または楕円形を呈しており、残存部で径30～60cm、深さ約20cmを測る。埋土は、にぶい黄褐色粗砂混じりシルトである。拡張による、主柱穴の変化はあまりみられない。壁溝は、南西部と拡張部のみに残存しており、他の部分は明確には検出されていない。規模は、検出面で、南西部では幅約25cm、深さ約10cm、拡張部では幅約10cm、深さ約10cmを測り、断面U字状を呈する。埋土は、灰黄褐色砂混じりシルトが主体である。南側の壁溝内部からは、部分的に杭の痕跡が確認されている。断面観察により、径約4cmの杭を打ち込んでいることがわかる。ただし、他の壁溝内では、杭の痕跡は確認できず、埋土も住居の埋土とほぼ同じであることから、後述するような土壁構造に関連するものとはいえない。

ほぼ中央で土坑が検出されており、東西方向がやや長い平面楕円形を呈する。規模は、検出面で長径1.5m、短径1.0m、深さ0.4mを測り、断面U字状を呈する。埋土は、2層に分かれており、上から黄褐色砂混じりシルト、褐灰色砂混じりシルトである。炉として使われたもので、下層に炭化物を多量に含んでいる。炉のまわりで、にぶい黄褐色砂混じりシルトを主体とする高さ約5cmの高まりが検出されている。この高まりからは、部分的に炭化物や焼土がまとまって含まれていることから、炉の内部に溜まった灰や土などを掻きだして、まわりに積み上げたものと考えられることができる。このような例は、近接する泉南市滑瀬遺跡の竪穴住居で検出された、炉の周囲に設けられた土壇状の隆起帯（炉堤）と類似している。炉に付随して灰や炭などを蓄えるピットはみつかっていない。他に関連する遺構は検出されていない。

遺物は、埋土中から弥生土器や石器類が出土している。土器は、いずれも小片で、形を復元できるものは少ない。図36-79は、壺の口縁部である。口縁端部を下方方向に広げている。文様はみられない。80は、甕の口縁部である。口縁部が、くの字状にほぼ直角に外反しており、口縁端部がさらに外反する。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。81は、直口壺の口縁部である。口縁部外面に凹線が4条巡る。82は、壺の口縁部である。口縁端部を下方方向に広げており、外面に凹線が巡る。さらに5本一組の棒状浮文がその上に付けられている。口縁部内面には、斜め方向の刺突文が施されている。83は、甕の口縁部である。口縁部が、くの字状にほぼ直角に外反しており、口縁端部は丸くおさめられている。外面に縦方向のハケ調整が見られる。84は底部で、壺か甕の明確な区別はできない。底はややへこんでいる。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。85は、真鍮壺形土器の底部である。底はやや丸みを帯びる。底部内面には、ヘラ状工具による調整痕が明瞭に残る。外面に煤が付着している。86は甕の底部で、底はややへこんで

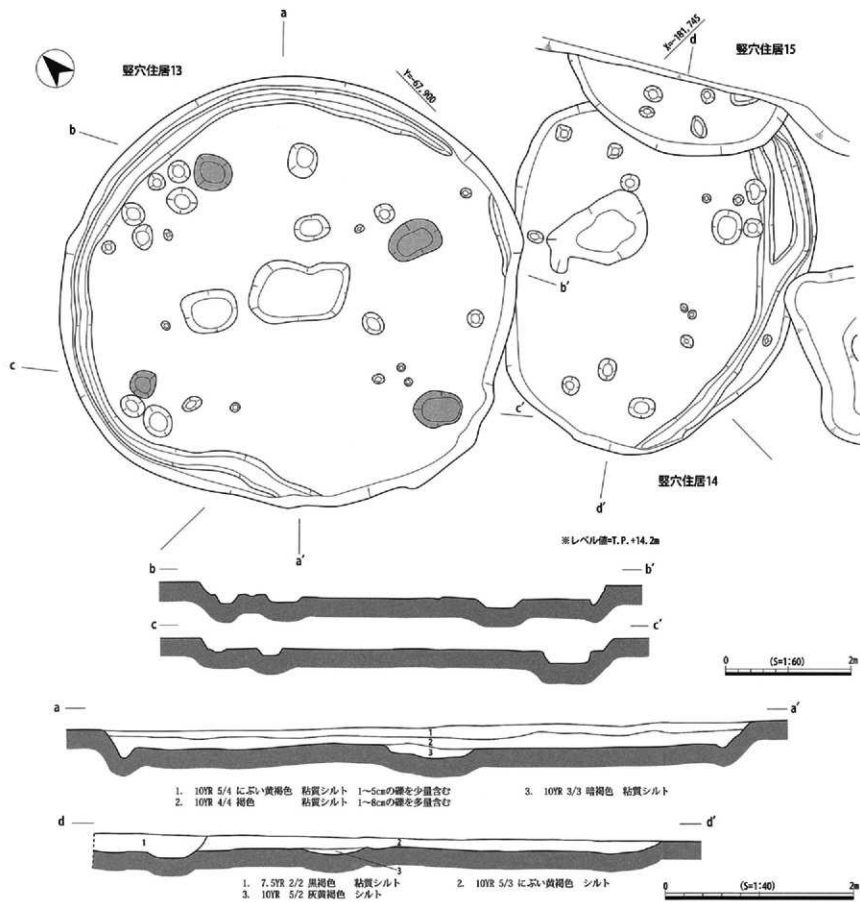


図34 竪穴住居13・14・15平・断面図

いる。外面に縦方向の調整痕が残る。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。外面に煤が付着している。

打製石器では、図38-112～114の石鏃や115・116の石鏃が出土している。112は凸基Ⅱ式で、一部欠損している。113は、未成品の可能性があり、下端部に自然面が残っている。114は楈葉形で、先端部と基部が欠損している。115・116はⅢ類の石鏃である。115は、錐部に使用痕が見られる。図39-124は、叩き石である。砂岩製で、上下両端部と中央部に叩打痕が残っている。125は、台石である。砂岩製で、裏面には打撃痕や大きな剝離面が見られる。砥石にも利用されていたものである。126・127は石廬丁で、いずれも緑色片岩製である。126は、使用痕が顕著で、組擦れ痕が認められる。

竪穴住居13（図34、36、図版7、32）

中央南区の中央西側にあたる〇区の北端部で検出された。調査区の端部であるが、竪穴住居8・9・10・11と同様に、弥生集落の西側を走る大溝がやや東に屈曲する部分の南側と考えられ、大溝に隣接している。弥生集落の竪穴住居が密集した部分の北端部西寄りに位置しており、東側の竪穴住居8・9・10・11と約2m離れて隣接する。また、南側では竪穴住居14と重複しており、一部切っている。周囲にはピット群や土坑が多くみられる。

平面楕円形を呈しており、規模は長径約7.2m、短径約6.9m、深さ約20cmを測る。埋土は、2層に分かれており、上からいぶい黄褐色粘質シルト、褐色礫混じり粘質シルトである。地山が締まった礫層であり、貼床は検出されていない。拡張はおこなわれていない。

内部でピットは多く検出されているが、主柱穴は4基と考えられる。不定形に並んでいるため、さらに主柱穴が増える可能性はあるが、検出されたピットから判断した。ただし、北側の柱穴の周辺でピットが密集する状況が見られることから、建て替えの可能性もある。柱穴は、いずれも平面円形または楕円形を呈しており、残存部で径40～90cm、深さ10～20cmを測る。地山が締まった礫層のためか、大きさはそろっておらず、全体に浅くなっている。埋土は、暗褐色粘質シルトが主体である。壁溝は全周するものと考えられるが、南半部でははっきりしない。規模は、検出面で幅30～40cm、深さ約10cmを測り、断面U字状を呈する。埋土は、住居埋土下層と同じ褐色粘質シルトである。壁溝内部からは、杭の痕跡は確認されていない。

ほぼ中央で土坑が検出されており、平面形は東西方向がやや長い楕円形を呈する。規模は、検出面で長径1.5m、短径0.9m、深さ0.1mを測る。埋土は、暗褐色粘質シルトである。伊として使われたものといえるが、あまり顕著な炭層はみられない。近接して東側にやや大きなピットが検出されており、伊に付随して灰や炭などを蓄えるピットと考えることができる。他に関連する遺構は検出されていない。

遺物は、埋土やピットから弥生土器が出土している。いずれも小片で、形を復元できるものは少ない。図36-87は、壺の口縁部である。口縁端部を肥厚させており、下方向に広げている。88は、受け口状口縁の壺である。口縁部外面には波状文が数条巡る。口縁端部は内湾する。89は、台付鉢杯部の口縁部である。口縁端部を肥厚させており、やや外反する。口縁部外面には、5本一組の棒状浮文が施されている。胎土の特徴から、生駒西麓産と考えられる。90は、甕の底部で、底は平坦である。91は、底部で、壺か甕の明確な区別はできない。底は平坦で、外面には指頭圧痕が残る。

竪穴住居14（図34、38、図版7）

中央南区の中央西側にあたる〇区の東端部で検出された。弥生集落の竪穴住居が密集した部分の北端部西寄りに位置しており、北側で竪穴住居14と重複しており、一部切られている。また、東側でも竪穴住居15と重複しており、一部切られている。南側の竪穴住居16と約2.5m離れて隣接する。周囲にはピット

ト群や土坑が多くみられる。削平のため、上部はかなり失われている。

平面楕円形を呈しており、規模は、推定で長径約6.6m、短径約5.1m、深さは現状で約10cmを測る。埋土は、灰黄褐色シルトである。地山が締まった礫層であり、貼床は検出されていない。

内部でピットは多く検出されているが、支柱穴と考えられるピットを特定することができないため、上部構造を復原することは困難である。壁溝と考えられる溝は、南部の外周に沿って一部検出されている。規模は、検出面で幅20～30cm、深さ約5cmを測る。東側で溝が2本になる部分があり、約0.6m拡張していることが想定される。壁溝内部からは、杭の痕跡は確認されていない。

中央やや北寄り土坑が検出されており、東西方向がやや長い平面楕円形を呈する。規模は、検出面で長径1.5m、短径1.0m、深さ0.3mを測る。埋土は、暗褐色粘質シルトである。炉として使われたものといえるが、あまり顕著な炭層はみられない。

北側で、図化はしていないが、落ち込み状の痕跡が見られ、この部分を竪穴住居の北端部と考え、南北方向の短径が6m近くになり、平面円形に近い形状となる。また、ほぼ中央部に土坑が位置する。これらのことから、全容ははっきりしないものの、径約6mの平面略円形の竪穴住居になる可能性も考えられる。

遺物は、埋土から弥生土器や石器類が出土している。いずれも小片で、形を復元できるものは少ない。図化できる土器はなく、図化できたのは打製石器1点のみである。図38-117はⅢ類の石錐である。上下両端鏃部に使用痕が顕著に見られる。

竪穴住居15（図34、38、図版7）

中央南区の中央西側にあたるO区の東端部で検出された。大部分は、O区の東側に広がっており、ちょうどN区との間の未調査部分に取まっている。弥生集落の竪穴住居が密集した部分の北端部西寄りに位置しており、西側にあたるO区内で竪穴住居14と重複しており、一部切っている。竪穴住居14と同様に、削平により上部はかなり失われている。

大部分は調査区外に広がるため、平面形は不明であるが、円形を呈しているものと考えられる。規模は、推定で径約4m、深さは現状で約20cmを測る。埋土は、にぶい黄褐色シルトである。地山が締まった礫層であるが、床面付近で貼床は検出されていない。

内部でピットは検出されているが、支柱穴と考えられるピットを特定することができないため、上部構造を復原することは困難である。壁溝は、見られない。中央土坑を含めてその他の関連する施設は、調査区域が限られていることから、不明である。

遺物は、埋土から弥生土器や石器類が出土している。いずれも小片で、形を復元できるものは少ない。図化できる土器はなく、図化できたのは打製石器1点のみである。図38-118はⅠ類の石錐である。先端部は欠損しており、残存部には使用痕が顕著に見られる。

竪穴住居16（図35、36、38、図版7、32）

中央南区の中央西側にあたるO区の南東端部で検出された。一部は東側のN区まで広がる。弥生集落の竪穴住居が密集した部分の西寄りに位置しており、北側の竪穴住居14と約2.5m離れて隣接する。また、南側では竪穴住居17と重複しており、一部切られている。北東側の竪穴住居12とは、約6m離れて隣接する。周囲にはピット群や土坑が多くみられる。北東側の壁付近で、土坑710063と土坑710624と重複しており、土坑のほうが新しい。竪穴住居の出入口の可能性もあるが、壁溝を切っていることから、竪穴住居には伴わないものと判断した。

平面楕円形を呈しており、規模は長径約8.4m、短径約6.9m、深さは現状で約30cmを測る。埋土は、暗褐色粘質シルトが主体である。検出面の地山はシルト層であり、締まった礫層は現れていない。床面には貼床は認められなかった。東半部で、平面形での判別はできなかったが、土層観察や壁溝の検出状況から、やや小型の竪穴住居が重複してつくられていることがわかる。この小型竪穴住居は、平面楕円形を呈しているものと考えられ、規模は、推定で長径約6m、短径約5m、深さ約30cmを測る。埋土にあまり違いは認められず、黄褐色粘質シルトが主体である。床面には貼床は認められなかった。

内部でピットは多く検出されており、特定はむずかしいが、主柱穴は4基と考えられる。いずれも平面円形または楕円形を呈しており、残存部で径30～60cm、深さ約20cmを測る。埋土は、にぶい黄褐色粘質シルトである。小型竪穴住居の主柱穴は特定できなかった。壁溝は、東部で小型竪穴住居を含めて確認されており、他の部分は明確には検出されていない。規模は、検出面で幅約20cm、深さ約15cmを測り、断面U字状を呈する。埋土は、灰黄色粘質シルトが主体である。壁溝内部からは、部分的に杭の痕跡が確認されている。断面観察により、径約4cmの杭を打ち込んでいることがわかる。ただし、西半部では、壁溝のほか、杭の痕跡も確認できないため、後述するような土壁構造に関連するものとは考えにくい。

中央やや西寄りで土坑が検出されており、平面略円形を呈する。規模は、検出面で径1.1m、深さ0.2mを測る。埋土は、暗褐色粘質シルトである。炉として使われたものといえ、下層に厚さ約5cmの炭層がみられる。小型竪穴住居に伴う中央土坑は、検出されていない。

遺物は、埋土中から弥生土器や石器類が出土している。土器は、いずれも小片で、形を復元できるものは少ない。図36-92は、壺の口縁部である。口縁端部をほぼ水平になるほど大きく広げている。文様はみられない。93は、受け口状口縁の壺である。口縁部外面には波状文が数条巡るものと考えられるが、摩滅のためわずしか認められない。口縁端部はほぼ直立する。94は、やや小型であるが、真鍮壺形土器の底部である。底はやや丸みを帯びる。内外面とも指頭圧痕が残る。95は、甕の底部で、底はややへこんでいる。外面に指頭圧痕が残る。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。

打製石器では、図化できたものを図38に示す。119は、Ⅲ類の石小刀である。やや摩滅しているが、完形品である。120は、有茎式の石鏃である。やや摩滅しているが、完形品である。121・122は、石鏃である。121はⅢ類で、両端鈍部に使用痕が見られる。122はⅠ類で、基部が欠損している。123は、石鏃の未成品と考えられるが、確定できない。金山産の可能性もある。

竪穴住居17(図35、37、39、42、図版7、32、33)

中央区の中央西側にあたるO区の南端部で検出された。一部は南側のN区まで広がる。弥生集落の竪穴住居が密集した部分の西端部に位置している。北側では竪穴住居16と重複しており、一部切っている。南側のN区では、攪乱によりほとんどが失われていることから、全容をつかむことはできず、不明な点も多い。南側の竪穴住居20・21とは、ほとんど接した状態で隣接しているものと推測される。北側のみの成果であるため、不明な部分は多いが、土層観察により、2棟の竪穴住居が重複してつくられていることがわかる。建て替えられたものと考えられる。

大部分はN区に広がるが、ほとんどが攪乱のため失われており、平面形は不明であるが、不整形を呈しているものと考えられる。2棟の竪穴住居が重複しており、西側につくられた竪穴住居を切るかたちで、東側に新たに竪穴住居がつくられている。重複した竪穴住居について、西側のものを竪穴住居17a、東側のものを竪穴住居17bと呼称した。

竪穴住居17aの規模は、推定で径約6m、深さは現状で約30cmを測る。埋土は、黄褐色礫混じりシ

ルトである。床面付近で粘床は検出されていない。また、壁溝も検出されていない。ピットもほとんどみつかっておらず、柱穴は不明である。その他に関連する遺構は検出されておらず、竪穴住居として機能していたものかどうかははっきりしない。ただし、遺物の量は多く、まとまって土器が出土した土器溜まりが存在する。

竪穴住居17bの規模は、推定で径約6.0m、深さは現状で約30cmを測る。埋土は、褐色粘質シルトである。地山面が締まった礫層であるため、粘床を伴っているものと考えられるが、顕著なものは見られない。床面付近で、部分的に灰黄色粘質シルトが主体で、炭化物を多く含む土層がみられる。一部残存するN区の土層観察でも、炭化物や流土の堆積がまとまってみられることから、火事で焼失した可能性も考えられる。北側では、壁溝は検出されていないが、南側のN区で一部確認されている。北側でも土層断面の観察により、壁沿いがやや低くなっていることがわかるため、はっきりとしたかたちではみつからないが、壁溝が外周に沿ってつくられていたものといえる。一部、壁溝内で杭の痕跡がみられるが、土壁構造に関連するものとは考えにくい。中央部分で土坑は検出されていないため、埴は特定できない。

遺物は、埋土中から弥生土器や石器類が出土している。特に竪穴住居17aから多く出土しており、土器の中には、形を復元できるものもみられる。図37-104・106が竪穴住居17bから出土したもので、それ以外は竪穴住居17a出土のものである。101は、大型細頸壺の口縁部である。外面に凹線が密に巡っており、口縁端部には円形浮文が一列に付けられている。また、中ほどには斜め方向の刺突文が1列巡っているほか、その下に波状文が巡る。口縁端部を肥厚させており、やや内湾気味である。102は、ほぼ完形に復元できた大型細頸壺である。口縁部から体部上半部の外面に籠状文が密に巡っており、一部に斜め方向の刺突文が入る。口縁端部には、刻目が施されている。体部下半部の外面には、縦方向の丁寧なヘラミガキ調整がおこなわれている。底は平坦である。103は、壺の口縁部である。口縁端部を下方に広げており、外面に凹線が巡る。その上に円形浮文が、3点一組で付けられている。頸部にも凹線が巡る。104は、受け口状口縁の壺である。口縁端部はやや開き気味で、外面には凹線が2本巡っている。105は、ほぼ完形に復元できた高杯である。杯部の外面には横方向の丁寧なヘラミガキ調整が見られる。脚部には凹線が2本巡っている。106は、真鍮壺形土器の底部である。外面に斜め方向のタタキ目が明瞭に残っており、底まで調整痕が見られる。内面は、ナデ調整で丁寧に調整されている。熱を受けており、赤く変色している。107は、甕の底部で、底はややへこんでいる。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。

石器は、図42-130が竪穴住居17bから出土したもので、それ以外は竪穴住居17a出土のものである。図39-128・129は石斧丁で、いずれも緑色片岩製である。128は、刃部が内湾しているものである。使用痕が顕著に残っており、組擦れの痕跡も見られる。129は未成品で、両面は研磨されているものの、刃部が未完成である。片面に穿孔途中の組孔痕が3ヶ所認められる。図42-130は、Ⅲ類の石鏃である。両端鈍部に使用痕が残る。131・132は、石鏃である。131は凸基Ⅱ式で、一部摩滅している。132は凹基式で、一部欠損している。縄文時代の混入品と考えられる。

また、竪穴住居17bの焼土層の中から、図版32-1414の鉄製品が出土している。小型のもので、形状が不明であることから、製品を特定することはできない。その他には、金属製品は出土しておらず、スラグやふいごの羽口などもみられないため、金属生産関係の遺構とはいえない。

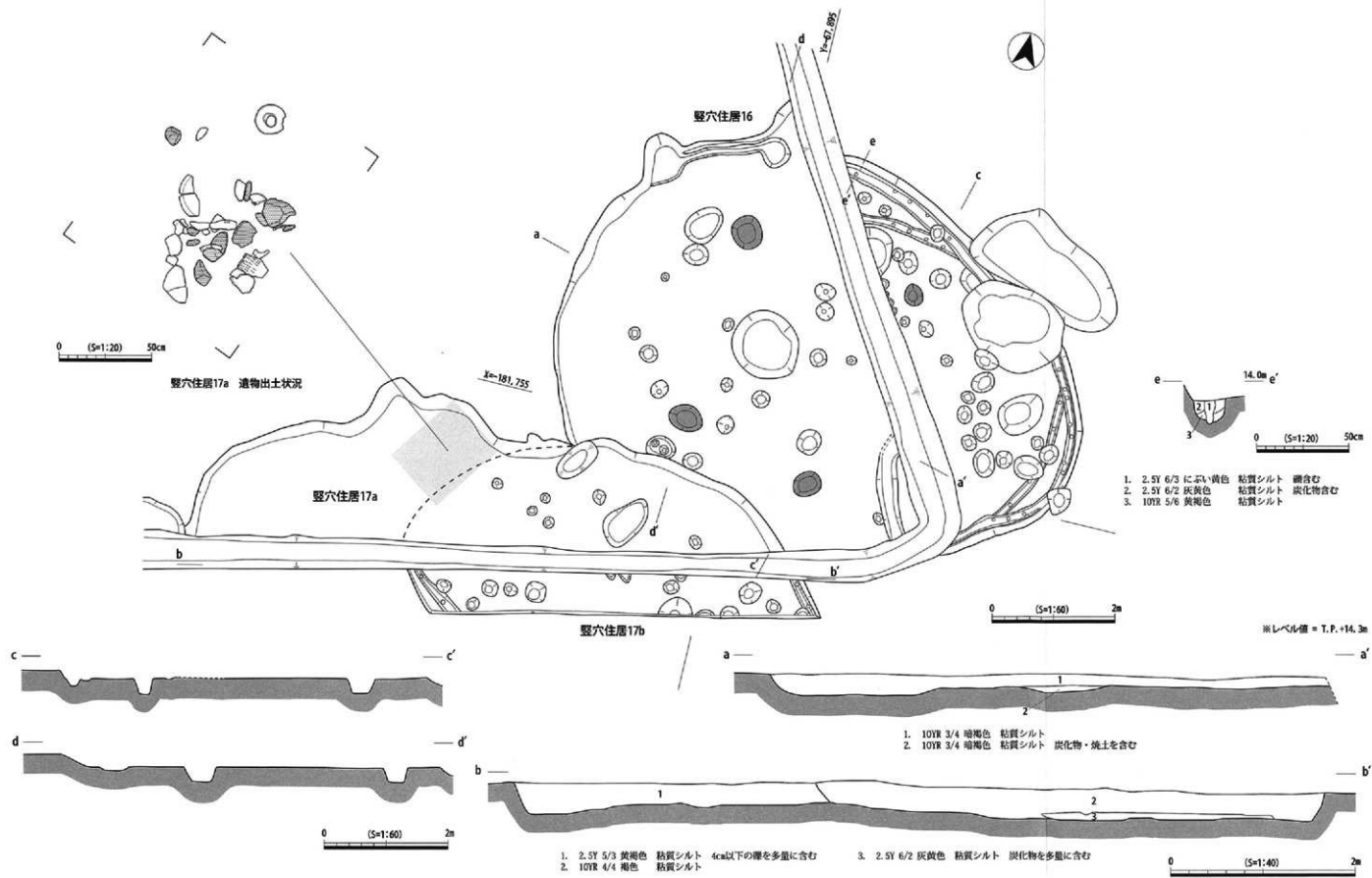


図35 豎穴住居16、17平・断面図

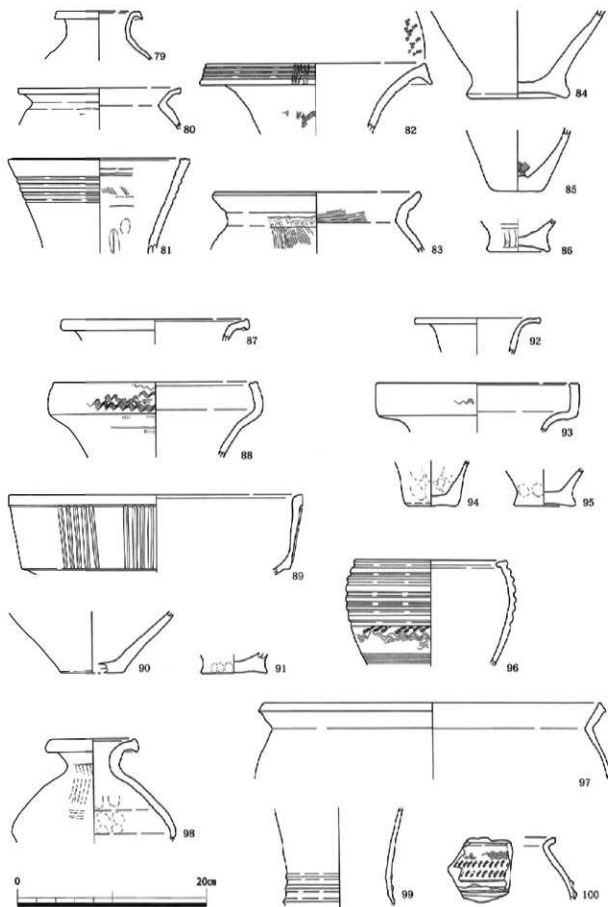


图36 双穴住居12、13、16、18、19、20·21出土土器

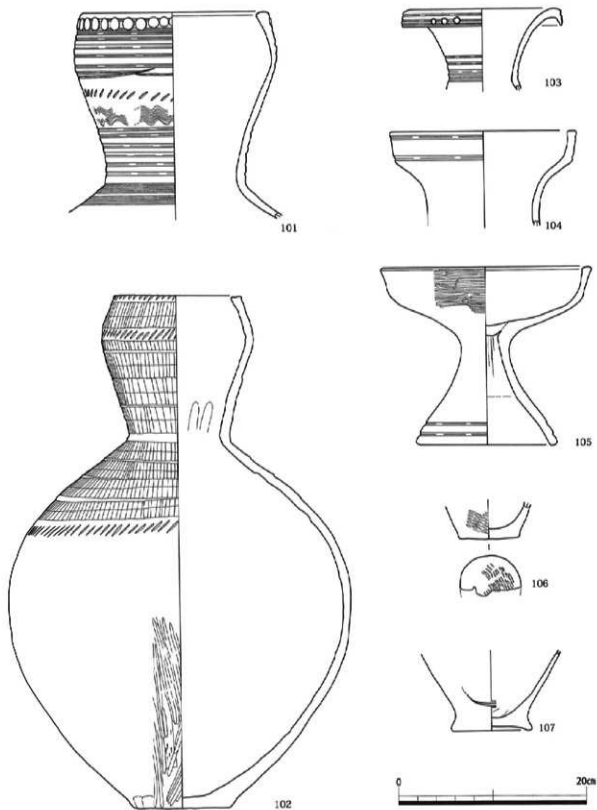


图37 竖穴住居17出土土器

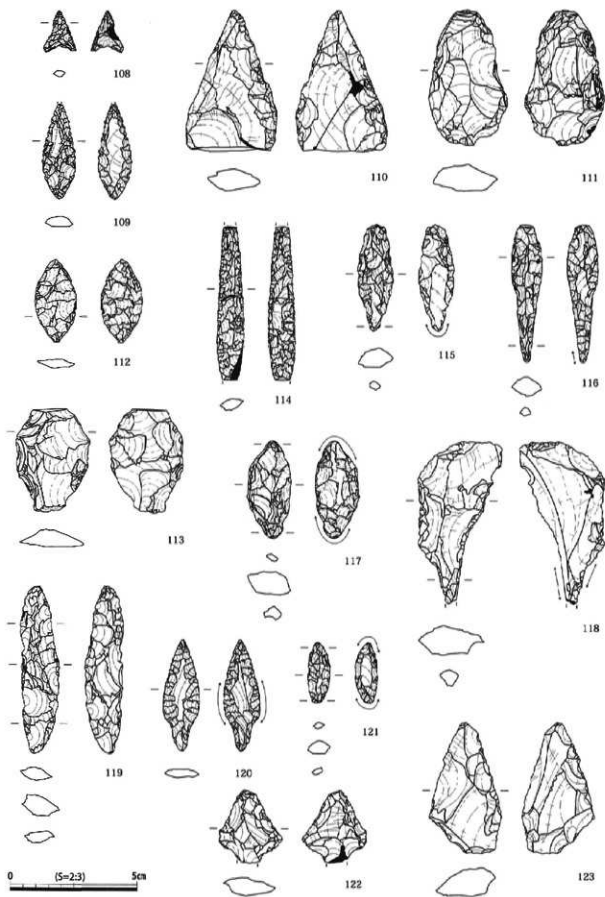


图36 整穴住层 8、12、14、15、16出土打製石器

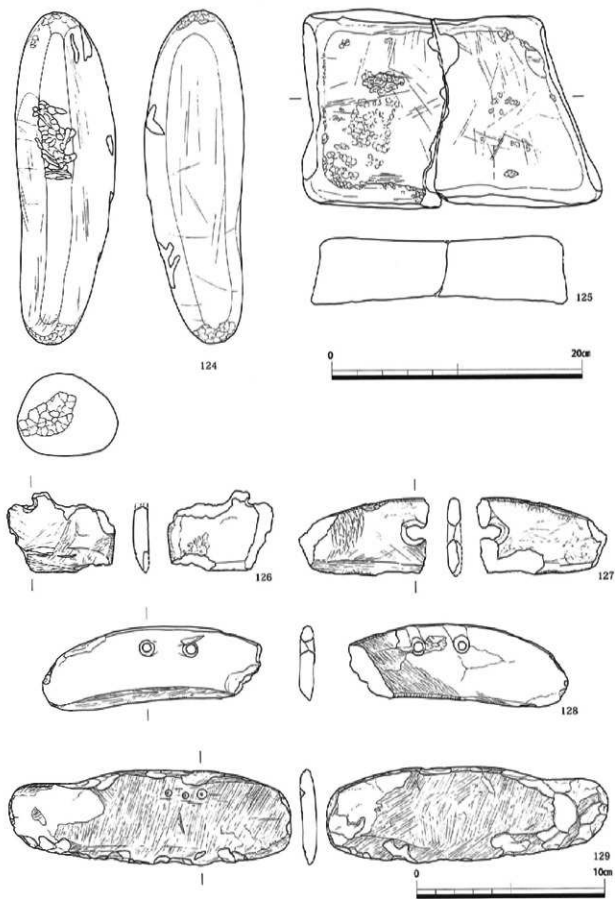


图39 暨穴住居12·17出土磨製石器

竪穴住居18 (図36、40、42、図版7)

中央南区のほぼ中央部にあたるN区の北東部で検出された。弥生集落の竪穴住居が密集した部分の中央やや北寄りに位置している。南東側で竪穴住居19と重複しており、一部切られている。北側の竪穴住居12と約2.5m離れて隣接する。また、西側には竪穴住居16が約5m、東側には竪穴住居5・6・7が約5m離れて隣接する。竪穴住居の重複はなく、建て替えはおこなわれていない。壁溝は、竪穴住居19と重複している部分を除き、ほぼ全周している。周囲にはピット群や土坑が多くみられる。

平面略円形を呈しており、規模は、最大径約4.2m、深さ約20cmを測る。埋土は、にぶい黄褐色粘質シルトが主体である。検出面の地山はシルト層であり、詰まった礫層は現れていない。床面には貼床は認められなかった。

内部でピットは多く検出されており、特定はむずかしいが、主柱穴は4基と考えられる。いずれも平面円形または楕円形を呈しており、残存部で径30～50cm、深さ10～30cmを測る。埋土は、明黄褐色粘質シルトである。壁溝は、全周するものと考えられ、規模は、検出面で幅10～20cm、深さ約10cmを測り、断面U字状を呈する。埋土は、にぶい黄褐色粘質シルトが主体である。南側の壁溝内部からは、杭の痕跡が確認されている。これらの杭の痕跡は、40～60cm間隔で見られ、断面観察により、径約4cmの杭を打ち込んでいることがわかる。この状況では、後述するような土壁構造と考えることはむずかしいが、これらの杭を木舞として、土壁がつくられていた可能性は否定できない。

ほぼ中央で土坑が検出されており、平面形は隅丸方形を呈する。規模は、検出面で一辺約70cm、深さ約25cmを測る。埋土は、2層に分かれており、上から明黄褐色砂混じりシルト、灰黄色砂混じりシルトである。炉として使われたもので、下層に炭化物を多量に含んでいる。炉のまわりで、杭の痕跡が検出された。断面観察により、径約4cmの杭を打ち込んでいることがわかった。具体的な構造は不明であるが、炉に付随するなんらかの施設と考えられる。また、近接して2基のピットが検出されている。埋土は、灰黄褐色粘質シルトで、炭化物を多く含む。これらは、竪穴住居1などで見られる、炉に付随して灰や炭などを蓄えるピットと考えることができる。

遺物は、埋土中から弥生土器や石器類が出土している。土器は、いずれも小片で、形を復元できるものは少ない。図36-99は、炉から出土したもので、直口壺の頸部である。くびれた部分に突帯が巡っている。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。図42-133も炉から出土したもので、凸基Ⅱ式の石籤である。先端部がわずかに欠損している。134は、Ⅲ型の石籤である。上端部が一部欠損している。135は、有茎式の石籤である。先端部が一部欠損している。

竪穴住居19 (図36、40、42、図版7)

中央南区のほぼ中央部にあたるN区の北東部で検出された。弥生集落の竪穴住居が密集した部分の中央やや北寄りに位置している。北西側で竪穴住居18と重複しており、一部切っている。南端部を攪乱により失っている。東側には竪穴住居5・6・7が約5m離れて隣接する。南側は、間に攪乱があるものの、隣接して竪穴住居は存在していないものと考えられ、最も近接した竪穴住居22とは約10m離れている。壁溝はほぼ全周している。周囲にはピット群や土坑が多くみられる。

平面形は隅丸方形を呈しており、規模は長辺約5.1m、短辺約4.5m、深さ約20cmを測る。平面形が隅丸方形の竪穴住居は、男里弥生集落の中では唯一の存在である。埋土は、2層に分かれており、上から灰黄褐色粘質シルト、にぶい黄褐色粘質シルトである。床面には貼床は認められなかった。拡張はおこなわれていない。

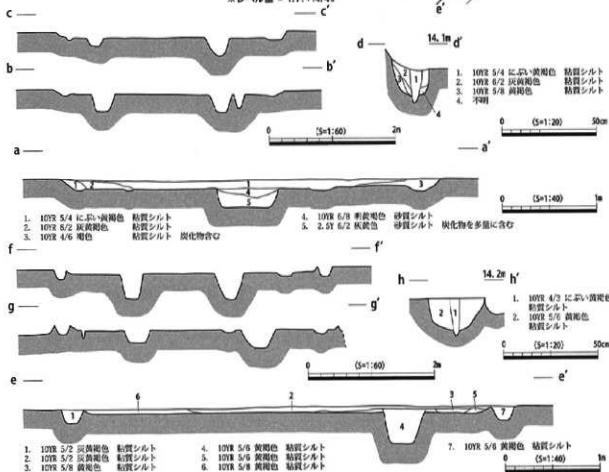
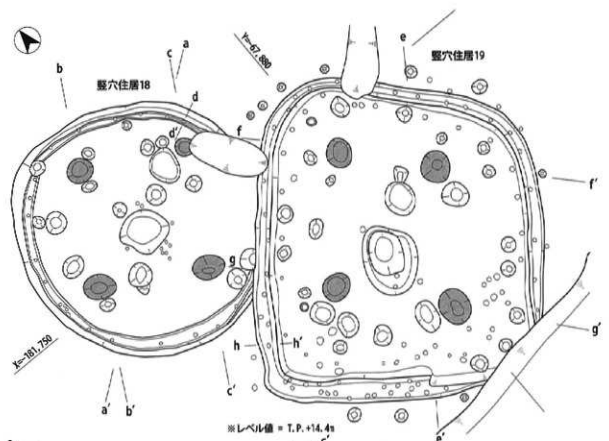


図40 竪穴住居18、19平・断面図

内部でピットは多く検出されているが、主柱穴は4基と考えられる。柱穴に隣接して同規模のピットが見られることから、平面形や埋土の状況からははっきりしないが、建て替えの可能性もある。柱穴は、いずれも平面円形または楕円形を呈しており、残存部で径40～60cm、深さ20～40cmを測る。埋土は、黄褐色粘質シルトが主体である。これ以外に、壁溝に沿って内外面に、径約20cmのピットが並んだ状態で検出されている。竪穴住居の上層構造を復元する要素として、重要な例だと考えられるが、ここでは復元するまでには至っていない。

壁溝は全周するものと考えられるが、南端部を攪乱により失っている。規模は、検出面で幅20～30cm、深さ約15cmを測る。埋土は、黄褐色粘質シルトが主体である。壁溝内部からは、多くの杭の痕跡が確認されている。これらの杭の痕跡は、30～60cm間隔で見られ、断面観察により、径約4cmの杭を打ち込んでいることがわかる。この状況では、後述するような土壁構造につながるものと考えることができ、これらの杭を木脚として、土壁がつくられていた可能性は高い。周囲に並ぶ小規模なピットとともに、上層構造を復元する要素といえる。

中央やや南西寄り土坑が検出されており、平面形は楕円形を呈する。規模は、検出面で長径1.0m、短径0.9m、深さ約0.5mを測る。埋土は、3層に分かれており、上から暗灰黄色砂混じりシルト、明黄褐色粘質シルト、黄褐色砂混じりシルトである。炉として使われたもので、下の2層に炭化物を多量に含んでいる。また、近接して北東側で、径約40cmを測る平面円形のピットが検出されている。炭化物は見られないことから、竪穴住居1などで見られる、炉に付随して灰や炭などを蓄えるピットとは考えにくい。

遺物は、埋土中から弥生土器や石器類が出土している。土器はいずれも小片で、形を復元できるものは少ない。図36-100は、柱穴から出土したもので、無頸壺の口縁部である。口縁端部をやや広げている。その下の外面には、波状文と斜め方向の刺突文が巡る。さらに肩部には突帯が巡っている。図42-133も柱穴から出土したもので、I類の石鐘である。鐘部は欠損しており、上部も一部欠損している。

竪穴住居20・21 (図36、41～44、図版8、33)

中央南区の中央西側にあたるN区の西端部で検出された。一部は南側のP区まで広がる。北端部を攪乱により失っている。弥生集落の竪穴住居が密集した部分の西端部に位置しており、北側の竪穴住居17とは、間に攪乱があるものの、ほぼ隣接するものと考えられる。南側には、大溝3が隣接する。東側には、隣接して竪穴住居は存在していないものと考えられ、最も近接した竪穴住居19とは約10m離れている。周囲にはピット群や土坑が多くみられる。竪穴住居が2棟重複したかたちで検出されており、建て替えられたものと考えられる。2棟のうち、やや南側に位置する竪穴住居を切るかたちで、新たに竪穴住居を掘削している。少し離れた部分がシルト質の地山で比較的掘削しやすいにもかかわらず、地山が締まった礫層で、掘削しにくい部分に竪穴住居が重複してつくられている状況である。竪穴住居の立地になんらかの規制があるものと考えられる。ここでは、新たにつくられたものを竪穴住居20、切られているものを竪穴住居21と呼称した。

竪穴住居20は、平面略円形を呈しており、規模は、最大径約6.3m、深さ約20cmを測る。埋土は、にぶい黄褐色粘質シルトが主体で、炭化物を含む。貼床は、部分的に約5cmの厚さで残存しており、黒褐色砂混じり粘質土のブロックで構成されている。

内部でピットは多く検出されているが、北半部で多く、南半部で少ないため、特定はむずかしい。検出されたピットから判断して、主柱穴は4基とした。ただし、小型のものが多くことから、失われたピット

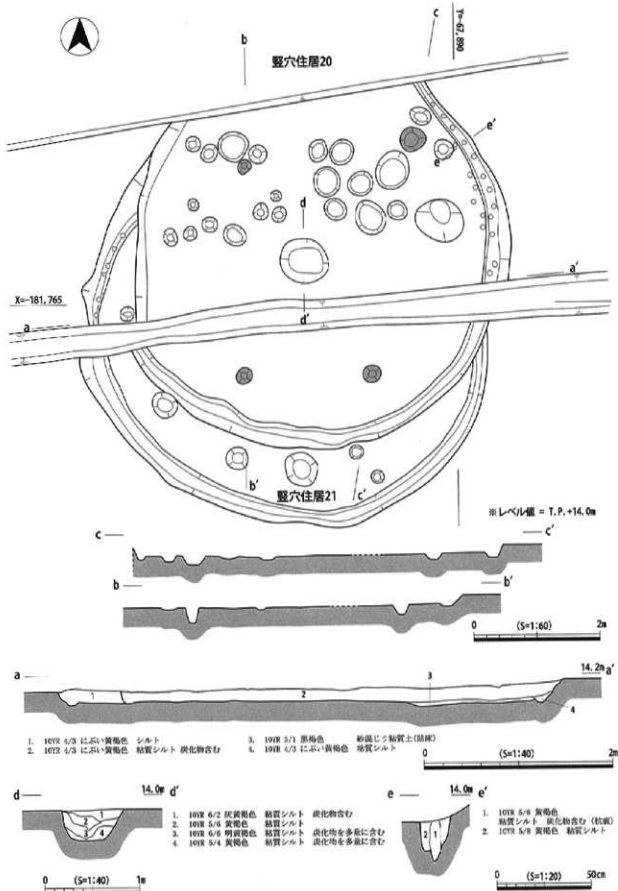


図41 豎穴住層20・21平・断面図

トの存在も想定され、多柱穴になる可能性もある。いずれも平面円形または楕円形を呈しており、検出面で径20～40cm、深さ15～25cmを測る。埋土は、にぶい黄褐色シルトで、礫を含む。壁溝は、全周するものと考えられるが、西側は検出されていない。規模は、検出面で幅約30cm、深さ約10cmを測り、断面U字状を呈する。埋土は、にぶい黄褐色粘質シルトで、炭化物を含む。東側の壁溝内部からは、杭の痕跡が多く確認されている。南側の壁溝にはみられないが、同様に杭が存在していたものと考えられる。断面観察により、径約5cmの杭を打ち込んでいることがわかる。この状況では、後述するような土

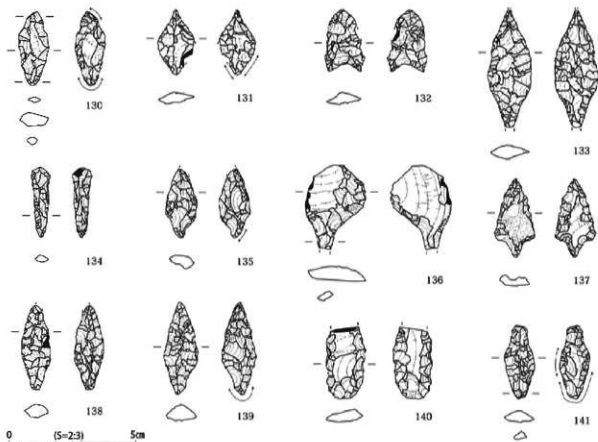


図42 竪穴住居17、18、19、20、22・23、25出土打製石器

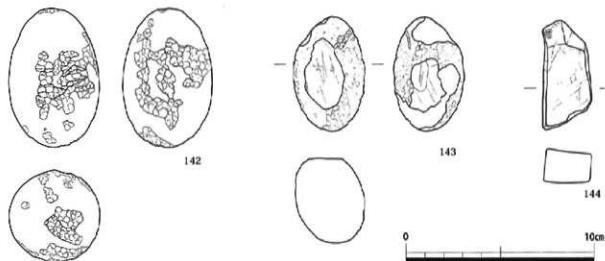


図43 竪穴住居20出土磨製石器(1)

壁構造と考えることはわずかしいが、これらの杭を木舞として、土壁がつくられていた可能性は否定できない。

ほぼ中央部に土坑が検出されており、平面形は円形を呈する。規模は、検出面で径0.7m、深さ約0.4mを測る。埋土は、4層に分かれており、上から灰黄褐色粘質シルト、黄褐色粘質シルト、明黄褐色粘質シルト、黄褐色粘質シルトである。炉として使われたもので、下の2層に炭化物を多量に含んでいる。炉に付随して灰や炭などを蓄えるピットはみつかっていない。

竪穴住居21は、平面略円形を呈していると考えられるが、北側の大部分を竪穴住居20に切られており、全容ははっきりしない。規模は、推定で径約6.6m、深さ約20cmを測る。竪穴住居20とほぼ同じ規模であり、建て替えられたものと考えられる。埋土は、にぶい黄褐色粘質シルトが主体で、炭化物を含む。貼床は確認されていない。

南側の残存部で柱穴が検出されているが、竪穴住居21の重複部分では特定できないため、主柱穴の全容は不明である。柱穴と考えられるピットは、2基特定したが、配置から4本以上の柱が立てられていたことが推測される。いずれも平面円形を呈しており、検出面で径40～60cm、深さ約15cmを測る。埋土は、黄褐色粘質シルトで、炭化物を含む。壁溝は、全周するものと考えられるが、重複部分では検出されていない。規模は、南側の検出面で幅20～40cm、深さ約10cmを測る。埋土は、黄灰色粘質シルトで、竪穴住居埋土と類似している。西側の壁溝内部からは、杭の痕跡が多く確認されている。南側の壁溝にはみられないが、同様に杭が存在していたものと考えられる。竪穴住居20と同様に、これらの杭を木舞として、土壁がつくられていた可能性もある。

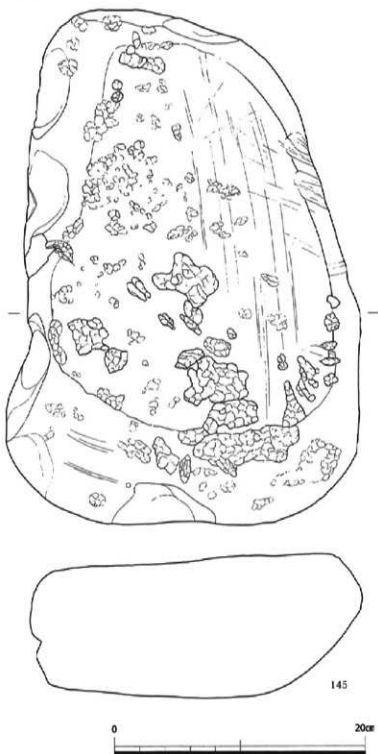


図44 竪穴住居20出土磨製石器(2)

中央土坑は、確認されていない。

遺物は、埋土中から弥生土器や石器類が出土している。土器は、いずれも小片で、形を復元できるものは少ない。図36-98が、竪穴住居21から出土したもので、それ以外は、竪穴住居20出土のものである。図36-96は、大型細頸甕の口縁部である。外面に凹線が密に巡っており、口縁の中ほどには斜め方向の刺突文が1列巡っているほか、その下に波状文が巡る。口縁端部を肥厚させており、内湾している。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。97は、大型甕の口縁部である。口縁部が、くの字状に外反している。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。98は、甕の体部上半である。頸部が縮まっており、全体につくりが厚い。口縁端部を肥厚させており、丸くおさめられている。

石器は、いずれも竪穴住居20から出土したものである。図42-137～139は、石鏃である。137は有茎式で、片面中央に自然面が残存している。138は凸基Ⅱ式で、先端部が一部欠損している。139は有茎式で、基部がわずかに摩滅している。図43-142は甲き石、143はすり石であるが、甲き石の可能性もある。142は卵形の礫で、砂岩製である。両端部と中央に叩打痕が見られる。143は卵形の礫で、砂岩製である。大部分に叩打痕が見られるほか、中央部で擦られて平坦な面が認められる。144は砥石である。流紋岩製で、表裏2面を使用している。図44-145は台石である。砂岩製で、打撃痕が見られる。長軸方向で二分し、片方を台石、他方を砥石として使用している。裏面にも砥石として利用されていた際の擦痕が残っている。

竪穴住居22・23（図42、45～47、50、図版8～10、33）

中央南区の中央にあたるN区の南部で検出された。弥生集落の竪穴住居が密集した部分のほぼ中央部に位置している。東側の竪穴住居24とは隣接する。また、南側には竪穴住居25が約2m離れて隣接する。北側は、隣接して竪穴住居は存在しておらず、集落の中で、広場のような場所として使われていたものと考えられる。西側には大溝3が約5m離れて隣接する。周囲にはピット群や土坑が多くみられる。検出面の地山はシルト層であり、締まった礫層は現れていない。ほぼ同規模の竪穴住居が2棟重複したかたちで検出されており、建て替えられたものと考えられる。同じ位置で、前の竪穴住居を切るかたちで、新たに竪穴住居を掘削している。ここでは、新たにつくられたものを竪穴住居22、切られているものを竪穴住居23と呼称した。

竪穴住居22は、平面略円形を呈しており、規模は、最大径約8.2m、検出面からの深さは約10cmを測る。埋土は、黄褐色粘質シルトが主体で、炭化物を含む。貼床は確認されていない。

内部でピットは多く検出されており、特定はむずかしいが、主柱穴は4基と考えられる。いずれも平面円形を呈しており、残存部で径40～70cm、深さ約30cmを測る。埋土は、黄褐色粘質シルトで、炭化物を含む。壁溝は全周しているが、北側で2本に分かれて検出されていることから、この部分で拡張がおこなわれたものと考えられる。規模は、検出面で幅20～30cm、深さ約10cmを測り、断面U字状を呈する。埋土は、暗灰黄色粘質シルトが主体で、黒褐色土や暗褐色土が混じる。このため、竪穴住居の埋土より色調が暗く、検出時には壁溝部分を黒い筋状に確認することができた。

南側の壁溝内部からは、杭の痕跡が確認されている。これらの杭の痕跡は、40～60cm間隔で見られ、等間隔で並んでいるわけではない。壁溝の断面観察により、径約5cmの杭を打ち込み、さらに何度かに分けて壁溝を埋めている状況が見られる。この状況からは、土壁がつくられていたとはいえない。ただ、見方を変えて、これらの杭を藁のような繊維状の編物などを固定する支柱と考え、草壁構造を想定することができる。杭を壁溝上に一定間隔で立ててそれを支柱にして、草壁が竪穴住居のまわりを巡る

かたちである。現地遺構から竪穴住居の壁構造を復元できた例は少なく、貴重な成果といえる。この状況のみで、上屋構造を復元することは困難な点が多いが、男里弥生集落で多く検出された、壁溝に伴う杭は、ほとんどがこのような草壁構造であったものと考えられる。調査時に、壁溝に伴う杭を最初に見つけた例がこの竪穴住居22であり、これを契機として多くの竪穴住居で、杭の痕跡を検出することができた。竪穴住居の上屋構造や壁構造を想定した目的意識をもった調査でなければ、このような痕跡はみつけることができなかったと思われる。竪穴住居における、壁溝周辺の観察を細かくすることの重要性および必要性を認識させられる調査例となった。

中央部で土坑が検出されており、平面形は東西方向が長い楕円形を呈する。規模は、検出面で長径2.7m、短径2.0m、深さ約0.3mを測る。埋土は、大きく3層に分かれており、上から黒褐色粘質シルト、にぶい黄褐色粘質シルト、灰黄褐色粘質シルトである。炉として使われたもので、全体に炭化物を多量に含んでいる。断面観察で、同じ場所でさらに一段下がる部分があることが判明したが、形状が異なることから、切られた下の竪穴住居23に伴う中央土坑と考えられる。

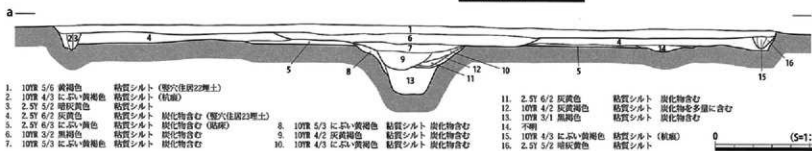
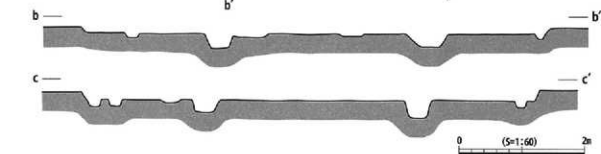
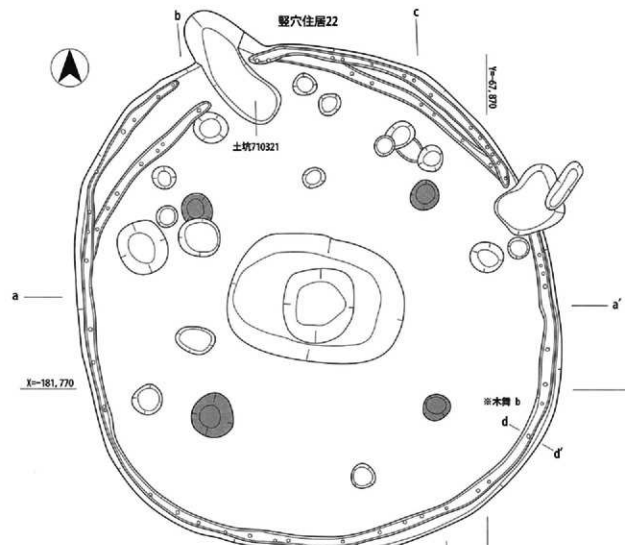
北端部の壁に直交するかたちで、平面楕円形の土坑710321が検出されている。壁溝がこの部分で途切れており、この竪穴住居に付属するものといえる。規模は、検出面で長径2.3m、短径1.2m、深さ約0.2mを測る。北側の広場のような場所に面しており、竪穴住居の出入口のような施設と考えられる。ただし、男里弥生集落の中でこのような施設をもつ竪穴住居は、他に検出されていない。また、東側でも小規模ながら同様の土坑が見つかる。拡張により、出入口の場所が変わったものか、2ヶ所の出入口をもつ竪穴住居と考えられるが、特定できない。いずれの土坑も竪穴住居22に伴うもので、切られた竪穴住居23には同様の施設はみられない。

竪穴住居23は、平面略円形を呈していると考えられるが、竪穴住居22と同じ場所に位置するため、外形ははっきりしない。平面の規模は竪穴住居22とほぼ同じであり、検出面（竪穴住居22の床面）からの深さは、約10cmを測る。埋土は、灰黄色粘質シルトが主体である。貼床は、部分的に約3cmの厚さで残存しており、にぶい黄色粘質シルトが主体で、炭化物を含む。

内部でピットは多く検出されており、特定はむずかしいが、主柱穴は4基と考えられる。いずれも平面円形を呈しており、残存部で径30～50cm、深さ約25cmを測る。埋土は、暗灰黄色粘質シルトである。壁溝は全周しているものと考えられるが、南側などではっきりしない部分がある。北側で2本に分かれて検出されていることから、拡張がおこなわれたものと考えられる。ただし、竪穴住居22とはやや異なった部分である。規模は、検出面で幅約20cm、深さ約15cmを測り、断面U字状を呈する。埋土は、褐色粘質シルトが主体で、炭化物を含む。壁溝内部からは、杭の痕跡が確認されている。これらの杭の痕跡は、40～60cm間隔で見られ、断面観察により、径約4cmの杭を打ち込んでいることがわかる。土壁がつくられていたとはいえないが、竪穴住居22と同様に、これらの杭を繊維状の編物などを固定する支柱と考え、草壁構造を想定することができる。

中央部で土坑が検出されており、平面形は円形を呈する。竪穴住居22の中央土坑が同じ位置に掘削されているため、検出面はその底部になる。規模は、検出面で径約1.2m、深さ約0.5mを測る。埋土は、黒褐色粘質シルトである。炉として使われたもので、全体に炭化物を多量に含んでいる。

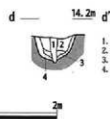
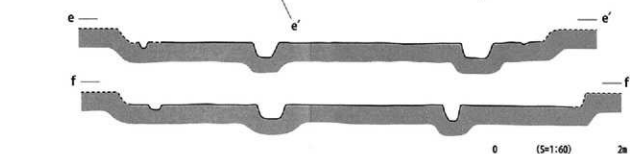
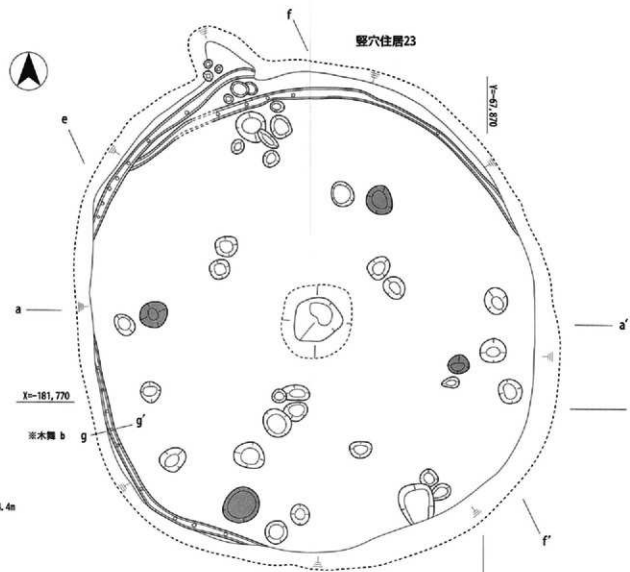
中央土坑からやや離れて、床面において、焼土が検出された部分が2ヶ所みられる。ほぼ円形あるいは楕円形を呈しており、掘り込みはないことから、炉とは考えられない。他の竪穴住居で検出されている、



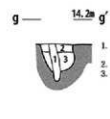
1. 10Ⅷ 5/6 黄褐色 粘質シルト (竪穴住居22土)
2. 10Ⅷ 4/3 に赤い黄褐色 粘質シルト (灰層)
3. 2.5Ⅶ 6/2 黄褐色 粘質シルト
4. 2.5Ⅶ 6/2 黄褐色 炭化物を含む (竪穴住居23土)
5. 2.5Ⅶ 6/3 に赤い黄褐色 炭化物を含む (灰層)
6. 10Ⅷ 5/2 黄褐色 粘質シルト
7. 10Ⅷ 5/3 に赤い黄褐色 粘質シルト

8. 10Ⅷ 5/3 に赤い黄褐色 粘質シルト
9. 10Ⅷ 4/2 灰褐色 粘質シルト
10. 10Ⅷ 4/3 に赤い黄褐色 粘質シルト

11. 2.5Ⅶ 6/2 灰褐色 粘質シルト
12. 10Ⅷ 4/2 灰褐色 炭化物を含む
13. 10Ⅷ 3/1 黄褐色 粘質シルト
14. 不明
15. 10Ⅷ 4/3 に赤い黄褐色 粘質シルト (灰層)
16. 2.5Ⅶ 5/2 黄褐色 粘質シルト



1. 2.5Ⅶ 5/2 黄褐色 粘質シルト (灰層)
2. 10Ⅷ 5/6 灰褐色 粘質シルト
3. 10Ⅷ 6/8 黄褐色 粘質シルト
4. 2.5Ⅶ 5/3 黄褐色 粘質シルト



1. 2.5Ⅶ 6/2 に赤い黄褐色 粘質シルト
2. 炭化物を含む (灰層)
3. 10Ⅷ 6/2 灰褐色 粘質シルト
4. 10Ⅷ 5/8 黄褐色 粘質シルト

図45 竪穴住居22・23平・断面図

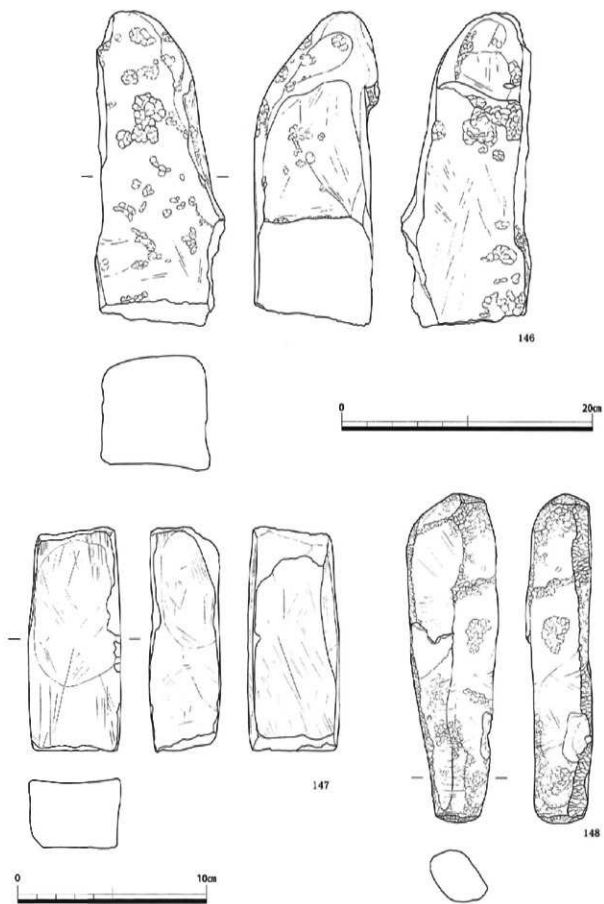


图46 豎穴住層22·23出土磨製石器

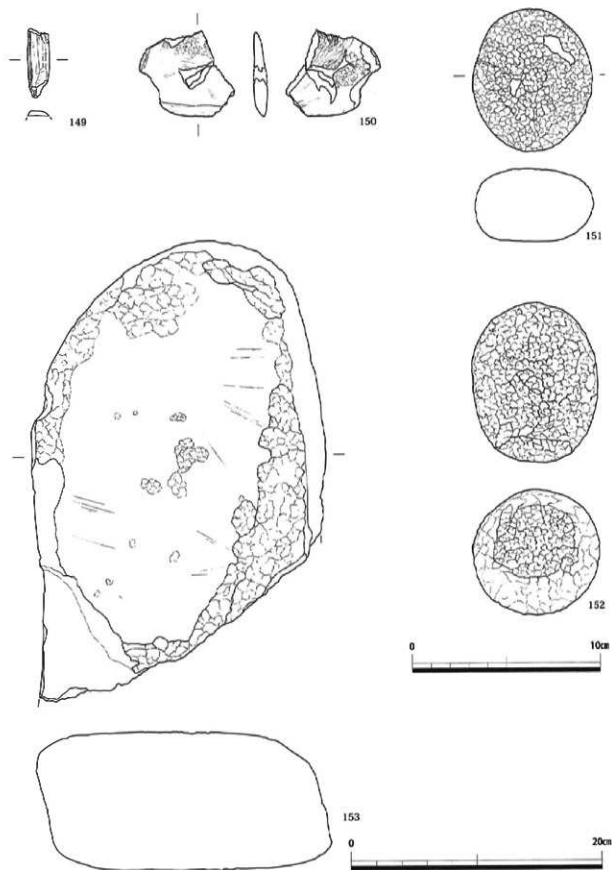


图47 雙穴住居22·23、25出土磨製石器

灰や炭などを蓄えるピットの痕跡とも考えにくい。性格は不明であるが、床面付近で短期間、火を焚いていたことは確かである。

遺物は、埋土中から弥生土器や石器類が出土している。調査時に、竪穴住居22と竪穴住居23で遺物を明確に区別することができなかった。土器は、いずれも小片で、形を復元できるものは少ない。図化できたものは、わずかに1点である。図50-157は、真蛸形土器の底部である。内面に指頸圧痕が残る。底はやや丸みを帯びる。石器は、磨製石器の大型品がみられる。図42-140は、凸基1式の石鏃である。先端部が欠損している。図46-146・147は、砥石である。146は、砂岩製で打撃痕が見られるため、台石として使われたようである。2面に砥石として利用されていた際の擦痕が残っている。147は、竪穴住居22の壁溝内から出土したものである。凝灰岩製で、4面に使用された痕跡が残る。148は叩き石で、竪穴住居23の壁溝内から出土したものである。砂岩製で両端に叩打痕が見られる。図47-149は、緑色片岩製の柱状片刃石斧で、竪穴住居22のピット内から出土したものである。150は、緑色片岩製の石砲丁である。片刃である。151・152は叩き石で、いずれも砂岩製である。全面に叩打痕が残るが、152には赤色物質が付いている。

また、竪穴住居23の埋土層の中から、図版33-1416の鉄製品が出土している。ただし、竪穴住居23に属するものかどうかは確定できない。小型のもので、形状が不明であることから、製品を特定することはできないが、のみ状鉄製品と考えられる。この他には、金属製品は出土しておらず、スラグやふいごの羽根などもみられないため、ここで金属生産などがおこなわれていたとはいえない。

竪穴住居24 (図48、50、図版8、12、33)

中央南区の中央にあたるN区の南部東端で検出された。一部は東側のM区まで広がる。上部は、削平により失われている。また、一部土坑に切られている部分がある。弥生集落の竪穴住居が密集した部分のほぼ中央部に位置している。西側の竪穴住居22・23、竪穴住居25と隣接している。東側は、隣接する竪穴住居は検出されていない。周囲にはピット群や土坑が多くみられる。検出面の地山はシルト層であり、締まった礫層は現れていない。拡張や重複はなく、単独で検出されている。

平面略円形を呈しており、規模は、検出面で最大径約4.8m、深さ約20cmを測る。埋土は、暗灰黄色粘質シルトが主体である。貼床は確認されていない。M区の調査時に、壁付近の細かい精査をおこなったが、壁溝も杭の痕跡も検出されなかった。このため、竪穴住居22・23などとは、上屋構造が異なったものといえる。

内部でピットは多く検出されており、特定はむずかしいが、支柱穴は4基と考えられる。いずれも平面円形を呈しており、残存部で径約30cm、深さ約10cmを測る。埋土は、黄褐色粘質シルトで、炭化物を含む。ピットは多いものの、建て替えなどは確認できない。

ほぼ中央部で土坑が検出されており、南北方向がやや長い平面楕円形を呈する。規模は、検出面で長径1.5m、短径1.0m、深さ0.2mを測る。埋土は、にぶい黄褐色粘質シルトである。炉として使われたものといえ、炭化物を多く含むが、あまり顕著な炭層はみられない。他に関連する遺構は検出されていない。

遺物は、埋土中から弥生土器や石器類が出土している。土器は、いずれも小片で、形を復元できるものは少ない。その中で、完形に近い復元ができたものは3点ある。図50-154は、直口壺である。口縁部は、斜め上方に向かって広がり、外面には、凹線が4条巡っている。肩部には横方向のタタキ調整が認められる。体部下半の外面には、縦方向のヘラケズリ調整が見られる。底部は失われている。155は、

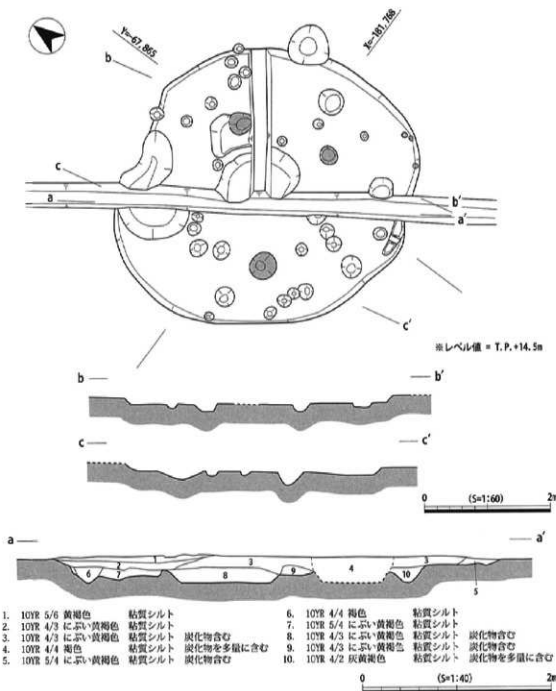


図48 竪穴住居24平・断面図

受け口状口縁の壺である。口縁部と底部の破片のみであり、直接接合はできなかったが、大きさや胎土の状況から、同一個体と判断した。口縁部外面には、凹線が2条巡る。ほかに文様は見られない。口縁端部はやや開いている。底部外面には、縦方向のヘラケズリ調整が見られる。底はナデ調整で整えられており、平坦である。156は、裏の体部である。床面直上で底を下にした状況で出土したものである。上部を削平されていることから、口縁部は失われている。体部上半と下半の外面の一部に横方向のタタキ調整が認められる。底はナデ調整で整えられており、平坦である。外面に煤が付着している。

竪穴住居25 (図42、47、49～51、図版8、11、34)

中央南区の中央にあたるN区の南端部で検出された。弥生集落の竪穴住居が密集した部分のほぼ中央部に位置している。北西側には、竪穴住居22・23が約2m離れて隣接する。この間に溝710219が掘削されており、西側の大溝3にのびている。竪穴住居22・23とは、平面形状・規模が類似しており、男里弥生集落の中で中心的な位置にあり、最大規模である。さらに、北側の竪穴住居24とは隣接しており、南東側には竪穴住居26が約2.5m離れて隣接する。南側では、竪穴住居はみつかっていない。周囲にはピット群や土坑が多くみられる。立地条件としては、検出面の地山はシルト層であるが、部分的に締まった礫層が現れており、竪穴住居の掘削にはあまり適しているとはいえない。上部はかなり削平を受けており、わずかに床面付近が残存しているのみである。北東部で、壁溝が2本に分かれて検出されていることから、この部分で拡張がおこなわれたことが想定される。

平面略円形を呈しており、規模は検出面で、最大径約8.4m、深さは約10cmを測る。埋土は、黄褐色粘質シルトが主体で、炭化物を含む。締まった礫層が部分的に現れている地山の上に位置しているが、貼床は確認されていない。

内部でピットは多く検出されており、特定はむずかしいが、復元案として、5～8基の柱穴が想定される。規模や間隔が一定ではないが、最大で8基となり、そのうち、柱間をほぼ等間隔に合わせた場合は、5基となる。埋土の断面観察でははっきりしなかったが、建て替えの可能性もあり、柱穴全体の復元は複雑な様相を呈している。また、拡張によって、柱が追加されたことも考えられる。ただし、検出状況から竪穴住居22・23とは異なっており、主柱穴は4基とは考えられない。いずれも平面円形または楕円形を呈しており、ピット710553を除いて、検出面で径約40cm、深さ約15cmを測る。埋土は、黄褐色粘質シルトである。

ピット710553は、南側に位置しており、他のピットよりも大型である。南北方向に長い平面楕円形を呈しており、規模は、検出面で長径約1.2m、短径約1.0m、深さ約0.4mを測る。2段掘りで、間に台石が埋められており、ここで埋土は大きく2層に分かれる。上層は、にぶい黄褐色粘質シルトが主体で、炭化物を含むブロックを含んでいる。台石の下になる下層は、さらに3層に分かれており、上から、明黄褐色砂質シルト、にぶい黄褐色砂質シルト、黄褐色砂質シルトで、下2層には炭化物を少量含んでいる。当初から柱穴として機能していたものではなく、なんらかの用途をもった土坑であったと考えられる。後に柱穴として使うことになり、柱を支える根石として台石を転用して埋めて使ったものといえる。あるいは、もともと台石を据えていた土坑であった可能性もある。

壁溝は、南西部で確認できない部分があるが、ほぼ全周するものと考えられる。北東側で部分的に2本に分かれて検出されていることから、この部分で拡張がおこなわれたものといえる。規模は、検出面で幅10～30cm、深さ約15cmを測り、断面U字状を呈する。埋土は、黄褐色粘質シルトが主体で、暗灰黄色土やにぶい黄褐色土が混じる。このため、竪穴住居22・23と同様に、竪穴住居の埋土よりやや色調が暗く、検出時には壁溝部分を筋状に確認することができた。

南側の壁溝内部からは、40～60cm間隔で杭の痕跡が確認されている。ここでも、壁溝の断面観察により、径約5cmの杭を打ち込み、さらに何度かに分けて壁溝を埋めている状況が見られる。このため、竪穴住居22・23と同様に土壁がつくられたとはいえず、草壁構造を想定することができる。竪穴住居22・23と類似した草壁構造をもつ、大型竪穴住居が複数つくられていたことがわかる。

ほぼ中央で土坑が検出されており、平面形は東西方向が長い楕円形を呈する。規模は、検出面で長径2.1m、短径1.5m、深さ約0.3mを測る。埋土は、3層に分かれており、上から黄褐色砂質シルト、黄灰色粘質シルト、黄褐色粘質シルトである。炉として使われたもので、下の2層に炭化物を多量に含んでいる。平面形では確認できなかったが、埋土の断面観察により、中間層は2度掘削された形跡がある。

遺物は、埋土中から弥生土器や石器類が出土している。土器は、いずれも小片で、形を復元できるものは少ない。図50-158は、直口壺の上半部である。口縁部はまっすぐ立ち上がり、外面には凹線が巡っている。159は、高杯杯部の口縁部である。口縁部に平らな面をもつ。壺の蓋に転用されたものと考えられ、内面に煤が付着している。160は、高杯の脚部である。円形の透かし孔が3ヶ所付く。端部は上方につまみあげられている。熱をうけて、赤く変色している。161は、中央土坑から出土したもので、高杯の杯部である。受け口状の口縁部であり、外面に2条の凹線が巡る。口縁部はほぼまっすぐに立ち上がる。脚部欠損後に再加工して水平にしている可能性がある。煤が付着している。162は、高杯の杯部である。受け口状の口縁部であり、外面に2条の凹線が巡る。161とはやや形状が異なり、口縁部はやや広がる。163は、壺の口縁部である。口縁部が、くの字状に外反している。口縁端部を肥厚させており、やや上方につまみあげられている。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。

石器は、磨製石器の大型品がみられる。図42-141は、柱穴から出土したもので、石錐である。有茎式の石錐を転用したもので、錐部に使用痕が見られる。図47-153と図51-164は、いずれもビット710553から出土したもので、台石である。最終的には、柱穴の根石として使われていたものである。いずれも砂岩製で、打撃痕のほか、線条痕も見られるため、砥石としても使用されていたことがわかる。165は砥石で、砂岩製である。4面を利用しており、研ぎ面は凹面をなしている。

竪穴住居22・23と竪穴住居25は、今回の調査で検出された弥生集落の中で、中心的な存在ということが出来るため、ここでまとめておくことにする。ただし、集落の全容が明らかになっていないため、あくまでも調査区域内での位置付けということが前提条件である。

これらの竪穴住居は、平面形が円形で径が8.5m級という大型のものである。男里弥生集落の中には、この規模を上回る竪穴住居も存在するが、単独でつくられて、ほぼ同じ規模の竪穴住居が隣接する状況は、他ではみつからない。また、重複関係はみられないことから、時期差は確定しない。2棟の竪穴住居の間に、二股に分かれた細い溝（溝710219）が掘削されており、大溝3に向かっている。遺構の詳細については、後述するが、竪穴住居に取り付く雨落ち溝をまとめて、大溝3に流す施設と考えることができる。この溝が、このような機能をもっているとすれば、竪穴住居が同時に存在したことになり、2棟の大型竪穴住居がほぼ接した状況でつくられていたことになる。

立地から見ると、東側に竪穴住居群があり、西側には、距離をおかず大溝3が広がっている。大溝の項で詳述するが、集落北端部の大溝1の水際とは異なり、大溝3の落ち込み傾斜は緩いことから、小型の船などをこの部分に上げることができたものと考えられる。このため、この竪穴住居の正面の位置に船が着く場所があるということになる。具体的な船着場に関連するような遺構や遺物は検出されていないため、あくまでも想像の域を出ないが、男里弥生集落の中で、唯一、船が着ける場所と考えることができる。

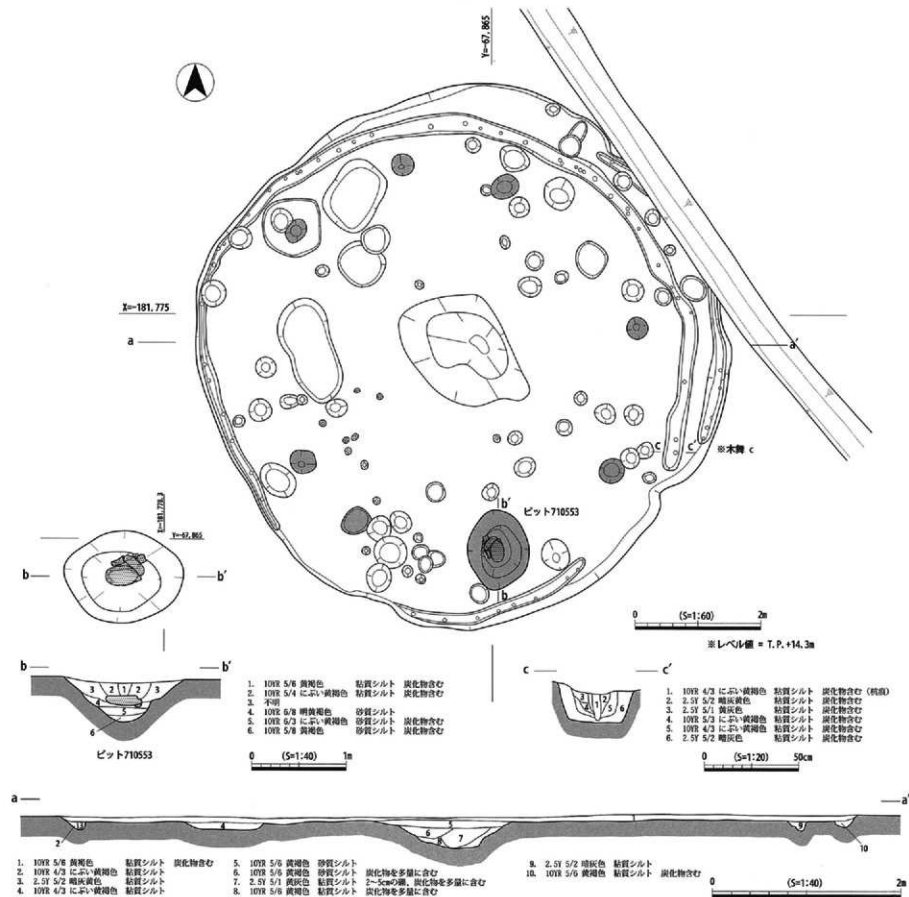


図49 竪穴住居25平・断面図

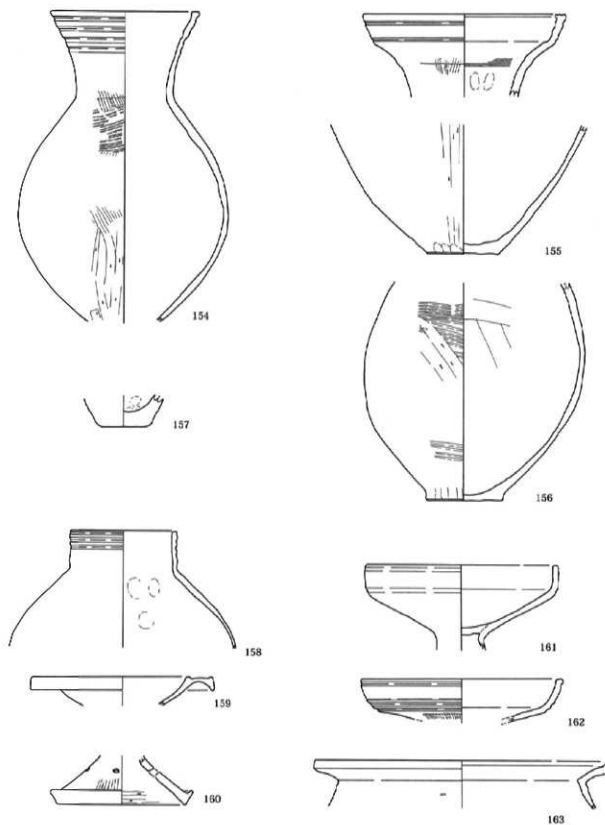
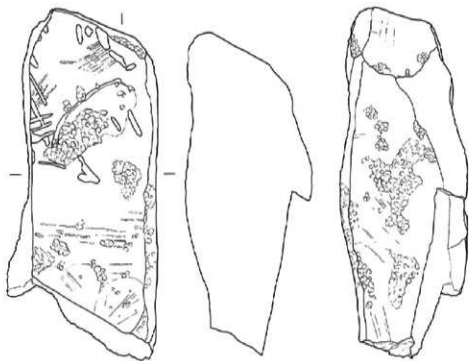
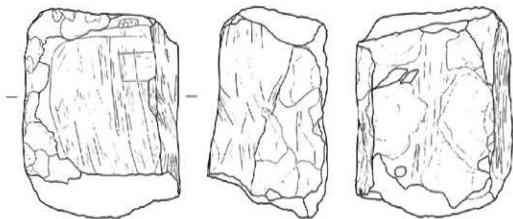
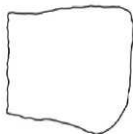


图50 竖穴住层22·23、24、25出土土器



164



165

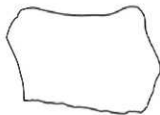


图51 整穴住层25出土磨制石器

平面形状や規模は、ほぼ同じであるが、上部構造には違いが見られる。まず、主柱穴の数が異なることから、屋根の形状には違いがみられるものと考えられる。現状では、遺構検出面の上部が削平により、かなり失われており、垂木の構造などは不明である。その中で、壁溝内から検出された杭の痕跡は、大きな成果といえる。これにより、草壁構造をもった竪穴住居がつくられていたと想定できる。しかし、このような検出例は少なく、今後発見例が増えるとともに、解明できるものと考えられる。竪穴住居の復原案は様々あり、ここで短絡的に、上屋構造を復原して2棟の竪穴住居の違いを論ずることは難しい。ただ、今回の調査成果により、規模が同等クラスであっても、上屋構造の違いで外観はかなり異なったものであったことは想像できる。

弥生時代の事例では、あまり確認されていないため、実態は不明な部分が多いが、古墳時代では、草壁構造を確認できる例がある。男里遺跡に近い場所での検出例として、阪南市亀川遺跡の竪穴建物151で検出された壁材が挙げられる。時期は、5世紀末～6世紀初頭であることから、直接の関係はないものであるが、壁の内装材として、植物の籐物を使用していることがわかる例である。建物の埋土の中から、約10cmの厚みをもった土壁と考えられる土層が見つかっており、内部に杭状の材を組み合わせている状況も確認されている。杭を木舞として土壁をつくっている構造と考えられている。さらに、土壁の外側には、葦と考えられる炭化物や植物を亀甲（籠目）状に編んだものが見られる。この状況は、時期の違いはあるものの、竪穴住居22・23や25と同様のものであり、壁構造を復原する要素として重要なものということができる。

また、ここでも竪穴住居の建て替えや拡張がみられるが、場所を変えてつくられているわけではない。ほぼ同じ場所で建て替えをしている。他の竪穴住居でも似たような例はあるが、男里弥生集落の中では、竪穴住居の建て替えに関して、何らかの規制があり、場所の選定が自由にできなかった可能性がある。竪穴住居25の位置は、まわりはシルト層の地山であるが、下層の締まった礫層が表面に現れている土層部分であり、竪穴住居の掘削にはあまり適しているとは思えないが、大型のものがつくられており、さらに拡張までおこなっている。これに対し、やや離れた場所では、シルト層の地山部分が広がっており、位置を少しずらすだけで、掘削しやすい土地を得ることが容易である。ただし、この部分では、竪穴住居はつくられていない。土地の条件で、竪穴住居の選地をおこなっていないというよりも、地山の掘削の容易さということは、竪穴住居の選地の条件にはなっていなかったようである。

大型の竪穴住居ということで、住人は男里弥生集落の上層階級クラスであると考えられる。弥生集落内で、どの程度の階級差というものが存在していたのかは不明であるが、竪穴住居の規模の差などから、階級差を想定することは可能である。男里弥生集落の中での立地で見ると、中心とはいえず、大溝3や現在の男里川を臨んでおり、集落の正面ともいうべき位置である。このため、集落の全容は不明であるが、支配者層の住居とは考えられない。ただ、集落の入り口に近い場所であることから、上層階級の住人であった可能性は強いといえる。かなり想像をふくらませてしまった感があり、まったく実証できないことであるため、適当ではないかもしれないが、大型の竪穴住居が接した状態で2棟並んで建てられている状況の解釈のひとつとして、挙げてみた。

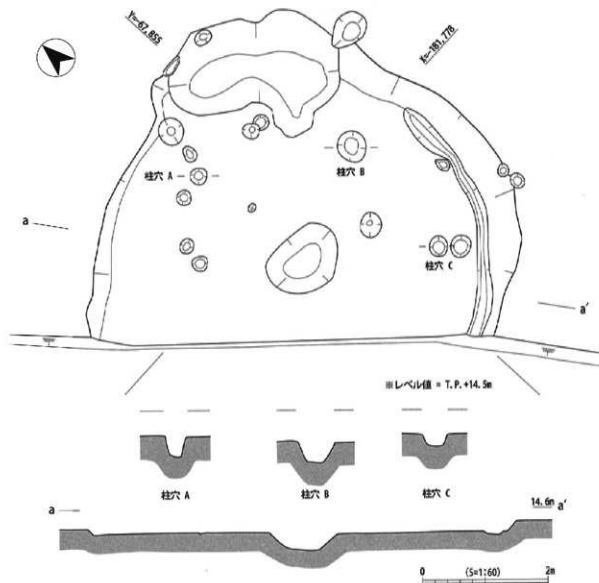


図52 竪穴住居26平・断面図

竪穴住居26 (図52、図版12)

中央南区の中央にあたるM区の南部で検出された。平面形状により、一部は西側のN区とQ区まで広がるものと考えられるが、調査区の狭間にあたることや攪乱が顕著であることなどから、本来の半分程度しか検出できなかった。上部は、後世の水路建設などによる削平でかなり失われており、攪乱土が床面付近まで達していることから、当初は竪穴住居の存在が判別できなかった。また、廃絶後につくられた土坑に切られている部分がある。調査時に、壁付近の埋土を確認しつつ掘削した結果、平面形がほぼ円形の竪穴住居が判明したという状況である。弥生集落の竪穴住居が密集した部分のほぼ中央部に位置している。西側の竪穴住居25とは、約2.5m離れて隣接している。東側には、約5m離れて竪穴住居27が隣接する。南側には隣接する竪穴住居はなく、約15m離れて竪穴住居28・29・30がつくられている。周囲にはピット群や土坑が多くみられる。検出面の地山はシルト層であり、締まった礫層は現れていない。拡張や重複はなく、単独で検出されたものである。

西側が検出されていないが、平面略円形を呈するものと考えられ、規模は、検出面で最大径約6.6m、

深さ10～20cmを測る。後世の攪乱層が多く入り込んでおり、床面付近まで達しているため、本来の埋土ははっきりしないが、暗褐色粘質シルトが主体で、炭化物を含む。貼床は確認されていない。壁溝は、南東側で部分的に検出されているが、明確なものではなく、ほかの部分でははっきりしない。状況から判断すると、全周するものと考えられる。検出された部分では、幅約25cm、深さ約5cmを測る。壁溝内を含めて壁際からは、杭の痕跡は確認されなかった。

内部でピットは多く検出されており、特定はむずかしいが、支柱穴は4～5基と考えられる。いずれも平面円形を呈しており、残存部で径30～40cm、深さ約25cmを測る。ただし、柱穴と判断できないものが多いことや、配置の問題などから、確定はできない状況である。

はっきりしたものではないが、ほぼ中央で土坑が検出されており、東西方向がやや長い平面楕円形を呈する。規模は、検出面で長径1.3m、短径0.9m、深さ0.2mを測る。炉として使われたものと考えられるが、顕著な炭層はみられない。北東端部で土坑が検出されており、竪穴住居22・23で見られる壁際の土坑に類似しているが、深く掘削されており、形状が異なることから、竪穴住居に伴うものとは考えられない。遺物は出土していないため、時期は不明であるが、竪穴住居廃絶後に掘削されたものである。他に関連する遺構は検出されていない。

埋土やピット内からは、遺物は出土していない。

ほぼ全面が攪乱などにより削平されており、大半を失っている状況であることから、竪穴住居の詳細は不明である。ただ、壁が比較的明瞭に検出されていることから、竪穴住居が存在したことが考えられる。立地場所としても、集落内で竪穴住居が多くつくられている部分であり、違和感はない。残念ながら、柱穴や壁溝などがはっきりしない部分が多いため、上部構造を含めて、詳細は不明である。

竪穴住居27 (図53～55、57、図版12、34、35)

中央南区の中央東側にあたるT区の北端部で検出された。弥生集落の竪穴住居が密集した部分の東側に位置している。西側には、約5m離れて竪穴住居26が隣接する。ほぼ東半部が検出されており、西半部は、市道部分である調査区外に広がる。東側や南側には隣接する竪穴住居はなく、南に約18m離れて竪穴住居28・29・30がつくられている。周囲にはピット群や土坑がみられるが、竪穴住居の重複はなく、単独で検出されている。西半部は未調査のため、全容は不明であるが、壁溝は全周するものと考えられる。部分的に東側で壁溝が2本検出されていることから、建て替えや拡張の可能性も考えることができる。

平面形は不整形を呈しており、全容は不明であるが、規模は、推定で最大径約7.2m、深さは、検出面で約30cmを測る。上面は削平されているため、旧耕作土除去後すぐに遺構検出ができるほどである。埋土は、黒褐色粘質シルトが基本で、上部に灰黄褐色粘質シルトが堆積する部分がある。貼床は確認されていない。埋土の観察からは、建て替えや拡張は確認できない。

壁溝は、全周するものと考えられ、検出された東半部では認められる。規模は、検出面で幅約30cm、深さ10～20cmを測り、断面U字状を呈する。埋土は、住居埋土と同じ黒褐色粘質シルトが基本である。壁溝内部からは、杭の痕跡は確認されていない。東側では約25cmの間隔をおいて、内側に同等規模の壁溝状の溝がさらに見られる。この2本の溝は重複していない。

内部でピットは多く検出されており、特定はむずかしいが、支柱穴は5～8基と考えられる。いずれも平面円形あるいは楕円形を呈しており、残存部で径30～60cm、深さ約25cmを測る。埋土は、暗褐色粘質シルトである。ただし、全容が不明であり、柱穴と判断できないものが多いことや、配置に問題があるため、確定はできない状況である。ピットは多いものの、建て替えなどは確認できない。

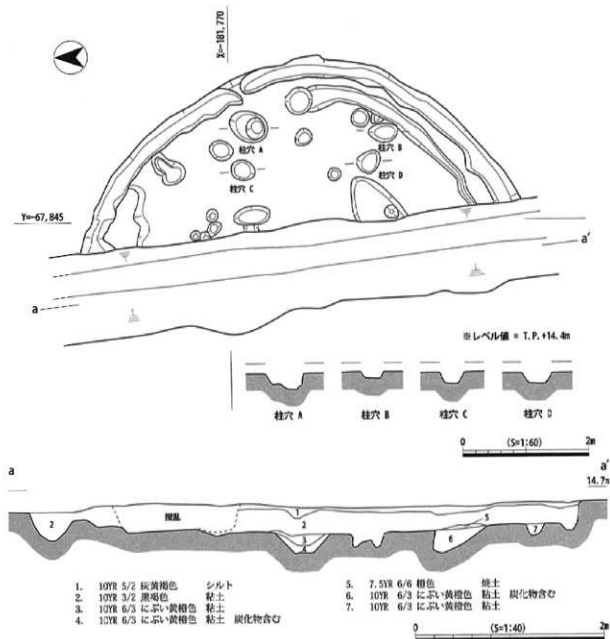


図53 竪穴住居27平・断面図

中央土坑と考えられる土坑は、調査区外に位置する可能性はあるものの、明確には検出されていない。ただ、ちょうど竪穴住居を南北方向に切るかたちで調査区の境界があり、その土層断面で中央部に土坑の存在が確認されている。埋土は、にぶい黄褐色粘質土で、下層に炭化物を多量に含んでいる。炉として使われたものかどうかは判断できないが、中央土坑と考えることができる。さらに、中央より南側で、東西方向が長い平面楕円形を呈する土坑が検出されている。規模は、現状で長径約0.9m、短径約0.6m、深さ約0.2mを測る。埋土は、暗褐色粘質土で、礫を含んでいる。上層で焼土層が確認されているが、埋土には炭化物は含まれていない。また、近接する壁溝内からは、炭化物が多量に検出されている。炉として使われたものとはいえないが、竪穴住居の南側に炭化物が広がる状況である。他に関連する遺構は検出されていない。

遺物は、埋土中から弥生土器や石器類が出土している。土器は、他の竪穴住居の状況とは異なり、形

を復元できるものが多く見られる。図化できたものだけで、10点にのぼる。竪穴住居の約半分を調査したのみで、この遺物量であるため、全体では、かなり多くの遺物が残されていることが想定される。男里弥生集落の中では、もっとも遺物出土量が多い。

図54-166は、把手付壺である。底部は欠損しているが、口縁部から体部中ほどにかけて残存しており、完形に近いところまで復元できたものである。口縁端部を肥厚させており、下方向に広がっている。口縁は開いており、口縁端部外面には凹線が巡る。肩部には、横方向の把手が対になったかたちで2ヶ所つけられている。胴部最大径はほぼ中央であり、外面のこの部分には、ヘラ状工具による斜め方向の刻目文（刺突文）が巡っている。外面の調整ははっきりしないが、胴部下半で縦方向のハケ調整が見られる。胴部内面には、指頭圧痕が明瞭に残っている。167は、受け口状口縁の壺である。胴部中ほどは欠損しているが、口縁部から体部中ほどにかけての上半部と底部は残存しており、完形に近いところまで復元できたものである。口縁部には、水差し形土器などで見られる「切り欠き」が施されている。同様の用途で使われた可能性がある。口縁は、やや広がっている。口縁部外面には凹線が巡る。頸部外面には、ヘラ状工具による斜め方向の刻目文（刺突文）が巡っている。外面の調整ははっきりしないが、胴部下半や底部で、縦方向のミガキ調整が見られる。胴部内面には、指頭圧痕が明瞭に残っている。底は平坦である。168は、直口壺で、ほぼ完形に復元できたものである。外面に煤が付着している。口縁部は、斜め上方に向かって広がり、外面には、凹線が3条巡っている。頸部外面には、ヘラ状工具による斜め方向の刻目文（刺突文）が巡っている。外面の調整ははっきりしないが、体部下半の外面には、縦方向のミガキ調整が見られる。胴部内面には、指頭圧痕が明瞭に残っている。底は平坦である。167と比較すると、口縁部の形状は異なるが、体部の形状や容量は類似している。

図55-169は細頸壺で、口縁部と胴部上半部が残存している。底部は欠損しているが、図上で口縁部から体部中ほどにかけての部分で復元できたものである。口縁部の外面に凹線が密に巡っており、口縁端部からやや下がった部分に2点一組の円形浮文が付けられている。口縁部の中ほどには、凹線がなく、代わりに斜め方向の刺突文が1列巡っている。口縁端部は、内湾している。口縁部内面には、指頭圧痕が明瞭に残っている。肩部外面には、直線文が巡っており、胴部最大径部分には、波状文が1列巡っている。胴部下半部にも直線文が施されていることがわかるが、底部付近では、縦方向のミガキ調整が見られる。170は、受け口状口縁の壺で、ほぼ完形に復元できたものである。外面に煤が付着している。口縁部外面には凹線が巡る。口縁部はまっすぐ立ち上がり、やや内湾している。頸部外面には、ヘラ状工具による斜め方向の刻目文（刺突文）が巡っている。外面の調整ははっきりしないが、胴部下半や底部で、縦方向のミガキ調整が見られる。胴部内面には、指頭圧痕が明瞭に残っている。底は平坦である。167と比較すると、口縁部の形状は異なるが、体部の形状や容量は類似している。171は、小型壺の体部である。口縁部が欠損している。表面の調整ははっきりしないが、内面には、指頭圧痕が明瞭に残っている。底は平坦である。172は、大型壺の体部下半である。底部付近で、縦方向のミガキ調整が見られる。内面には、指頭圧痕が明瞭に残っている。底は平坦である。173は、壺の体部下半である。底部付近で、縦方向のミガキ調整が密に見られる。底は平坦である。174は、壺の体部下半である。底部付近で、縦方向のミガキ調整が見られる。内面には、ハケ調整の痕跡が明瞭に残っている。底は平坦である。図57-175は、甕である。図上で復元できたものである。口縁部が、くの字状に屈曲しており、広がっている。表面の調整ははっきりしないが、外面の底部付近には、指頭圧痕が明瞭に残っている。底はややへこんでいる。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。

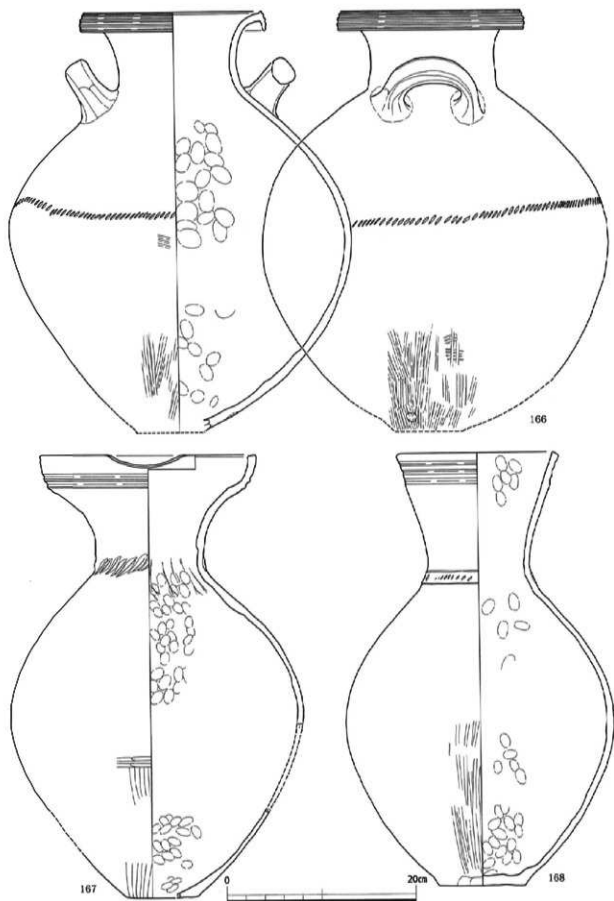


图54 竖穴住居27出土土器(1)

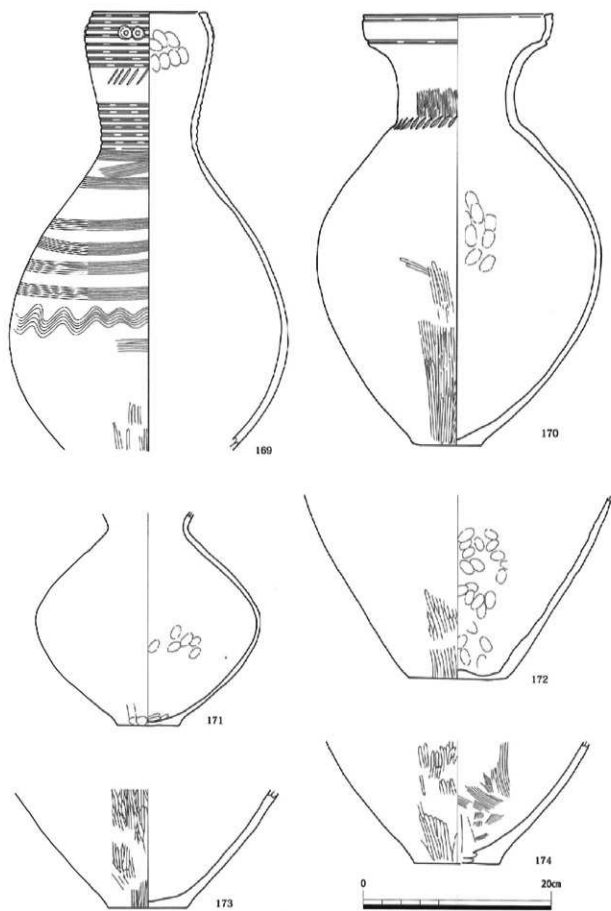


圖55 竪穴住層27出土土器(2)

竪穴住居28・29・30 (図56～60、図版13、35)

中央南区の南部にあたるR区の東端部で検出された。調査区が分割された部分にあたり、M区の南端部とT区の北西端部にまたがっている。弥生集落の竪穴住居が密集した部分の中央部より南側に位置している。隣接して竪穴住居は検出されておらず、北東に約15m離れて竪穴住居26がつくられている。周囲にはピット群が多くみられる。検出時の状況から、ピット群より後にこの竪穴住居が作られたことがわかる。立地条件としては、検出面の地山は、締まった礫層が現れており、竪穴住居の掘削にはあまり適しているとはいえない。この竪穴住居より北部は、ほぼ平坦であるが、南側は一段高くなっており、ピットは多いものの、竪穴住居の密集はなくなる。上部はかなり削平を受けているようであるが、残存状況は比較的良好。竪穴住居のまわりを掘り下げた状況ははっきりと確認できる。この点に関しては後述する。壁溝が複数に分かれて検出されていることから、この部分で建て替えや拡張がおこなわれたことが想定される。埋土の断面観察により、床面は2面検出されているほか、外形や壁溝の検出状況により、3棟の竪穴住居が重複していることがわかる。古い順に下から竪穴住居28、竪穴住居29、竪穴住居30と呼称した。ただし、後述するが、竪穴住居30の新旧関係は不明である。

竪穴住居28は、竪穴住居29とほぼ完全に重複しており、分離できないことから、実態はあまりはつきりしない。南側の壁溝が検出されたため、平面形が推定復原できたものである。推定で略円形を呈しており、規模は、検出面で最大径約7.8m、深さは約30cmを測る。南側の壁付近が確認されたのみで、大半は竪穴住居29の掘削で失われている。埋土も不明である。締まった礫層の地山の上に立地しているが、貼床は確認されていない。

内部でピットは多く検出されており、竪穴住居29のものも含まれることから、竪穴住居28に属する柱穴の特定はむずかしいが、復原案として4基以上の柱穴が想定される。4本柱の可能性もある。規模や間隔が一定ではないことや、確定できる柱穴がないことから、ここでは復原案にとどめておく。柱穴は、いずれも平面円形または楕円形を呈しており、検出面で径40～70cm、深さ約25cmを測る。埋土は、にぶい黄褐色粘質シルトが主体である。

壁溝は、南側で確認されたのみであるが、ほぼ全周するものと考えられる。南西側で竪穴住居29の壁溝と交差しており、この部分で竪穴住居の建て替えがおこなわれたものといえる。規模は、床面付近で幅約20cm、深さ約15cmを測り、断面U字状を呈する。埋土は、黄褐色粘質シルトが主体で、にぶい黄橙色土が混じる。壁溝内部からは、杭の痕跡が確認されている。壁溝の断面観察により、径約5cmの杭を打ち込み、壁溝を埋めている状況が見られる。

さらに、この断面観察により、竪穴住居を掘削する際の作業工程を知ることができた。竪穴住居を掘削するにあたって、まず、住居よりやや大きい不整形の竪穴を掘削している。これは、建て替えにより、さらに規模が大きくなると考えられるが、掘削が竪穴住居の分だけではないことを表している。断面観察により、竪穴住居28の壁部分で埋土ははっきりと区別することができる。壁溝を外形線とする竪穴住居の壁部分の外側は、人為的に一気に埋められた、裏込めの土と考えられる。この層は、にぶい黄褐色礫混じりシルト層である。壁溝部分は、まっすぐに立ち上がったかたちで、灰黄褐色粘質シルト主体のにぶい黄橙色土が混じる層が認められ、中に杭の痕跡が見られる。このことから、壁溝内で検出された杭の痕跡は、竪穴住居22・23や竪穴住居25などで見られた草壁構造とは、異なったものと考えられる。壁溝部分で、中に杭の痕跡をもち、竪穴住居の内部と外部を隔てるものが存在することから、これを土壁と想定した。壁溝内に等間隔で杭を打ち込み、これを木舞として土壁をまわりに巡らした状

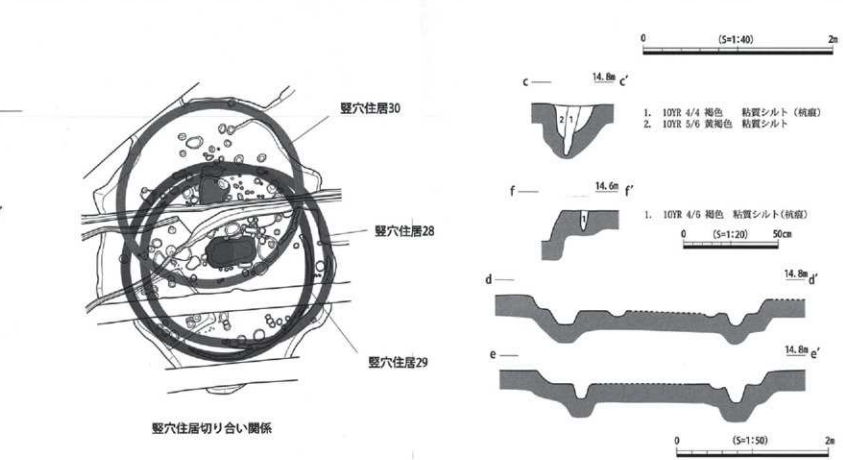
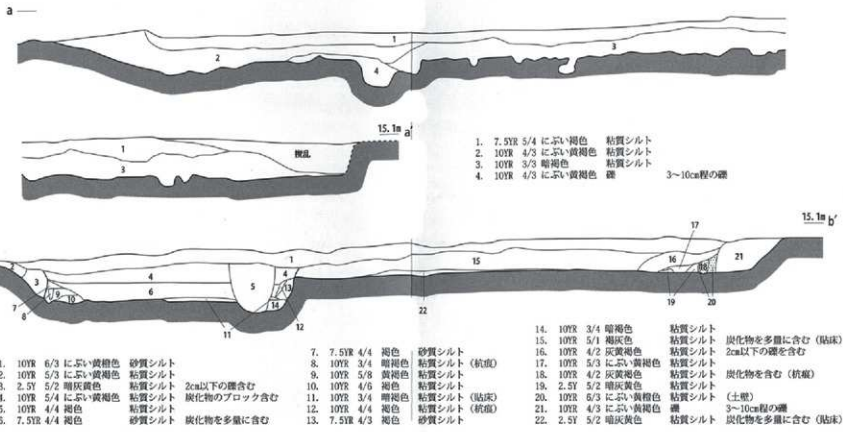
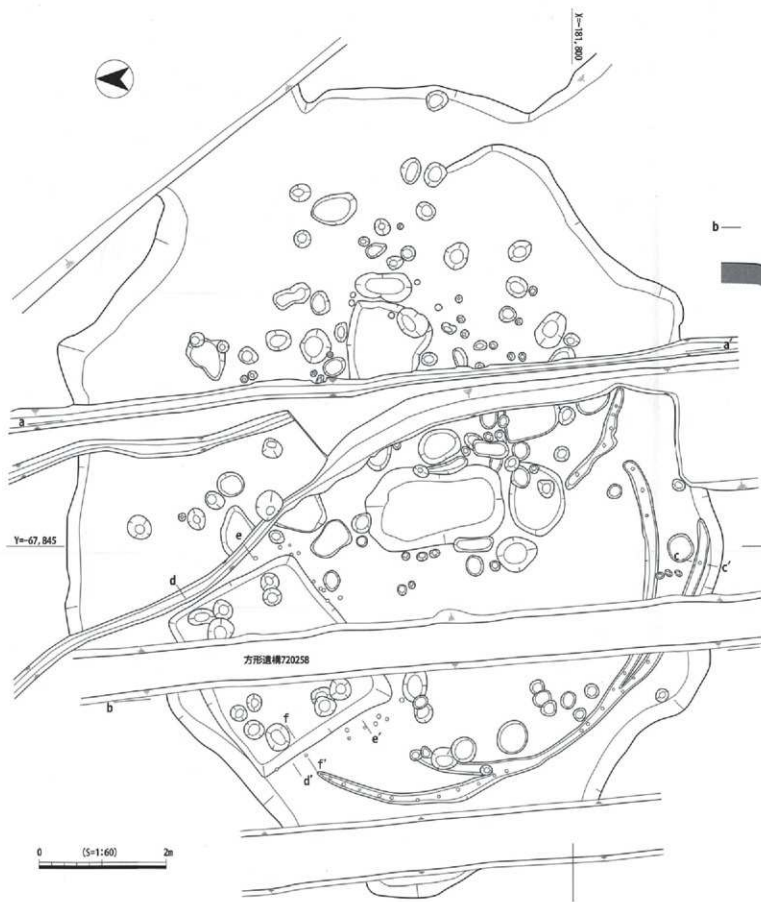


図56 竪穴住居28・29・30平・断面図

況である。平面では、草壁構造の竪穴住居の杭との違いははっきりしないが、断面観察により、区別することができる。男里弥生集落の中で、壁溝内からの杭の痕跡の検出例は多いが、土壁構造と確認できた例はこの竪穴住居28のみである。

中央部で、東西方向が長い楕円形を呈する土坑が検出されており、明確に分けることはできなかったが、竪穴住居29の中央土坑と重複しているものといえる。規模は、検出面で長径2.2m、短径1.2m、深さ約0.3mを測る。竪穴住居28の中央土坑は、平面形状の推定から、径約1.0mの円形を呈したものと考えられる。埋土は、2層に分かれており、上層はにぶい黄褐色粘質シルト、下層は灰黄褐色粘質シルトで、礫を多く含んでいる。炉として使われたもので、いずれの層にも炭化物を多量に含んでいる。

竪穴住居29は、前述したように、竪穴住居28とほぼ完全に重複しており、ほとんど切った状況である。そのため、平面形ははっきりせず、南側の壁溝が検出されたことから、平面形が推定復元できたものである。推定で略円形を呈しており、規模は、検出面で最大径約8.4m、深さは約30cmを測る。東側は、竪穴住居30との重複で壁溝が失われていることから、不明である。埋土は、2層に分かれており、上層はにぶい黄褐色粘質シルト、下層は褐灰色粘質シルトで炭化物を含む。貼床は、わずかに層の厚さ約5cmが確認されたのみである。土質は、暗灰黄色シルトが主体で、明黄褐色粘質シルトを含む。炭化物も混じっている。

内部でピットは多く検出されており、前述したように、竪穴住居28のものも含まれることから、竪穴住居29に属する柱穴の特定はむずかしいが、復原案として4基以上の柱穴が想定される。規模や間隔が一定ではないことや、確定できる柱穴がないことから、ここでは復原案にとどめておく。柱穴は、いずれも平面円形または楕円形を呈しており、検出面で径40～70cm、深さ約25cmを測る。埋土は、褐灰色粘質シルトが主体で、炭化物を含んでいる。

壁溝は、南西側で確認されたのみであるが、ほぼ全周するものと考えられる。ここで竪穴住居28の壁溝と交差していることから、この部分によって竪穴住居の建て替えがおこなわれたことが確認できる。規模は、床面付近で幅20～30cm、深さ約15cmを測り、断面U字状を呈する。埋土は、暗灰黄色粘質シルトが主体で、明黄褐色土が混じる。壁溝内部からは、杭の痕跡が確認されている。壁溝の断面観察により、径約5cmの杭を打ち込んでいる状況が見られる。

竪穴住居29をつくる際に、竪穴住居28の外形線を利用したことが推測され、ほぼ同様の構造をもったつくりと考えられるが、壁溝付近の断面観察では、土壁の存在を示すようなものは検出されなかった。竪穴住居28を北へ約90cmずらした位置につくられている。壁溝内では、杭の痕跡は明確に検出されていることから、詳細は不明であるが、壁構造をもつ竪穴住居の可能性は高い。

前述したように、中央部で、東西方向が長い楕円形を呈する土坑が検出されている。明確に分けることはできなかったが、竪穴住居28の中央土坑と重複しているものといえる。規模は、検出面で長径2.2m、短径1.2m、深さ約0.3mを測る。竪穴住居29の中央土坑は、全体は不明であるが、平面形状の推定から、径約1.3mの円形を呈したものと考えられる。埋土は、2層に分かれており、上層はにぶい黄褐色粘質シルト、下層は灰黄褐色粘質シルトで、礫を多く含んでいる。炉として使われたもので、いずれの層にも炭化物を多量に含んでいる。

竪穴住居30は、R区で竪穴住居28・29の西半部と重複しているが、切り合い関係が不明であることから、新旧の区別ができない状況である。T区の東半部は、調査時には竪穴住居と認識していなかった

こともあり、平面形ははっきりしていない。R区で南西側の壁溝が検出されたことから、平面形が推定復原できたものである。推定で略円形を呈しており、規模は、検出面で最大径約7.2m、深さは約30cmを測る。東側では、竪穴住居28で見られるような、住居よりやや大きい不整形形の竪穴が確認できる。このため、同様の意識で竪穴住居がつくられたことがわかる。埋土は、2層に分かれており、上層はにぶい褐色粘質シルト、下層はにぶい黄褐色粘質シルトである。貼束は確認されていない。

内部でピットは多く検出されており、特に西半部のR区では、竪穴住居28・29のものも含まれることから、竪穴住居30に属する柱穴の特定はむずかしい。また、東半部のT区でも柱穴の特定はむずかしいが、復原案として4基以上の柱穴が想定される。規模や間隔が一定ではないことや、確定できる柱穴がないことから、ここでは復原案にとどめておく。柱穴は、いずれも平面楕円形を呈しており、検出面で径40～70cm、深さ10～25cmを測る。埋土は、褐灰色粘質シルトが主体である。

壁溝は、南西側でわずかに延長約1.8mが確認されたのみであるが、ほぼ全周するものと考えられる。規模は、床面付近で幅約20cm、深さ約15cmを測り、断面U字状を呈する。埋土ははっきりせず、竪穴住居の埋土とほぼ同じである。壁溝内部からは、杭の痕跡が確認されている。他の竪穴住居のように壁構造をもったものと考えられるが、上部構造を復原できるまでには至らなかった。竪穴住居を掘削するにあたって、先に住居よりやや大きい不整形形の竪穴を掘削している。ただし、断面観察では、壁部分で内部と外側の埋土をはっきりと区別することができなかった。

T区の調査区端部で、不整形形を呈する土坑が検出されている。未調査部分に広がる部分が多いことから、全容ははっきりしないものの、竪穴住居のほぼ中央部に位置しているものと考えられる。規模は、検出面で一辺約1.2m、深さ約0.2mを測る。埋土は、暗赤褐色土が主体である。焼土や炭化物が検出されており、炉の可能性はある。

このほかに、竪穴住居29の南西部で、重複した方形遺構720258が検出されている。竪穴住居29の廃絶後に掘削されたものであり、竪穴住居とは直接関係はないものと考えられる。規模は、長辺約3.0m、短辺約2.4m、深さ約0.4mを測る。埋土は、にぶい黄褐色粘質シルトが主体で、暗灰黄色シルトが混じる。内部でピットが多く検出されており、配置から4本柱をもつ竪穴住居状の遺構と考えられる。また、ほぼ同位置に柱穴が検出されており、建て替えの可能性もある。周囲には杭の痕跡が多く見られ、上部構造を復原するまでには至らなかったが、屋根のような施設を伴っているものといえる。住居として機能していたものかどうかは判断できない。遺物量も少なく、時期を決定できないが、弥生時代にはおさまるものと考えられる。

遺物は、埋土中から弥生土器や石器類が出土している。ただし、どの竪穴住居に伴うものかははっきりしないため、特定できない。土器は、いずれも小片で、形を復元できるものは少ない。図57-176は、直口壺の口縁部である。口縁は、斜め上方に向かって広がり、外面には、口縁端部からやや下がった位置に突帯が1条巡っている。177は、壺の口縁部である。口縁端部を肥厚させており、下方向に広がっている。口縁端部外面には凹線が巡っており、口縁端部からやや下がった部分に3点一組の円形浮文が付けられている。口縁部内面には、2点一組の紐孔があげられている。178は、壺の肩部である。外面に簾状文が2本巡り、その下に斜め方向のヘラ状工具による刺突文が施されている。179は、小破片であるが、壺の口縁部である。口縁端部が大きく外反し、水平面をなすもので、口縁部に近い内面に扇形文がつけられているほか、口縁端部外面にも扇形文が施されている。180は、鉢の上半部である。口縁端部を肥厚させており、やや下方向に広げて面をつくっている。肩部には直線文が施されている。内面に

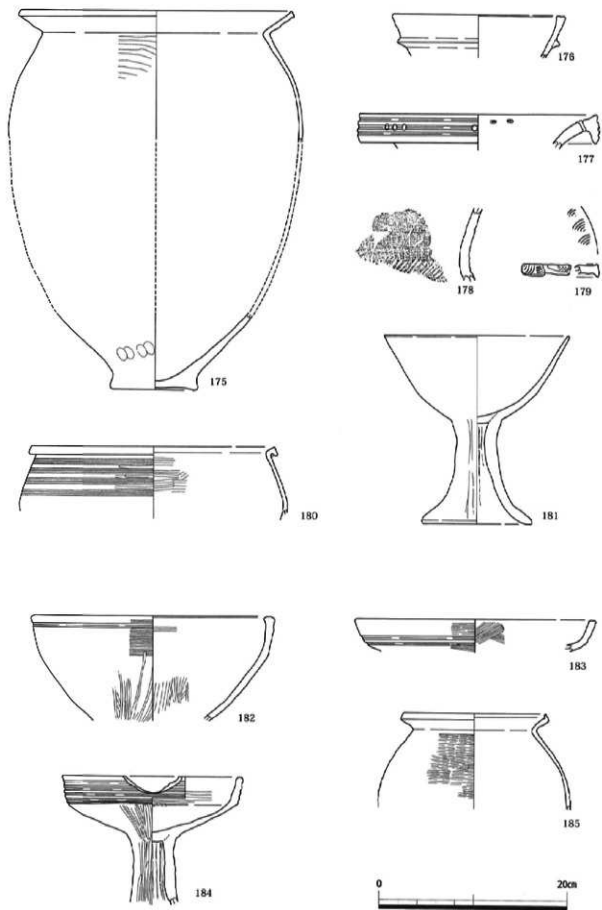


图57 竖穴住居27、28·29·30、31出土土器

は、横方向のハケ調整が見られる。181は、ほぼ完形に復元できた高杯である。杯部と脚部の接合には、円板充填がおこなわれており、脚部の内面には絞り目がはっきりと確認できる。

石器は、打製石器のほか、磨製石器の大型品がみられる。図58-186は、凸基Ⅱ式の石鏃を転用した石錐である。錐部には使用痕が見られる。187~191は、石鏃である。187は凸基Ⅰ式で、先端部を欠損している。188は凹基式で、片面に大きな剥離面を残している。189は凹基式であるが、先端部とかえり部を欠損している。190は、先端部を欠損している。191は凸基Ⅱ式で、ほぼ完形品である。192は、Ⅲ類の石錐である。両端の錐部を欠損している。193は、有茎式の石鏃である。194は、Ⅱ類の石錐である。錐部には使用痕が見られる。195は石槍で、基部のみ残存しているものと考えられる。

図59-197は叩き石で、砂岩製である。側縁に叩打痕が残るが、表裏面は滑らかであり、すり石として使用されていた可能性もある。198・199は叩き石で、砂岩製である。198は片面中央に、199は両端部に叩打痕が残っている。200は石皿で、砂岩製である。約半分が残存しており、片面がわずかにくぼんでいる。201は小型の柱状片刃石斧で、緑色片岩製である。刃先には線条痕が残っている。202は石皿か台石で、砂岩製である。中央に打撃痕が見られ、片面がわずかにくぼんでいる。203は石槌で、緑色片岩製である。先端の形状は石棒に似ている。上下は両端に向かう研磨により、成形されている。中央部は、叩打により溝を巡らしている。両端には叩打痕があるほか、一部剥離欠損している。図60

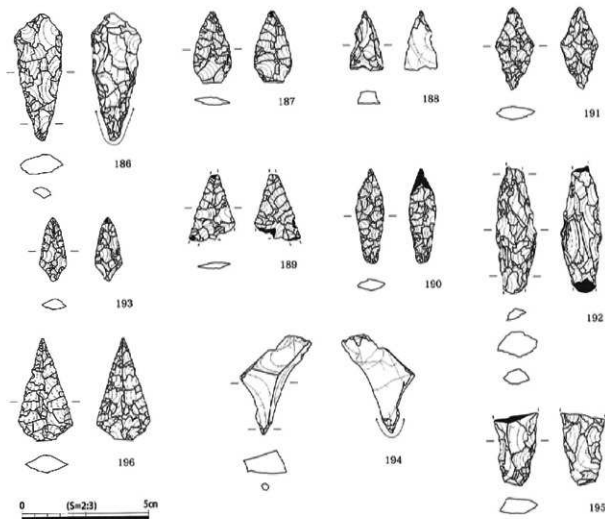


図58 雙穴住居28・29・30、31出土打製石器

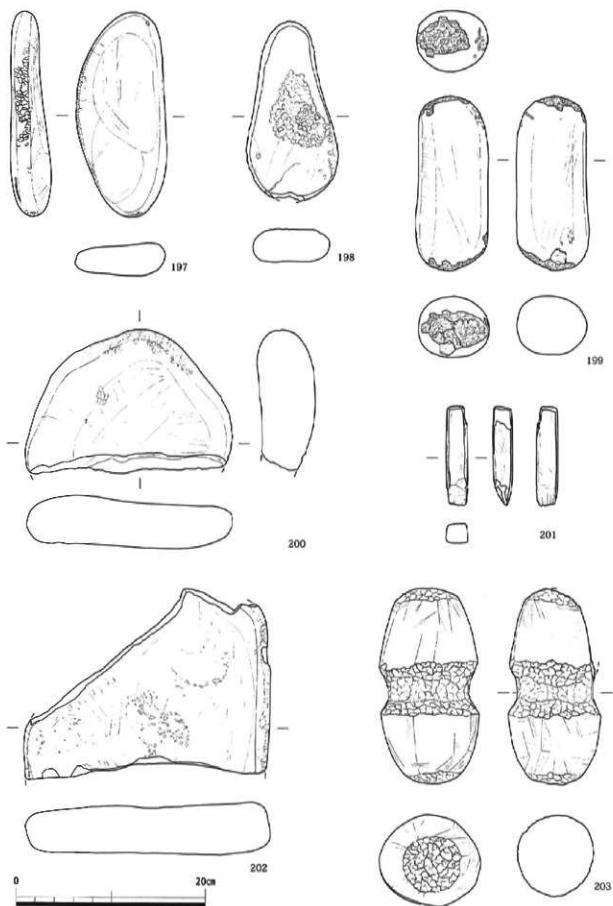


图59 豎穴住居28·29·30出土磨製石器(1)

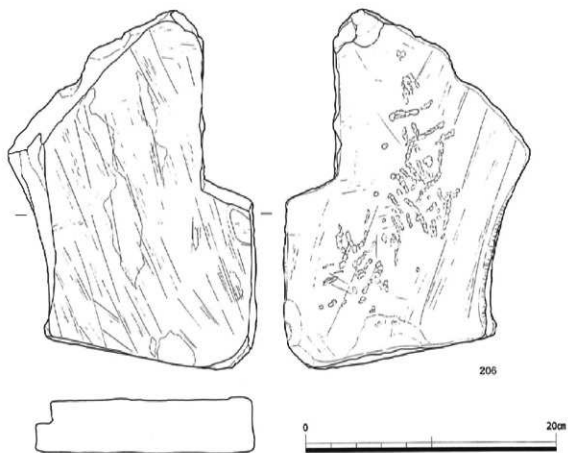
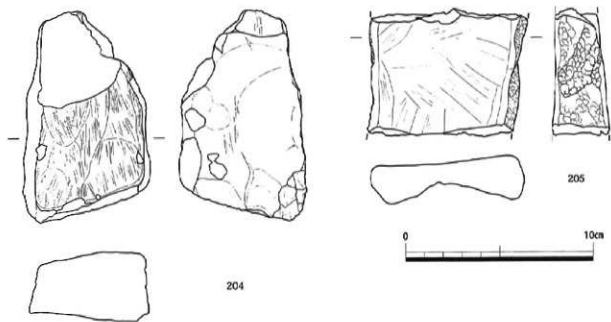


圖60 豎穴住層28・29・30出土磨製石器(2)

—204は砥石で、石英安山岩製である。表面は硬質であるが、表裏面に線条痕が見られる。205・206は砥石で、砂岩製である。205は、表面はわずかにくぼんでおり、裏面は自然のくぼみが残っている。206は、表裏面に線条痕が見られる。打撃痕が片面に顕著であるため、台石として使用されていた可能性もある。

竪穴住居31 (図57、58、61、62、図版14、35)

中央南区の南部にあたるT区の中央部やや北寄りで検出された。弥生集落の竪穴住居が密集した部分から離れた南側に位置しており、西側の竪穴住居28・29・30と約25m離れている。また、南側の竪穴住居32と約7m離れて隣接する。周囲にはピット群や土坑がみられるが、竪穴住居の重複はなく、単独で検出されている。削平をうけているため、上部はやや失われている。建て替えや拡張はおこなわれていない。

平面形は不整形を呈しており、規模は、検出面で最大径約6.8m、深さは、約30cmを測る。埋土は、にぶい褐色粘質シルトが主体で、礫を含んでいる。締まった礫層の地山であるが、貼床は確認されていない。壁溝は、南半部のみで検出されているが、全周するものかどうかは不明である。規模は、床面付近で幅30～40cm、深さ約10cmを測り、断面U字状を呈する。埋土は、竪穴住居の埋土とほぼ同じである。壁溝内部からは、杭の痕跡は確認されていない。上部構造は不明である。

内部でピットは多く検出されているが、主柱穴は4基と考えられる。いずれも平面円形または楕円形を呈しており、残存部で径約50cm、深さ約30cmを測る。埋土は、にぶい黄褐色シルトが主体で、褐灰色粘質シルトが混じる。

中央よりやや西側で土坑が検出されており、東西方向がやや長い平面楕円形を呈する。規模は、検出面で長径1.2m、短径0.8m、深さ0.3mを測り、断面U字状を呈する。埋土は、3層に分かれており、上から黒褐色シルト、灰黄褐色シルト、暗褐色シルトである。炬として使われたものといえるが、あまり顕著な炭層はみられない。下層に炭化物を多く含んでいる。東側で近接してピットが検出されている。規模は、検出面で径約50cm、深さ約10cmを測る。埋土は、にぶい褐色粘質シルトであるが、炭化物を含んでいる。規模はあまり大きくないが、炬に付随して灰や炭などを蓄えるピットと考えることができる。他に関連する遺構は検出されていない。

遺物は、埋土中から弥生土器が多く出土しているが、完形に復元できるものはなかった。出土状況に関しては、特に中央土坑からの遺物出土が目立った。図57-182は鉢で、底部を欠損している。口縁端部をやや肥厚させており、外面に1条の凹線が巡る。口縁部外面には、横方向のハケ調整が密に施されている。体部下半には、内外面とも縦方向のミガキ調整がみられる。183は、高杯杯部の口縁部である。

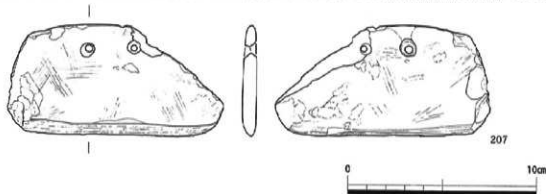


図61 竪穴住居31出土磨製石器

受け口状の口縁部であり、内外面ともに横方向のハケ調整が施されている。184は高杯で、脚台部を欠損している。口縁部の外面に凹線が施されている。杯部下半から脚にかけて、縦方向のミガキ調整がみられる。口縁部を一部打ち欠いている。脚台部欠損後に擦っており、自立できるように加工している。口縁部内外面に煤が付着しており、転用されたものと考えられる。185は甕で、体部下半を欠損している。口縁部は、くの字状に外反しており、口縁端部の内側をややつまみあげている。体部上半には、横方向のタタキ調整がみられる。

石器では、図58-196の石鏃が出土している。有茎式で基部が欠損している。また、図61-207は、緑色片岩製の石廬丁である。片刃のもので、端部を一部欠損している。紐孔の背側には、紐擦れ痕が認められる。

竪穴住居32 (図62、図版14)

中央南区の南部にあたるT区の中央部やや北寄りで検出された。弥生集落の竪穴住居が密集した部分から離れた南側に位置しており、今回検出された竪穴住居の中では最も南に位置している。これより南側では、ピットや土坑もあまりみられなくなる。北側の竪穴住居31と約7m離れて隣接する。周囲にはピット群や土坑がみられるが、竪穴住居の重複はなく、単独で検出されている。削平をうけているため、上部はかなり失われている。

平面形は不整形を呈しており、規模は、検出面で最大径約7.5m、深さは、約10cmを測る。埋土は、黒褐色粘質シルトが主体で、礫を含んでいる。締まった礫層の地山であるが、貼床は確認されていない。壁溝は、部分的に北側と西側のみで検出されているが、全周するものかどうかは不明である。規模は、床面付近で幅約20cm、深さ約5cmを測る。埋土は、竪穴住居の埋土とほぼ同じである。壁溝内部からは、杭の痕跡は確認されていない。他の竪穴住居のように壁構造をもったものと考えられるが、上部構造を復原できるまでには至らなかった。

内部でピットは多く検出されているが、支柱穴は4基と考えられる。いずれも平面円形または楕円形を呈しており、残存部で径30～40cm、深さ10～30cmを測る。

中央部で、重複したかたちで土坑が2基検出されている。いずれも平面楕円形を呈している。北側の土坑を南側の土坑が切ったかたちになっている。規模は、検出面で北側が径約0.8m、深さ0.3m、南側が長径1.0m以上、短径約0.8m、深さ0.3mを測る。炉として使われたものといえるが、あまり顕著な炭層はみられない。炉の重複が見られることから、竪穴住居の建て替えも考えられるが、平面形でははっきりしない。ここでは、建て替えの可能性があるということにとどめておく。他に関連する遺構は検出されていない。

遺物は出土していない。

小結

以上が検出された竪穴住居の成果であるが、ここで竪穴住居に関する簡単なまとめをしておきたいと思う。男里弥生集落の中心をなす竪穴住居は、居住域の中でもっともまとまった遺構である。南北方向に狭長な調査区であるため、居住域の西端部を明らかにしたのみであり、東西方向の広がりが不明な点もあって、全体の規模はわからないが、集落内における竪穴住居の傾向を知ることができる。

竪穴住居を32基余検出したが、平面形や規模が多岐にわたっている。平面形では、円形がほとんどであるが、竪穴住居19のように隅円方形も存在する。また、規模では重複によりはっきりしないものもある。

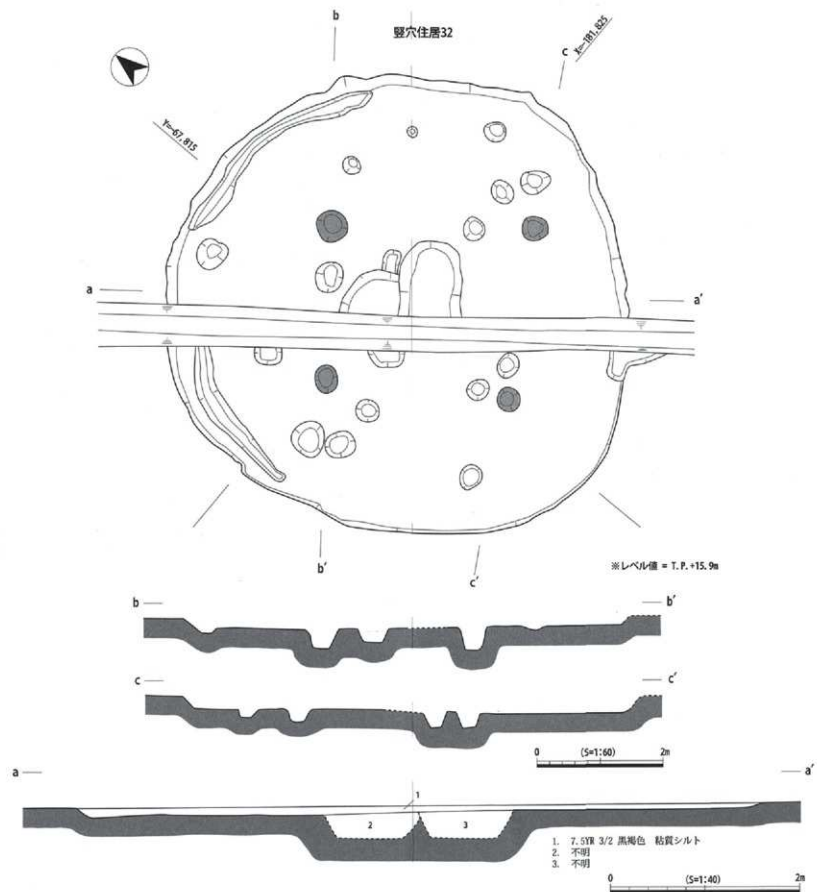
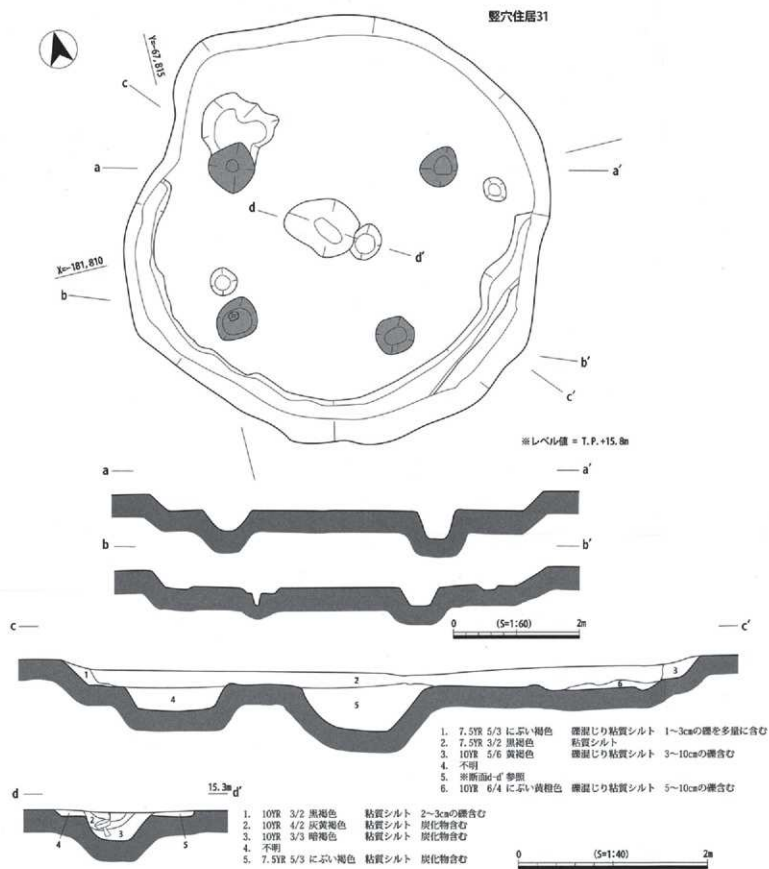


図62 竪穴住居31、32平・断面図

るが、竪穴住居15のような径4mクラスのものから竪穴住居25のような径8.5mクラスのものまで見られる。全体の傾向として、規模の小さい竪穴住居は少なく、径8m程度の方が比較的多い。立地上での優劣はあまり感じられず、同規模の竪穴住居がまとまる傾向はない。おおよその傾向であるが、径8mクラスの竪穴住居は隣接するものが少なく、ある程度の距離を隔てて位置しており、小型の竪穴住居がそれに隣接する状況が見られる。また、居住域の南半部と比べて、北半部に集中している。北半部では、拡張や建て替え、重複などが頻繁におこなわれており、常に数棟の竪穴住居が存続していたことが想定できる。ただし、個々の切りあいにおける竪穴住居の重複関係はわかるが、隣接する竪穴住居との前後関係は不明であるため、同時に何棟の竪穴住居が存在していたのかを知ることは困難である。竪穴住居からの出土遺物が極端に少ないことも、時期決定の困難さを表している。ただ、集落の存続期間中には、ほとんど断絶なく竪穴住居が存続していたものと考えられる。

竪穴住居の重複が多く、単独でつくられている竪穴住居は非常に少ない。地山が締まった礫層で、掘削が困難な位置で建て替えをおこなっているにもかかわらず、やや離れた位置のシルト層の地山部分では竪穴住居がつくられていない。このことから、竪穴住居の重複が多い理由としては、立地条件とは考えられず、集落内でなんらかの規制があったものと推測される。土地の自由な選択ができなかったようである。南半部に竪穴住居が少ない理由の一つということも考えられる。

次に、竪穴住居の上部構造について興味深い例が見つかった。壁溝内における杭の痕跡である。竪穴住居22・23、25で検出された杭の痕跡については、土層断面の観察により、草壁の支柱と判断した。同様の杭の痕跡は、他の竪穴住居でもみつかっており、草壁構造をもつ竪穴住居が複数建てられていたことがわかる。さらに、竪穴住居28・29・30では、検出面ではあまり変わらないが、土層断面の観察により、土壁がつくられており、その木舞と判断した。竪穴住居をつくる際に、やや大きめの竪穴を掘削し、その内側に円形の壁溝を巡らせ、杭を並べて木舞とし、土壁をつくる。さらに、土壁の外側に裏込めの土を入れて安定させている。草壁や土壁を上部構造に取り入れている竪穴住居の存在は、特徴的である。ただし、すべての竪穴住居がこの構造をもっているわけではなく、杭の痕跡が検出できない竪穴住居も存在する。

さらに、特異な形状の竪穴住居として、竪穴住居3と4があげられる。詳細は不明であり、多分に推測の域を出ないが、他地域の特徴をもつ竪穴住居の存在が考えられる。竪穴住居3は、適切な表現ではないが、ベッド状遺構のような施設をもっており、類例を四国で見つけることができる。ただし、四国の例は弥生時代後期であることから、直接の関係は不明である。また、竪穴住居4では、楕円形の中央土坑の両端にピットが付属しており、形状のみで見ると、いわゆる「松菊里型住居」に類似している。日本で検出されている「松菊里型住居」は弥生時代早期から中期までのものであるため、無関係とはいえない。ただし、いずれも今後の検証が必要であり、ここでは可能性を示唆するのみに留めておく。

なお、男里弥生集落に近接する遺跡で弥生時代の竪穴住居が検出されているのは、泉南市滑瀬遺跡と阪南市向出・向山遺跡である。滑瀬遺跡では、中期後半から後期の竪穴住居が15棟確認されている。丘陵上の集落として注目されており、時期的にも重なることから、男里弥生集落との関係が興味深い。一方、向出・向山遺跡では、後期の竪穴住居が2棟検出されている。集落の実態は不明であるが、今回検出された男里弥生集落に続く時期の集落として注目される場所である。

(3) 掘立柱建物・ピット

男里弥生集落の主体をなすのは竪穴住居であるが、居住域ではおびただしい数のピットが検出されている。ただし、包含層が大幅に削平をうけており、検出面は地山面であるため、ピットの掘り込み面を確定することができない。また、遺物の出土量が少ないため、すべてを弥生時代のもので断定することはできないが、検出時の埋土の状況から、弥生時代に属するものがほとんどであると考えられる。居住域における分布状況は、竪穴住居と同様に、北半部で密集しており、南半部で比較的少ない。北半部では、ほぼ全面で検出されており、密集していることから、建物を復元することはできなかった。実際は、かなりの数の掘立柱建物がつくれ、何度も建て替えられた状況が想定される。

掘立柱建物の復元ができないことから、居住域内における掘立柱建物の配置などもほとんど復元することができなかった。ピット全体の傾向としては、北半部の密集している部分においても、竪穴住居との重複関係はあまり認められなかったことがあげられる。このことは、竪穴住居と同様に、掘立柱建物の立地に関してもなんらかの規制が存在していたことを示している。竪穴住居と掘立柱建物は、並存していたものと考えられるが、建てる位置が区別されていたことが推測される。用途が異なっていたものと考えられることから、位置に関しては、はっきりとした区別をしていたものといえる。

北半部のピットの密集傾向を細かくみると、分布状況にやや差が認められる。竪穴住居の配置の際に指摘していたが、竪穴住居22・23の北側にやや広い空間地があり、ピットの分布も比較的少ない。集落の広場的な部分と考えられ、竪穴住居はつくられていないが、掘立柱建物もこの場所には建てられていなかったものと推測される。これに対し、竪穴住居12の東側や竪穴住居24の東側などでは、ピットがかなり密集しており、掘立柱建物が常時、複数棟建てられていたものと考えられる。この部分の竪穴住居と掘立柱建物に関しては、重複関係の有無が不明であるため、並存していたものか、時期差でどちらかが先につくられていたのかは、判断できない。

南半部においても、特にR区では多くのピットが検出されており、掘立柱建物が常時、複数棟建てられていたものといえる。この部分に位置する竪穴住居28・29・30は、検出時の状況から、ピット群より後につくられたことが判明している。このため、掘立柱建物のみが建てられていた領域に、竪穴住居を新たにつくったものといえることができる。この状況から類推すると、北半部でもピットの集中している部分に存在する竪穴住居は、掘立柱建物の領域に後から進出したものと考えられることができる。この観点で見ると、ピット集中部分に存在する竪穴住居2や3、4は、単独でつくられており、重複や建て替えなどは認められない。さらに南部で検出されている竪穴住居31、32も、詳細ははっきりしないが、同様に新たに領域を広げてつくられたものと考えられることができる。

かなり、想像がたくましくなりましたが、一つの推論として、以下のことが考えられよう。これは、あくまでも仮説に過ぎず、証明できる事実ほとんどないことをお断りしておく。居住域の中で、当初、竪穴住居と掘立柱建物の位置が決められており、その中で建て替えや拡張をおこなった結果、多くの重複が発生した。その後、人口の増加などによって、竪穴住居の棟数を増やす必要性が起こった結果、決められた位置の中で新たな竪穴住居をつくる土地がなくなった。新たな土地を求めため、従来の掘立柱建物の領域を削ることにより、新規の竪穴住居をつくるようになった。

この仮説によると、竪穴住居の分布状況とピットの間関係を説明することが可能であると考えられる。ただし、多分に想像の域を脱していないことから、実際には、このような観点をもって、遺構の分布状況や位置関係を見るのが重要で、実証していかなければならない問題である。

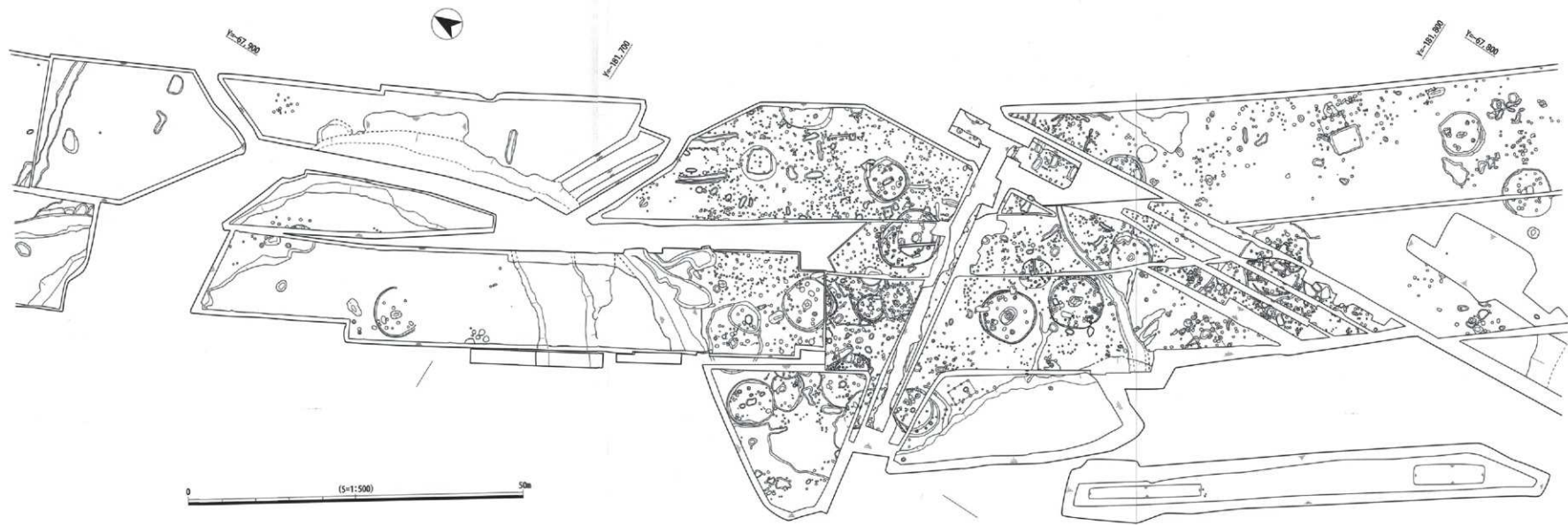


図63 弥生時代遺構（ピット・土坑・溝）分布図

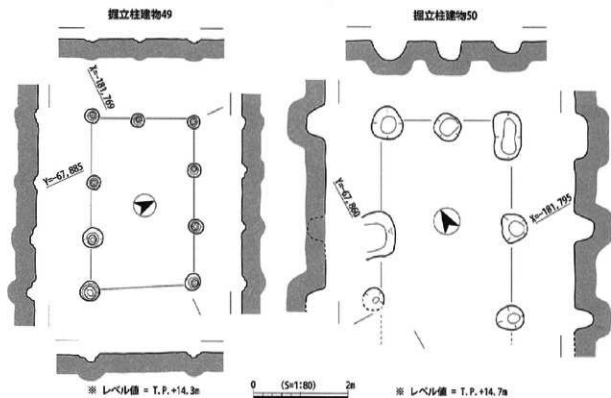


図64 掘立柱建物49、50平・断面図

ピットが密集していることから、掘立柱建物の復原は困難であると述べたが、密集地点から離れた位置で、3棟の掘立柱建物を復原することができた。いずれも、検出状況から、弥生時代に属するものと考えられ、あまり重複のない掘立柱建物である。

掘立柱建物49 (図64、図版15)

中央南区の中央西側にあたるP区の北西端部で検出された。弥生集落の竪穴住居が密集した部分の西端部に位置しており、北西側の竪穴住居20・21とは、ほぼ隣接する。南側には大溝3が隣接する。東側には、隣接して竪穴住居は存在していないものと考えられ、最も近接した竪穴住居22・23とは約7m離れている。周囲にはピット群や土坑がみられるが、比較的密集度は低いほうである。竪穴住居や掘立柱建物との重複関係はない。

現状で、2間(2.2m)×3間(3.8m)を確認しているが、南東部で柱穴が未検出の部分があることから、桁行が延びることも考えられる。平面形は、南側の桁行がやや長い台形状を呈する。主軸方向は、N-65°-Wである。柱間寸法は、南側の桁行で西から1.4m、1.2m、1.2mの平均1.3m、梁行で北から1.2m、1.0mの平均1.0mを測る。北側の桁行の平均は1.1mである。柱穴掘方は、ほぼ円形を呈しており、径25～40cm、深さ10～20cmである。柱穴の規模はほぼ同じであるが、南東部の柱穴がやや大きい。遺物は、弥生土器の小片が出土している。

掘立柱建物50 (図64)

中央南区の中央やや南にあたるQ区の中央部で検出された。弥生集落の竪穴住居が密集した部分の中央部より南側に位置している。隣接して竪穴住居は検出されておらず、北の竪穴住居27とは約5m、南東の竪穴住居28・29・30とは約7m離れている。南西から西にかけては調査区外のため、状況は不明である。周囲にはピット群や土坑がみられるが、Q区内では比較的密集度は低いほうである。かなり上

部が削平されているため、失われたピットが存在する可能性も考えられる。竪穴住居や掘立柱建物との重複関係はない。

現状で、2間以上(4.7m)×2間(2.6m)を確認しているが、南側が調査区外に広がる可能性があることから、桁行が延びることも考えられる。主軸方向は、N-29°-Eである。柱間寸法は、東側の桁行で北から2.1m、1.9mの平均2.0m、梁行で西から1.3m、1.3mの平均1.3mを測る。柱穴掘方は、円形や楕円形を呈しており、径50~70cm、深さ20~40cmである。柱穴の規模はほぼ同じであるが、北東端部の柱穴がやや大きい。西側の桁行の柱穴がそろっていない。遺物は、弥生土器の小片が出土している。

掘立柱建物51(図65、66、図版15)

中央南区の南部にあたる丁区の中央やや北寄りで検出された。弥生集落の竪穴住居が密集した部分から離れた南側に位置しており、西側の竪穴住居28・29・30と約15m離れている。また、南東側の竪穴住居31と約13m離れている。南西側は、ピットがほとんど検出されず、竪穴住居も見られない空間地が広がっている。周囲にはピット群や土坑がみられるが、比較的密集度は低いほうである。竪穴住居や掘立柱建物との重複関係はない。

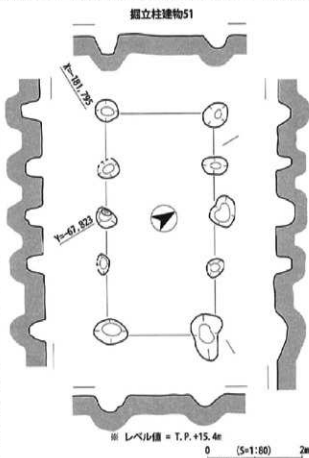


図65 掘立柱建物51平・断面図

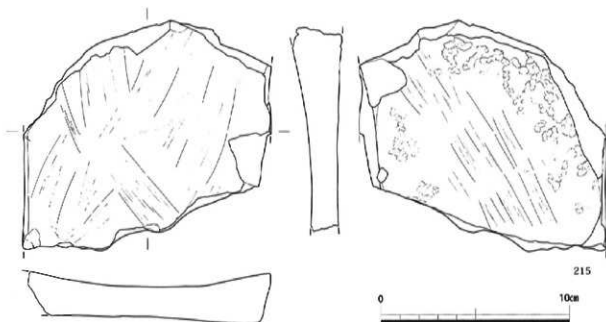


図66 ピット110390出土磨製石器

現状で、4間(4.7m)×1間以上(2.4m)を確認しているが、北東側が調査区外に広がる可能性があることから、梁行が延びることも考えられる。また、梁行の柱列の中で柱穴が未検出の場合も考えられ、柱間寸法から、すでに2間分を検出している可能性もある。主軸方向は、N-59°-Wである。柱間寸法は、北側の桁行で東から1.1m、1.0m、1.1m、1.5mの平均1.2mを測る。柱穴掘方は、円形や楕円形を呈しており、径30～70cm、深さ30～40cmである。埋土は灰黄褐色シルトである。柱穴の規模は、平面ではあまりそろっていないが、深さがほぼそろっている。

遺物は、弥生土器の小片などが見られるのみであるが、図化できたものが2点出土している。図67-214は、北側の柱列の中央に位置するピット110170から出土したもので、壺か甕の底部である。熱を受けて赤く変色している。図66-215は、南西端のピット110390から出土したもので、砂岩製の砥石である。表面が浅く窪んでおり、裏面は平坦な研ぎ面が形成されている。

多くのピットが検出されており、遺物も出土しているが、小片が多く、図化できたものはわずかである。内訳は、弥生土器、打製石器、磨製石器、サヌカイトである。特に遺物が集中するようなピットはみつっていない。遺物の多い部分は、ピットの密集する中央南区の中央やや東のL区と南部のT区に集中する。以下、図化できた遺物について述べる。

図67は、ピット出土の土器である。208は、L区のピット260416から出土したもので、受け口状口縁壺の口縁部である。口縁部が強く内湾しており、外面には上半に波状文、下半に斜め方向の刺突文が巡っている。209は、L区のピット260518から出土したもので、甕の口縁部である。口縁端部を肥厚させており、面を形成している。口縁部はやや外反する。外面には煤が付着している。210は、L区のピット260852から出土したもので、壺の底部である。煤か漆と考えられる黒色物質が付着している。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。211は、L区のピット260727から出土したもので、甕の底部である。底部付近の外面に指頭圧痕が残る。212は、T区のピット110174から出土したもので、短頸壺の上半部である。口縁端部を肥厚させており、面を形成している。口縁部はまっすぐ立ち上がり、外面には凹

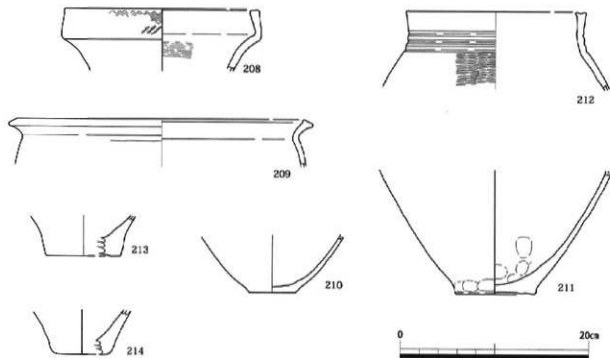


図67 ピット出土土器

線が巡っている。213は、T区のビット110385から出土したもので、壺か甕の底部である。

図68-216は、中央南区の中央にあたるN区のビット710103から出土したもので、緑色片岩製の太型始刃石斧である。刃部折損後に刃先寄りの破損面を一部研磨している。基部と折損部に叩打痕が認められることから、最終的には叩き石に転用されたものと考えられる。217は、中央南区の中央やや東にあたるM区のビット920441から出土したもので、斑レイ岩製の太型始刃石斧である。刃部に使用痕が残る。基部折損後に叩打痕が認められることから、最終的には叩き石に転用されたものと考えられる。図77-264は、T区のビット110207から出土したもので、平基式の石鎌である。

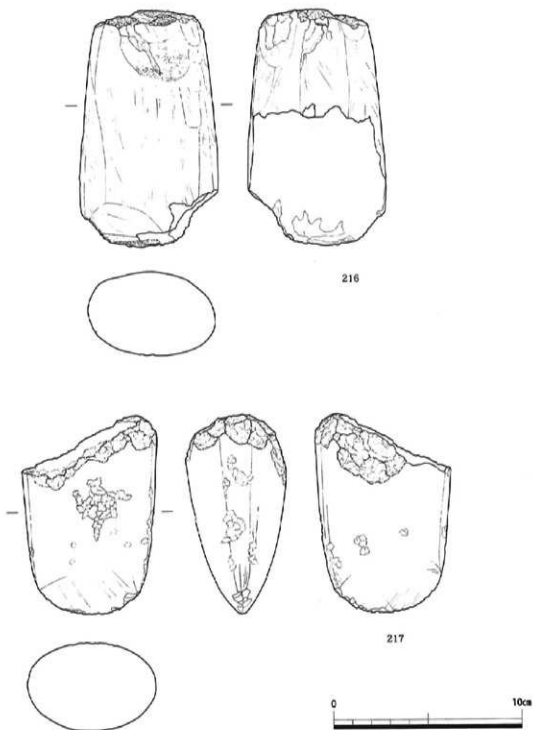


図68 ビット710103・920441出土磨製石器

(4) 土坑

男里弥生集落の中では、全体的な傾向として、竪穴住居やピットが多く検出されているのに対し、明確なかたちの土坑は比較的少ない。大型のものが少なく、用途不明なものが多いことなど、居住域における土坑のあり方を考える点では、意味のある例だと考えられる。ただ、検出例は比較的少ないとはいえ、ピットの集中と比例して、中央南区の中央やや東のL区と南部のT区などでは多く見られる。なお、土坑の性格を考える上では、土坑単独で見るとも関連する他の遺構とともに総合的に判断すべきであると考えられる。ここでは、個別の土坑の成果を中心に述べて、関連する遺構については簡単に触れるのみにとどめ、最終的に集落全体での遺構のまとめりとして、まとめることとする。

土坑810001 (図70、77、図版36)

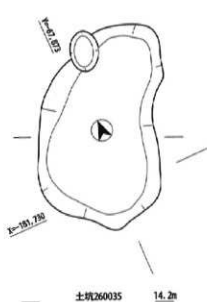
中央南区の北端部にあたるK区の北半部で検出された。竪穴住居1の北西側で約2m離れて隣接する。単独で検出されており、重複は認められない。竪穴住居1が、床面まで削平をうけているため、土坑810001も上部はかなり削平をうけているものといえる。平面形は、南北方向が長い楕円形を呈しており、規模は、検出面で長径約2.7m、短径約1.3m、深さ約0.4mを測る。周囲では、他に土坑はみつかっておらず、竪穴住居1に関連する施設と考えられる。埋土は、褐色粗砂混じりシルトである。

遺物は、埋土中から弥生土器が少量出土した。形を復元できるものではなく、図化できた土器片は1点のみである。図70-218は、把手付壺の上半部である。肩部に把手が挿入法により付けられている。口縁端部は断面T字状につまみあげており、外面に凹線が巡る。頸部にも凹線が巡る。体部内面には、指頭圧痕が残っている。表面に赤色物質が塗布されている。また、図77-266は、Ⅲ類の石錐である。両端の錐部に使用痕が認められる。

土坑540001 (図70、図版36)

中央南区の北半部やや東のI区北半部で検出された。大溝1の肩部に位置しており、遺構検出時に土坑状の窪みが見つかったことから、土坑として調査したものである。ただし、上部は全体に削平されており、遺物包含層もほとんど失われている状況で、さらに攪乱をうけていることから、全体形ははっきりしない。不整楕円形を呈しているとも考えられるが、単独の土坑というよりも、大溝1に付属する土坑状の窪みである可能性もある。検出面からの深さは、約0.5mを測る。周囲では、ピットや土坑は検出されていない。

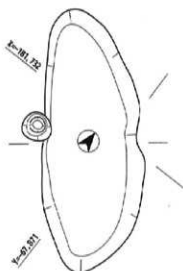
遺物は、埋土中から弥生土器がまとめて出土したが、完形に復元できるものはなかった。図70-219は、壺の口縁端部である。口縁端部をほぼ直角に下方方向に広げており、外面に凹線が巡る。さらにその上に縦方向のへら描き沈線のまとめりが付けられている。口縁部内面には、波状文が施されている。220は、壺の頸部から口縁部である。口縁端部を肥厚させており、T字状に広がっている。口縁端部外面には凹線が巡る。さらに、頸部上半には波状文、下半には直線文が施されている。口縁部内面には、2点一組の紐孔があけられている。221は、細頸壺の口縁部である。上半部の外面に凹線が密に巡っており、口縁端部には円形浮文が3点一組で付けられている。また、中ほどには波状文が1列、下半部には糜状文が2列巡っている。口縁端部はやや内湾気味である。222は、壺の底部である。外面に縦方向のミガキ調整が見られる。223は、甕の上半部である。口縁部は、くの字状に反外しており、口縁端部の内側をややつまみあげている。外面に煤が付着している。224は、甕の底部と考えられるが、真鍮壺形土器の可能性もある。外面にタタキ目が残っている。



土坑260035 14.2m



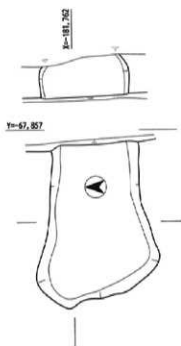
1. 10YR 4/5 褐色 粘質土



土坑260030 14.2m



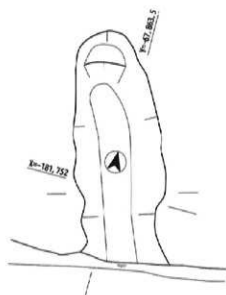
1. 7.5YR 4/5 褐色 粘質土



土坑260005 14.6m



1. 10YR 3/3 暗褐色 粘土 中砂多量に含む
2. 7.5YR 5/2 灰褐色 粘土 中砂多量に含む
3. 10YR 4/6 褐色 粘土 小礫含む



土坑260016 14.4m



1. 10YR 3/3 暗褐色 粘質シルト 炭化物含む

0 (S=1:40) 1m

図69 土坑平・断面図(1)

土坑260005 (図69～71、図版15、36、75)

中央南区の中央やや東のL区南端部で検出された。一部は東側の調査区外に広がる。単独で検出されており、重複は認められない。北西側に約1.2m離れて土坑260015が隣接する。この調査区の東側には市道が隣接しており、この部分で1983年に大阪府教育委員会により、下水管敷設に伴う発掘調査がおこなわれている。狭い範囲の調査であったが、弥生時代中期の木棺土坑墓がまとまって6基検出されている。このことから、調査区内での土坑墓の検出が期待されたが、結果的には土坑墓が検出されることがなく、この部分における土坑墓の広がりを確認することはできなかった。調査区外の東側に広がる可能性が考えられる。その中で、土坑墓に類似した形状で検出された土坑である。

平面形は、東西方向が長い隅丸方形を呈しており、規模は、検出面で長辺2.5m以上、短辺約1.0m、深さ約25cmを測る。埋土は2層に分かれており、上層は暗褐色粘質シルト、下層は褐色粘質シルトである。上層は炭化物を少量含む。土層断面の観察からは、土坑墓と確定できる状況ではなかった。

遺物は東端部で弥生土器や石器がまとまって出土している。図70-225は、甕の上半部である。口縁部は、緩やかにくの字状に外反しており、口縁端部の内側をややつまみあげている。226は、真鍮壺形土器の下半部である。図71-235は、砂岩製の砥石である。扁平であり、研ぎ面は1面である。236は、砂岩製の磨石である。卵形の礫を用いており、1面が滑らかである。端部にわずかに叩打痕が見られることから、叩き石として使われていた可能性も考えられる。237は、緑色片岩製の紡錘車である。両面と側面に研磨痕が少し残っている。孔が中心より少しずれている。図77-265は、Ⅲ類の石錐である。錐部に使用痕跡が認められる。

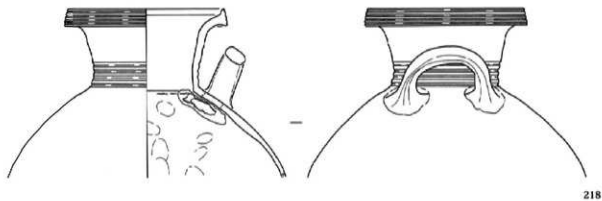
土坑260030 (図69、70)

中央南区の中央やや東のL区中央部で検出された。北西側に約1.0m離れて土坑260035が隣接する。周囲にはピット群や土坑がみられるが、単独で検出されており、重複は認められない。上部は、削平のため、遺物包含層を含めてかなり失われている。平面形は、南北方向が長い楕円形を呈しており、規模は、検出面で長径約2.8m、短径約1.2m、深さ約10cmを測る。底面付近のみの検出であるが、埋土は褐色粘質シルトで、小礫を含む。調査時には、土坑墓と考えられていたが、土層断面の観察などでも土坑墓と確定できる状況ではない。

遺物は、埋土中から弥生土器が出土しているが、完形に復元できるものはなかった。図70-227は、壺の口縁部である。口縁部に一部切り欠きが認められる。228は、甕蓋のつまみ部である。小破片のため、はっきりしないが、甕底部の可能性もある。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。229は、甕の口縁部である。口縁部は、大きくくの字状に外反している。230は壺の底部で、底はややへこんでいる。231は壺の底部で、底は平坦である。外面に縦方向のハケ調整が見られ、煤が付着している。232は、甕の上半部である。口縁部は緩やかに外反しており、口縁端部を突帯状に成形して、その上に刻目を施している。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。233は甕の底部で、底はややへこんでいる。外面に指頭圧痕が見られる。234は壺の底部で、底は平坦である。外面に指頭圧痕が見られる。

土坑260035 (図69、71)

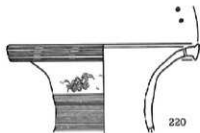
中央南区の中央やや東のL区中央部で検出された。北側に約1.5m離れて竪穴住居2が隣接する。北端部で、ピット260467と重複しており、ピットに切られた状況である。上部は、削平のため、遺物包含層を含めてかなり失われている。平面形は、南北方向が長い隅丸方形を呈しており、規模は、検出面で長辺約2.0m、短辺約1.2m、深さ約10cmを測る。底面付近のみの検出であるが、埋土は褐色粘質シル



218



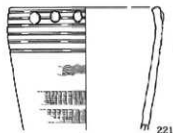
219



220



223



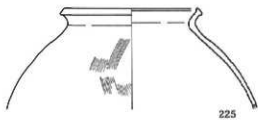
221



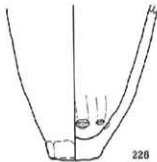
222



224



225



226



227



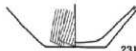
228



229



230



231



232



233



234



圖70 土坑出土土器(1)

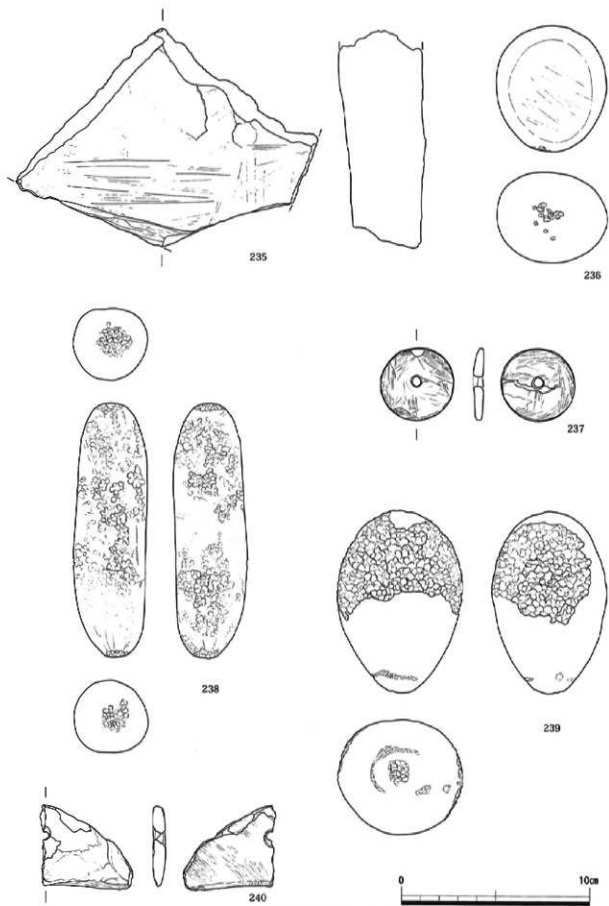


圖71 土坑出土磨製石器(1)

トで、小礫を含む。竪穴住居2と隣接しているが、直接の関連性は不明である。

遺物は、弥生土器が少量出土しているが、図化できるものはなかった。他に、図71-240の緑色片岩製の石庖丁が出土している。半分以上が欠損しており、摩滅が著しいが、紐孔が1ヶ所認められる。片刃であり、表面に光沢がある。

土坑260015 (図71、72)

中央南区の中央やや東のL区南端部で検出された。一部は西側の調査区外に広がる。単独で検出されており、重複は認められない。南東側に約1.2m離れて土坑260005が隣接する。平面形は、東西方向が長い不整楕円形を呈しており、規模は、検出面で長径0.7m以上、短径約0.5m、深さ約20cmを測る。埋土はオリーブ褐色粘質シルトで、小礫を含む。

遺物は、弥生土器が少量出土しているが、図化できるものはなかった。他に、図71-238の砂岩製の叩き石が出土している。棒状の礫を用いており、両端部と側面に叩打痕が認められる。

土坑260016 (図69、73、図版15)

中央南区の中央やや東のL区南端部で検出された。一部は南側の調査区外に広がる。単独で検出されており、重複は認められない。西側に約2.5m離れて竪穴住居5・6・7が隣接する。平面形は、南北方向が長い不整楕円形を呈しており、断面はU字状である。規模は、検出面で長径2.5m以上、短径約1.0m、深さ約40cmを測る。埋土は暗褐色粘質シルトで、炭化物を含む。南側が調査区外に広がるため、全容は不明であるが、溝状を呈する可能性がある。

遺物は、埋土中から弥生土器が出土しているが、完形に復元できるものはなかった。図73-241は、受け口状口縁壺の口縁部である。口縁部外面の上端と下端には凹線、中央部には波状文が数条巡る。内面には横方向のハケ調整が見られる。口縁部はやや内湾する。242は、受け口状口縁壺の口縁部である。口縁部外面には凹線が密に巡る。一部熱を受けて赤く変色している。243は、高杯脚台部である。端部を上方に広げており、面を形成している。244は壺の底部で、底は平坦である。245は、壺の底部である。外面に縦方向のミガキ調整が見られる。底部に打ち欠きによる二次穿孔が認められる。246は壺の底部で、底は平坦である。外面に指頭圧痕が見られる。一部熱を受けて赤く変色している。

土坑260277 (図72、73、図版36)

中央南区の中央やや東のL区東端部で検出された。一部は東側の調査区外に広がる。単独で検出されており、重複は認められない。北側に約2.5m離れて土坑260500が隣接する。上部は、削平のため、遺物包含層を含めてかなり失われている。平面形は、南北方向が長い不整楕円形を呈している。規模は、検出面で長径0.8m以上、短径約0.4m、深さ約10cmを測る。埋土は、暗灰黄色粘質シルトである。南側が調査区外に広がるため、全容は不明であるが、溝状を呈する可能性がある。

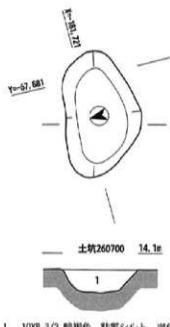
遺物は、弥生土器が少量出土しているが、形を復元できるものはなかった。図73-247は、壺の口縁部である。口縁部をほぼ直角に下方向に広げており、外面に凹線が巡る。さらにその上に縦方向のヘラ描き沈線のまとまりが付付けられている。口縁部内面には、ヘラ状工具による斜め方向の刺突文が施されている。表面や割れ口に、煤か漆と考えられる黒色物質が付着している。248は、壺の底部である。外面に指頭圧痕が見られる。表面や割れ口に煤と考えられる黒色物質が付着している。

土坑260700 (図72、73)

中央南区の中央やや東のL区北半部で検出された。北側に土坑260727や溝260694が隣接する。周囲にはピット群や土坑が多くみられる。特に、土坑260700を含むほぼ同規模の土坑が、南北方向に4



1. 7.5YR 3/4 暗褐色 粘質土



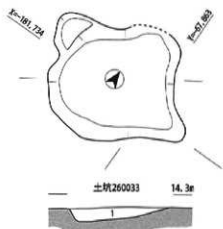
1. 10YR 3/3 暗褐色 粘質シルト 炭化物含む



1. 10YR 4/3 に近い黄褐色 粘質シルト



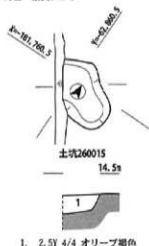
1. 7.5Y 4/6 褐色 粘質シルト



1. 2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色 粘質シルト 炭化物少量含む



1. 2.5Y 5/2 暗灰黄色 粘質シルト



1. 2.5Y 4/4 オリーブ褐色 粘質シルト 備含む

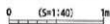


図72 土坑平・断面図(2)

基並んだ状況で検出されている。なんらかの関連をもつ土坑群と考えられるが、性格は不明である。後述するが、隣接する溝260694からは多量のサヌカイトが出土している。さらに南東側には、竪穴住居2が位置しており、石器製作工房の可能性を指摘している。このため、これらの遺構は関連性の高いまとまりと考えることができる。ただし、サヌカイトの出土量が特に多いわけではない。

上部は、削平のため、遺物包含層を含めてかなり失われている。平面形は、東西方向が長い不整形楕円形を呈している。規模は、検出面で長径約1.4m、短径約0.8m、深さ約25cmを測る。埋土は、暗褐色粘質シルトである。

遺物は、弥生土器が少量出土しているが、形を復元できるものはなかった。図73-249は、鉢の上半部である。口縁端部はやや下方向に広げており、面をなしている。この部分を巡る波状文が、部分的に見られる。さらに体部上半の外面には、上から順に波状文、直線文、扇形文が施されている。表面に煤が付着している。250は、真鍮壺形土器の底部である。内外面ともに指頭圧痕が見られる。

土坑260500 (図72、73)

中央南区の中央やや東のL区東端部で検出された。一部は東側の調査区外に広がる。単独で検出されており、重複は認められない。南側に約2.5m離れて土坑260277が隣接する。上部は、削平のため、遺物包含層を含めてかなり失われている。平面形は、南側が調査区外に広がるため、はっきりしないが、南北方向が長い楕円形を呈している。規模は、検出面で長径約1.8m、短径0.8m以上、深さ約25cmを測る。埋土は、暗褐色粘質シルトである。

遺物は、弥生土器が少量出土しているが、図化できるものは1点のみであった。図73-255は、甕の口縁部である。くの字状に強く外反しており、口縁端部の内側がややつまみあげられている。

土坑260203 (図72、73、77)

中央南区の中央やや東のL区西端部で検出された。単独で検出されており、重複は認められない。南東側に約5m離れて竪穴住居4が隣接する。周囲にはピット群や土坑が多くみられる。上部は、削平のため、遺物包含層を含めてかなり失われている。平面形は、楕円形がやや屈曲したような形状を呈している。規模は、検出面で長辺約0.7m、短辺約0.4m、深さ約20cmを測る。埋土は、にぶい黄褐色粘質シルトである。

比較的規模の小さい土坑であるが、弥生土器の底部がまとまって出土している。上部が削平をうけているため、本来は完形の土器を埋納していた可能性もある。図73-251は、甕の底部で、底はややへこんでいる。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。252は壺の底部で、底は平坦である。253は、甕の底部である。焼成後、底に穿孔が施されている。外面の底部付近には、指頭圧痕が明瞭に残っている。254は、壺の底部で、底はややへこんでいる。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。また、図77-268は、有茎式の石鏝である。基部をやや欠損している。

土坑260349 (図72、77)

中央南区の中央やや東のL区南端部で検出された。一部は東側の調査区外に広がる。周囲にはピット群や土坑が多くみられる。上部は、削平のため、遺物包含層を含めて失われている。平面形は、東側が調査区外に広がるため、はっきりしないが、南北方向が長い楕円形を呈している。規模は、検出面で長径約1.2m、短径0.5m以上、深さ約15cmを測る。埋土は、褐色粘質シルトである。

遺物は、弥生土器が少量出土しているが、図化できるものはなかった。他に、図77-269の石鏝が出土している。有茎式で、先端部を一部欠損している。

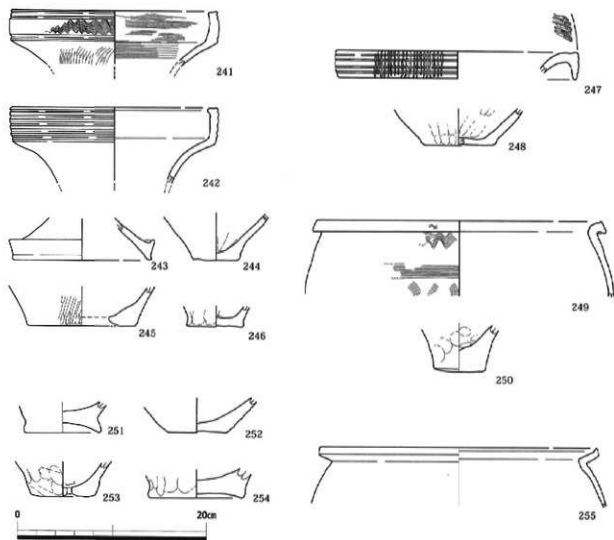


図73 土坑出土土器(2)

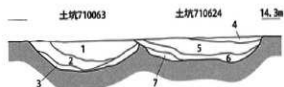
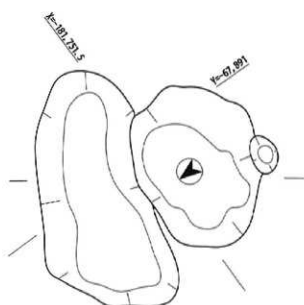
土坑260033・260037 (図72、77、図版73)

中央南区の中央やや東のL区東端部で検出された。土坑260033の南側に土坑260037が隣接する。北側に約3.5m離れて竪穴住居3が、東側に約3.0m離れて土坑260500が近接する。周囲にはビット群や土坑が多くみられる。上部は、削平のため、遺物包含層を含めて失われている。

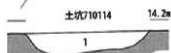
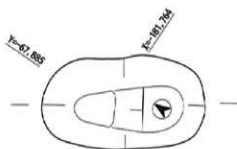
土坑260033は、平面不整形方形を呈しており、規模は、検出面で一辺約1.0m、深さ約15cmを測る。埋土は、暗オリーブ褐色粘質シルトである。

土坑260037は、南北方向が長い平面楕円形を呈しており、規模は、検出面で長径約0.9m、短径0.4m、深さ約10cmを測る。埋土は、黒褐色粘質シルトである。

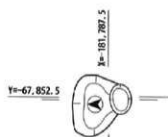
いずれの土坑からも遺物は、弥生土器の小片が見られるほか、サヌカイトの小片がまとまって出土している。ただし、製品はほとんどなく、土坑260033で1点検出したのみである。図72-267は、有茎式の石鏃である。土坑260037では、さらに多量のサヌカイトチップが検出されている(図版73-1445)。すべて小片であり、大きな石核のようなものは見られない。金山産のものを少量含む。石器製作後の廃材をまとめて廃棄したような状況である。これらの土坑の周辺でサヌカイトの加工がおこなわれていたことが推測され、はっきりしないが、石器製作に関わる遺構と考えることができる。竪穴住居3と4のちょうど中間点に位置していることが示唆的である。



1. 10YR 3/4 暗褐色 粘質シルト 炭化物含む
2. 10YR 4/4 褐色 粘質シルト
3. 10YR 4/3 にぶい黄褐色 粘質シルト
4. 10YR 4/3 にぶい黄褐色 粘質シルト
5. 10YR 3/3 暗褐色 粘質シルト
6. 10YR 4/4 栗色 粘質シルト
7. 10YR 4/3 にぶい黄褐色 粘質シルト



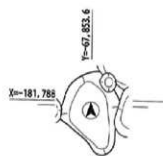
1. 10YR 4/4 褐色 粘質シルト 炭化物含む



1. 10YR 4/3 にぶい黄褐色 粘質シルト 腐含む



1. 10YR 5/4 にぶい黄褐色 粘質シルト 小礫含む
2. 10YR 5/4 にぶい黄褐色 粘質シルト
3. 10YR 5/6 黄褐色 粘質シルト



1. 10YR 4/3 にぶい黄褐色 粘質シルト 礫・炭化物含む

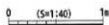


図74 土坑平・断面図(3)

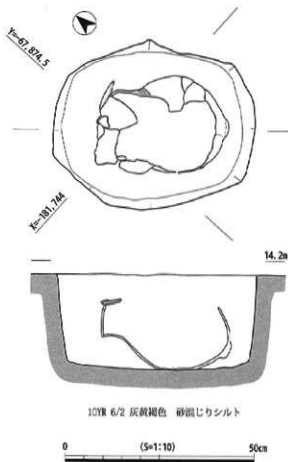


図75 土坑920439平・断面図

土坑830027 (図76、図版37)

中央南区の北端部にあたるK区の南半部で検出された。弥生集落の北端部にあたり、西側に約6m離れて竪穴住居8・9・10・11が近接する。周囲にはピット群や土坑が多くみられる。上部は、削平のため、遺物包含層を含めて失われている。また、北側には大溝1との間に近世以降の水路が横切っており、大きく攪乱をうけている。隣接したすぐ北側には、水路に伴う近世の水利施設がつくられている。平面形はほぼ円形を呈しており、規模は、検出面で径約50cm、深さ約20cmを測る。

土器埋納土坑であり、図76-263の甕が掘えられた状態で出土している。上面を削平されていることから、口縁部は失われているが、完形品の甕を埋めていたものと考えられる。甕の内部からは、内容物を示すようなものは検出されていない。土器の表面は残存状況が悪く、調整は不明である。どのような背景で、この土器埋納土坑がつくられたものかは不明である。

土坑830031 (図76、図版37)

中央南区の北端部にあたるK区の南半部東端で検出された。大部分は東側の調査区外に広がるものと考えられる。西側に約2m離れて土坑830027が隣接する。周囲にはピット群や土坑が多くみられる。調査区端部の土層観察用壁部分で、一部が検出されたのみであることから、平面形を含めて全容は不明である。南北方向約1.3m、東西方向約0.3mの範囲で、褐色砂混じりシルトの広がりが認められ、検出面で深さは約5cmである。

弥生土器が比較的多く出土しているが、形を復元できるものはほとんどなかった。出土状況から見ると、調査区外の東側に広がる部分に、多くの土器が含まれている可能性がある。その中で、図化できたものとして、図76-260の高杯脚部がある。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。

土坑920439 (図75、76、図版19、37)

中央南区のほぼ中央部にあたるM区の北端部で検出された。弥生集落の竪穴住居が密集した部分のやや東側に位置しており、南側に約1.5m離れて竪穴住居5・6・7が隣接する。周囲にはピット群や土坑が多くみられる。上部は、削平のため、遺物包含層を含めて失われている。平面形は、東西方向が長い不整形円形を呈している。規模は、検出面で長径約0.5m、短径約0.4m、深さ約25cmを測る。埋土は、灰黄褐色砂混じりシルトである。

土器棺を埋葬した土坑であり、中央部で壺が口を西側に向けるかたちで横になった状態で検出された。土坑の上部が削平されていることから、壺の肩部から体部が一部失われている。また、壺の口にあたる部分には、器種ははっきりしないが、別個体の土器の体部破片が置かれており、蓋としてつかわれていたものと考えられる。壺の内部からは、内容物を示すようなものは検出されていない。小児棺と考えられ、

南側の竪穴住居5・6・7との関連が想定される。なお、竪穴住居5に伴う土器埋納ピットが近接して検出されており、葬祭などに関連する遺構の可能性が考えられる。このピットとの直接的な関連は不明であるが、この部分でなんらかの葬送儀礼がおこなわれた可能性は高い。弥生集落内で、同様の土器棺はあまりみつかっておらず、特殊なものといえることができる。集落内の墓制を考える上で、貴重な例である。

図76-256は、土器棺として使われている短頸壺である。口縁部がほぼまっすぐに立ち上がっており、口縁端部のすぐ下と頸部外面に凹線が巡っている。口縁部は面をなしている。口縁部に一部切り欠きがある。肩部から体部が一部失われているが、ほぼ完形に復元できたものである。全体形で不明な部分もあるが、肩部に把手が付いていた可能性もある。外面の体部下半には縦方向のミガキ調整が、底部付

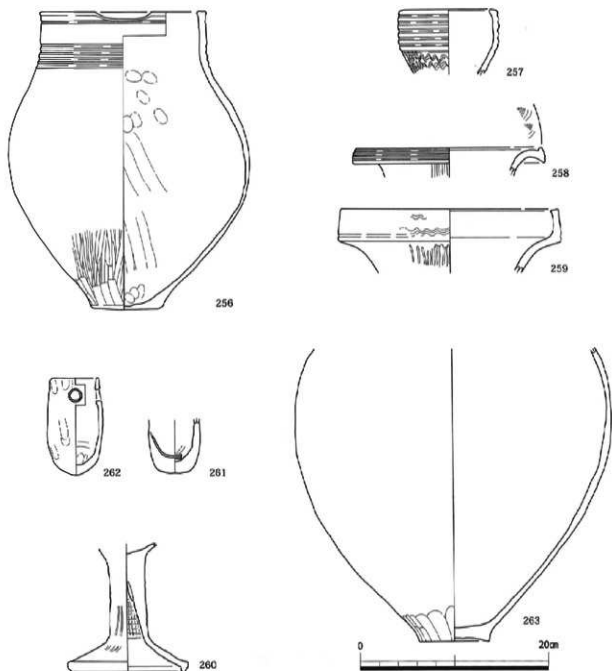


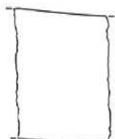
図76 土坑出土土器(3)

近には縦方向のヘラケズリ調整が施されている。内面には指頭圧痕が残る。底は平坦である。

土坑710063 (図74、76)

中央南区のほぼ中央部にあたるN区の北西端部で検出された。弥生集落の竪穴住居が密集した部分の西寄りに位置しており、土坑710624と隣接する。重複関係があり、南側の一部を土坑710624に切られている。竪穴住居16と一部重複関係があり、北東側の壁付近を切っている。周囲にはピット群や土坑が多くみられる。上部は、削平のため、遺物包含層を含めて失われている。平面形は、東西方向が長い不整楕円形を呈している。規模は、検出面で長径2.5m、短径約1.0m、深さ約30cmを測る。埋土は、大きく2層に分かれており、上層は暗褐色粘質シルトで、下層は褐色粘質シルトである。上層には、炭化物が含まれている。下層の底部付近には、にぶい黄褐色粘質シルトが混じる。

遺物は、弥生土器が少量出土しているが、図化できるものは2点のみであった。図76-258は、壺の口縁部である。口縁端部は断面T字状につまみあげており、外面に凹線が巡る。口縁部は緩やかに外反しており、内面には扇状文が施されている。259は、受け口状口縁壺の口縁部である。口縁部が内湾しており、外面には上半部に波状文、下半部に凹線と波状文が巡っている。頸部には、縦方向のヘラミガキ調整が施されている。



272

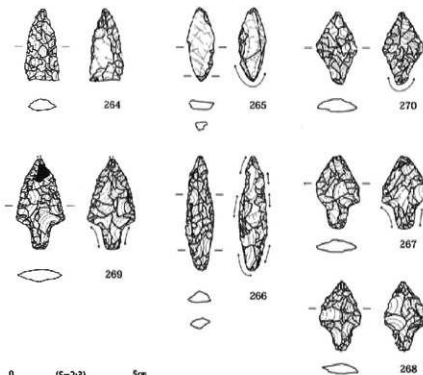


図77 ピット・土坑出土打製石器



図78 土坑出土磨製石器(2)

土坑710624 (図74、76、78)

中央南区のほぼ中央部にあたるN区の北西端部で検出された。弥生集落の竪穴住居が密集した部分の西寄りに位置している。土坑710063と隣接しており、重複関係がある。北側で、土坑710624の一部を切っている。竪穴住居16と重複関係があり、北東側の壁付近を切っている。竪穴住居16の出入口の可能性もあるが、壁溝を切っていることから、竪穴住居には伴わないものと考えられる。竪穴住居16廃絶後につくられたものといえる。周囲にはピット群や土坑が多くみられる。上部は、削平のため、遺物包含層を含めて失われている。平面形は、東西方向がやや長い不整形円形を呈している。規模は、検出面で長径約1.7m、短径約1.2m、深さ約25cmを測る。埋土は、土坑710063と類似した堆積状況を示しており、2層に分かれる。上層は暗褐色粘質シルトで、下層は褐色粘質シルトである。下層の底部付近には、ふい黄褐色粘質シルトが混じる。

弥生土器が上層から比較的多く出土しているが、図化できるものは1点のみであった。図76-281は、飯蛸壺の下半部である。破損部を一部再加工している。また、図78-272の砂岩製の砥石も出土している。表裏面は平坦であるが、側面は割れたままの状況である。表面には線条痕がみられるほか、わずかに叩打痕が認められる。裏面には、叩打痕が見られ、わずかに線条痕が認められる。台石として使われた可能性がある。火を受けて割れたものの可能性がある。

土坑710114 (図74、76、77、図版15、37)

中央南区のほぼ中央部にあたるN区の西端部で検出された。弥生集落の竪穴住居が密集した部分の西寄りに位置している。西側に約4m離れて竪穴住居20・21が隣接する。竪穴住居のない空地の西側に位置しており、周囲でのピットや土坑の検出は少ない。上部は、削平のため、遺物包含層を含めて失われている。平面形は、東西方向が長い不整形円形を呈している。規模は、検出面で長径約1.4m、短径約0.8m、深さ約25cmを測る。埋土は、暗灰黄色粘質シルトが主体で、褐色粘質シルトが混じるほか、炭化物を含む。

遺物は、弥生土器が少量出土しているが、図化できるものは1点のみであった。図76-262は、完形の飯蛸壺である。また、図77-270は、凸基Ⅱ式の石罫である。基部のエッジがわずかに摩滅している。

土坑720036 (図74、76)

中央南区の南部にあたるR区の東端部で検出された。弥生集落の竪穴住居が密集した部分の中央部より南側に位置している。北側にほぼ接するかたちで竪穴住居28・29・30が隣接する。ただし、竪穴住居28・29・30との重複関係はなく、関連性の有無は判断できない。周囲にはピット群や土坑が多くみられ、同規模の土坑が重複する状況でまとまって検出されている。上部は、削平のため、遺物包含層を含めて失われている。北東側はやや調査区外へ広がるほか、南西端部は埋設管により未調査であるため、全容ははっきりしない。平面形は、南北方向が長い隅丸方形を呈していると考えられる。規模は、推定で長辺約2.2m、短辺約2.0m、検出面で深さ約30cmを測る。埋土は、大きく2層に分かれており、上層にはふい黄褐色粘質シルトで、下層は黄褐色粘質シルトである。下層には、径3cm大の礫が多く含まれている。平面形状により、これらの土坑群は、土坑墓の可能性も考えられるが、遺物や堆積状況からは確定できなかった。

遺物は、弥生土器が少量出土しているが、図化できるものは1点のみであった。図76-257は、細頸壺の口縁部である。外面に凹線が密に巡っており、下半部には波状文が見られる。口縁端部を肥厚させており、やや内湾している。

土坑720202 (図71、74、図版76)

中央南区の南部にあたるR区の北端部で検出された。弥生集落の竪穴住居が密集した部分の中央部より南側に位置している。北側に約7m離れて竪穴住居26が近接する。締まった礫層の地山であるにもかかわらず、周囲にはピットや土坑が密集して多くみられる。ピットや同規模の土坑が重複を繰り返しており、前後関係の判断がむずかしい状況である。上部は、削平のため、遺物包含層を含めて失われている。平面形は、南北方向がやや長い不整形円形を呈している。規模は、検出面で長径約0.8m、短径約0.5m、深さ約20cmを測る。埋土は、灰黄褐色粘質シルトが主体で、径5cm大の礫を多く含む。また、炭化物も混じっている。やや規模が大きいが、掘立柱建物の柱穴の可能性がある。

遺物は、弥生土器が少量出土しているが、図化できるものはなかった。他に、図71-239の砂岩製の叩き石が出土している。卵形の礫を用いており、上部の片面に叩打痕が集中している。これに対し、下端部の叩打痕はわずかに認められるのみである。

土坑720211 (図78)

中央南区の南部にあたるR区の北端部で検出された。土坑720202が含まれるピットと土坑の集中部に位置している。東側に約0.8m離れているのみである。南側は、ピット720210が切ったかたちで重複がみられる。平面形は、土坑720202と類似しており、東西方向がやや長い不整形円形を呈している。規模は、検出面で長径約0.6m、短径約0.4m、深さ約20cmを測る。埋土は土坑720202と同じで、灰黄褐色粘質シルトが主体である。径10cm以下の礫を含む。前述したように、土坑720202を含むこの周辺のピットや平面円形や楕円形の土坑は、掘立柱建物の柱穴の可能性がある。

遺物は、弥生土器が少量出土しているが、図化できるものはなかった。他に、図78-271の砂岩製の砥石が出土している。やや欠損部があるが、直方体に丁寧に成形されているものと考えられる。

土坑110089 (図80、81、図版37)

中央南区の中央東側にあたる丁区の北東端部で検出された。弥生集落の竪穴住居が密集した部分の東側に位置している。北西側には約7m離れて竪穴住居27が隣接するほか、北側には土坑110086がほぼ接した状態で隣接している。東側は調査区外に広がっており、北側は近世以降の井戸に伴う水利施設がつくられているため、失われている。このため、全容ははっきりしない。検出されている部分においても、平面形は不整形であり、明確な形状をした土坑というより、溝状の落ち込みともいべき状況である。上部は、遺物包含層を含めて削平を受けており、残存状況は良好ではない。規模は、検出面で東西方向の最大長約13m、南北方向の最大長約5m、深さ5~20cmを測る。埋土は、灰褐色シルトである。性格は不明で、人為的に掘削されたものかどうかははっきりしないが、弥生土器がまとめて出土していることから、ここでは土坑として扱うこととする。

図80-273は、大型無頸壺の口縁部である。外面中央部に凹線が巡っており、口縁端部には円形浮文が一列に付けられている。また、外面には凹線より上で斜め方向の刺突文が鏡形状に巡っているほか、下には横方向の簾状文が巡る。口縁端部を肥厚させており、内湾している。274は、受け口状口縁の壺の口縁部から頸部である。口縁部外面には上端と下端に凹線が巡る。受け口部が甘く、屈曲が弱い。頸部と体部の境界部分には、斜め方向の刺突文が施されている。275は、鉢の体部下半部である。体部中ほどには凹線が巡っている。底は平坦である。276は、高杯脚台部である。端部を上方に広げており、面を形成している。欠損後、蓋に転用されたものと考えられ、内面に煤が付着している。277は、直口壺の口縁部である。口縁は、斜め上方に向かって広がり、外面には、口縁端部からやや下がった位置に

突帯が1条巡っている。口縁端部を肥厚させており、やや内湾している。口縁部の一部を切り欠きしている。278は、細頸甕の頸部下半である。外面には、上から凹線、波状文、直線文が巡っている。

このほかに、図81-294の緑色片岩製の石庖丁が出土している。片刃で内湾刃である。紐擦れの痕跡がみられ、刃面に使用痕が残る。

土坑110086 (図80)

中央南区の中央東側にあたるT区の北東端部で検出された。弥生集落の竪穴住居が密集した部分の東側に位置している。南側には土坑110089がほぼ接した状態で隣接している。北西側には、隣接して近世以降の井戸に伴う水利施設がつくられており、やや切られている。上部は、遺物包含層を含めて削平を受けている。平面形は、南北方向がやや長い不整楕円形を呈している。規模は、検出面で長径約1.8m、短径約0.9m、深さ約20cmを測る。当初、近世の水利施設の一部として認識していたが、掘削を進めていくうちに独立した遺構となったため、土坑としたものである。

遺物は、弥生土器が少量出土しているが、図化できるものは2点のみであった。図80-279は、壺の底部である。底はややへこんでいる。280は、真蛸壺形土器の下半部である。内外面ともに指頭圧痕が残っている。

土坑110171 (図80、81、図版37)

中央南区の中央東側にあたるT区の東端部で検出された。弥生集落の竪穴住居が密集した部分の東側に位置している。南西側には、約2.5m離れて土坑110387・110388が隣接する。また、掘立柱建物51と重複しており、土坑110171のほうが新しい。上部は、遺物包含層を含めて削平を受けている。平面形は不整円形を呈しており、検出面で径約2.0m、深さ約30cmを測る。埋土は、灰黄褐色シルトが主体である。

遺物は、弥生土器がややまとまって出土している。図80-281・282は、甕の上半部である。いずれも、口縁部は、くの字状に強く外反しており、外面に煤が付着している。283・284は、底部であるが、甕か壺か判断できないものである。いずれも、底は平坦である。285は、高杯脚台部である。脚の裾部を一部切り欠いているほか、上端破損部を一部擦って再加工している。裾部に煤が付着しているため、蓋として再利用されたことが考えられる。このほかに、図化できる磨製石器が2点出土している。図81-295は、緑色片岩製の石庖丁である。片刃で、紐孔を穿孔し直している。刃面側に光沢がみられ、こちら側を上にして使用したものと考えられる。296は、砂岩製の砥石である。板状であり、表裏面ともに線条痕が認められ、中央部が窪んでいる。裏面に煤が付着している。

土坑110386 (図80)

中央南区の中央東側にあたるT区の北端部で検出された。弥生集落の竪穴住居が密集した部分の東側に位置している。北側には、約1m離れて竪穴住居27が隣接する。上部は、遺物包含層を含めて削平を受けている。平面形は、南北方向がやや長い不整楕円形を呈している。規模は、検出面で長径約1.0m、短径約0.6m、深さ約30cmを測る。埋土は、灰黄褐色シルトが主体である。竪穴住居27となんらかの関連性がうかがわれるが、はっきりしない。

遺物は、弥生土器が少量出土しているが、図化できるものは2点のみであった。図80-286・287は、底部であるが、甕か壺か判断できないものである。いずれも、底は平坦である。287は、火を受けて外面が赤く変色している。

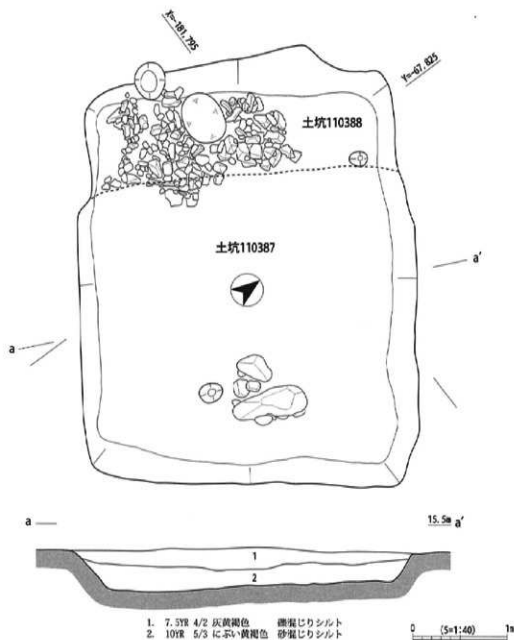


図79 土坑110387・110388平・断面図

土坑110387・110388 (図79、80、図版15、37)

中央南区の中央東側にあたるT区の北半部で検出された。弥生集落の竪穴住居が密集した部分の東側に位置している。北東側には、約2.5m離れて土坑110387・110388が隣接する。また、東側には約12m離れて、竪穴住居28・29・30が近接する。ただし、東側や南側は、遺構があまり検出されない空地である。上部は、遺物包含層を含めて削平を受けている。同規模と考えられる方形の土坑が切りあった状況でみつかり、古いほうを土坑110388、新しい方を土坑110387とした。いずれも土器や礫を廃棄した土坑と考えられる。

土坑110387は、平面方形を呈しており、規模は、検出面で一辺約3.6m、深さ約40cmを測る。埋土は、大きく2層に分かれており、上層は灰褐色礫混じりシルト、下層はにぶい黄褐色砂質シルトが主体である。上層には、径2～5cm程度の礫を多く含む。土器は上層から出土したものが多。

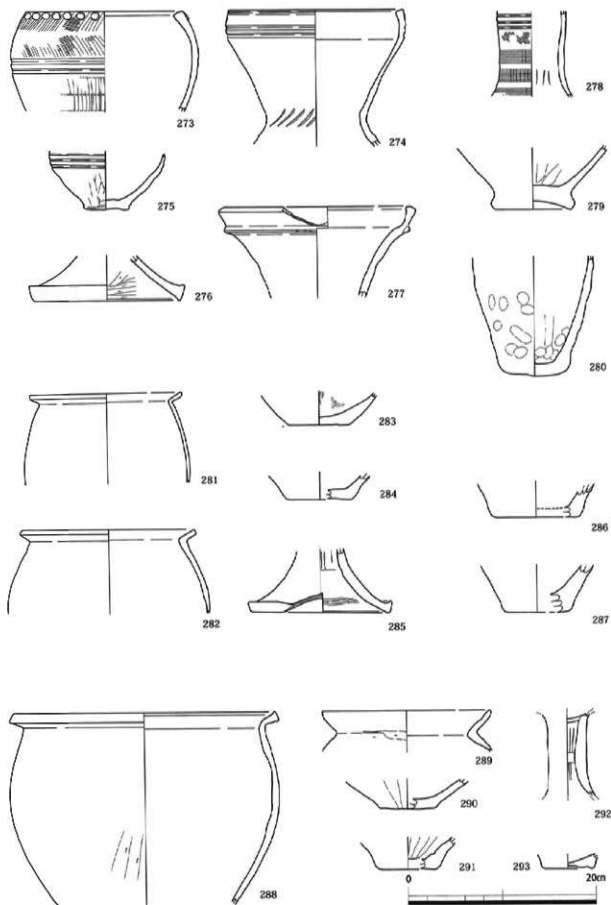


图80 土坑出土土器(4)

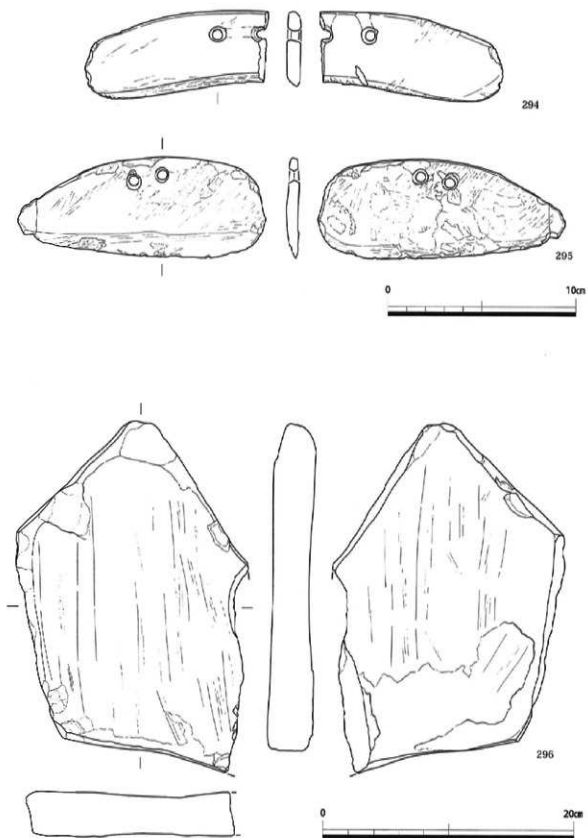


图81 土坑出土磨製石器(3)

土坑110388は、ほぼ同規模で平面方形を呈しているものと考えられるが、約1.2m南側にずれた部分で土坑110387が重複しているため、全体形状ははっきりしない。北端部の残存している部分で、径10cm程度の礫がまとまって検出しており、土器が含まれている。土層断面の観察によると、埋土は灰褐色シルトを主体としており、その上層に礫や土器が分布している。もともと土坑110388は、全体にこのような状況であったものと推測される。そのため、土坑110387が廃絶する際に土坑110388の土器や礫が混ざったものと考えられることができる。

遺物は、弥生土器がややまとまって出土している。出土地点により異なるものの、ほとんどがもともと土坑110388に属するものであったといえる。図80-288は、底部を欠損した甕である。口縁部は、くの字状に強く外反しており、口縁端部は肥厚させて面をなしている。289は、甕の口縁部である。口縁部は、くの字状に外反しており、口縁端部は丸く仕上げられている。火を受けて外面が赤く変色している。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。290・291は、底部であるが、甕か壺か判断できないものである。いずれも、底は平坦である。292は、高杯脚部の脚柱部である。293は、甕の底部である。火を受けて外面が赤く変色している。

小結

以上が主な土坑の成果であり、ここで集落内における土坑の役割について簡単に述べることにする。

先に述べたように、集落内における土坑の分布は、竪穴住居やピット群の状況に比べて少なく、偏っている傾向が見られる。必ずしも集落内で住居の数と比例する必要はないが、規模の小さいものがほとんどで、いわゆる廃棄土坑が少ない。土坑からの出土遺物も少ない。集落の一部を検出したのみであることから、別の場所に集中する可能性もあるが、従来の調査で土坑群が集落の一部に偏るという例は、あまりないことから、全体にこの傾向があるものと考えられる。

その中で、土器棺を埋納した土坑920439とサヌカイトの小片がまとまって出土した土坑260033・260037が特徴的な例としてあげることができる。

土坑920439は、小児棺と考えられる土器棺を埋納したもので、集落内でも埋葬がおこなわれていることを示している。既往の調査でも、隣接した部分で土坑墓が複数検出されており、竪穴住居との関係ははっきりしないが、集落域内での埋葬もありうるという状況である。後述するが、男里弥生集落には別に方形周溝墓を主体とする墓域があり、この違いは問題となるところである。

土坑260033・260037は、あまり規模の大きなものではないが、ほかの遺構と異なり、サヌカイトの小片がまとまって検出されている。特にこの遺構に集中しており、この部分で打製石器製作がおこなわれていたことを示している。具体的な工房のような遺構はみつかっていないが、竪穴住居3と4の間際に位置しており、やや広場的な空間地にあたる場所である。検出遺構や遺物のみで、打製石器製作の過程を復原することは困難であるが、他にも同様の遺構検出例があることから、集落内の空間地において石器製作をおこなっている状況が推測される。

(5) 溝

男里弥生集落の中では、竪穴住居やピットが多く検出されているのに対し、土坑の状況と同様に、明確なかたちの溝は少ない。後世の削平が遺物包含層や地山面まで達している部分も多いことから、浅い溝などは失われている可能性が考えられる。

ただ、検出例は比較的少ないとはいえ、中央南区の中央やや東のL区では多く見られるほか、散在している状況である。土坑の場合と同様に、溝の性格を考える上では、単独で見るとも関連する他の遺構とともに総合的に判断すべきであると考えられる。そのため、ここでは、溝の成果のみではなく、遺構のまとまりとして述べることにする。

溝530006 (図82～84、88、図版16、38)

中央南区の北部にあたるH区の北端部で検出された。ほぼ東西方向にのびているが、西側のG区南端部では検出されていない。全体に上部は削平されているため、G区では失われたものと考えられる。G区では中世以降の溝が調査区を縦断しており、溝530006を横切っていることから、この部分の状況は不明である。このため、大溝1との関係は不明である。地形上では、大溝1に流れ込む溝と考えるのが妥当であるが、途中で止まる可能性もある。弥生集落の北端の遺構であり、これより北側では弥生時代の明確な遺構はみつからない。このため、弥生集落を区画する溝と考えることもできるが、規模が小さいため確定はできず、ここでは可能性として留めておく。

東西方向にほぼ一直線に走っており、確認された部分で、長さ約20m、幅1.0～1.8m、深さ20～50cmを測る。地形上から見ると、東から西に向かう溝と考えられるが、底のレベルは必ずしも東側に比べて西側が低いわけではないため、排水のための溝とは断定できない。埋土は、3層に分けられ、上から黄褐色シルト、にぶい黄褐色シルト、黄褐色粘質シルトであるが、基本的に土質にあまり差はない。黄褐色シルトが主体であり、部分的に炭化物が含まれているほか、下層には径5cm以下の礫が混ざる。地山が締まった礫層部分であるため、埋土に礫が多く混ざっている。土層観察によると、下層で顕著な砂層や粘土層がみつからないため、排水や用水目的での利用はあまりされていなかったものと推定される。ほぼ全体にわたり、上～中層に集中して、真鍮壺形土器を主体とする土器群が検出されている。自然堆積で埋まったというよりも、人為的に土器群を廃棄した状況を呈している。

遺物は、真鍮壺形土器を主体としているが、他の器種の土器やサヌカイト、緑色片岩製石器などもみられる。図83-297は、受け口状口縁壺で、図上復元できたものである。口縁部が内湾しており、外面には、上端と下端に波状文、中央部に直線文が巡っている。頸部の上端から体部上半には、縦方向のハケ調整が見られる。その上に施文されており、頸部中ほどには波状文、その下から体部上半にかけては直線文、胴部最大径付近には波状文が巡る。体部下半では、横方向のヘラミガキ調整が見られるが、底部付近は縦方向のヘラミガキが密に施されている。残存状況があまり良くないため、内面の調整ははっきりしないが、部分的に指頭圧痕が残っている。298は、下層から完形で検出された壺である。横たわった状態でみつかったものであるが、人為的に埋められたものかどうかははっきりしない。口縁部は面をなしており、刻目が施されている。口縁部の調整は磨耗のため不明であるが、外面には縦方向のハケ調整が残る。肩部には直線文、胴部最大径付近には波状文が巡る。体部下半では、縦方向のヘラミガキが施されている。内面の胴部最大径付近には、縦方向のハケ調整が見られる。外面に煤が付着している。299は、壺の口縁部である。口縁部は断面T字状につまみあげており、外面に凹線が密に巡る。口縁部内面には、斜め方向の刺突文が施されている。頸部には横方向の波状文が巡る。口縁部から頸部の

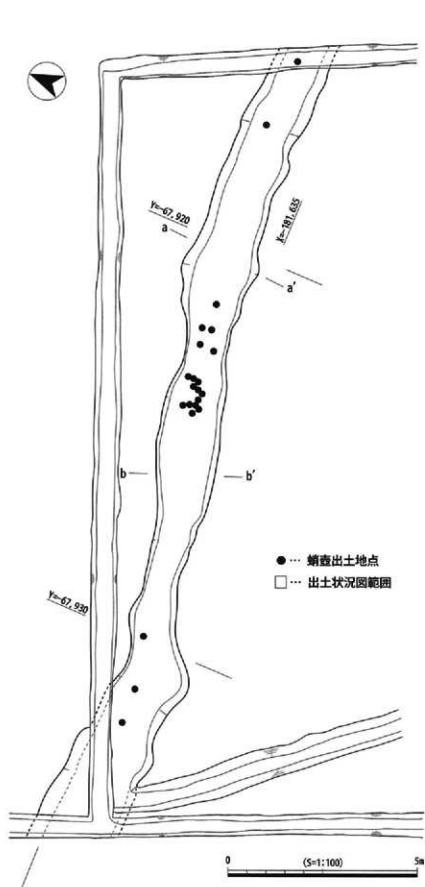
内面には、横方向のヘラケズリ調整が見られる。300は、小型台付鉢の脚台部である。301は、真蛸壺形土器の上半部である。口縁端部は面をなしている。外面には斜め方向のタタキ調整が見られる。302は、真蛸壺形土器の底部である。底は丸みをおびている。内外面には、指頭圧痕が顕著に残る。303は、大型台付鉢の脚取り付け部分である。鉢の底部付近の外面には、縦方向のヘラミガキ調整が施されている。脚部の上部には、透かし孔が付けられている。304は、高杯で脚台部が欠損している。杯部の口縁部に平らな面をもつ。口縁端部をほぼ直角に下方向に広げており、外面に凹線が巡る。杯部の内面には、縦方向のヘラミガキ調整が施されている。

図84-305は、壺の口縁部である。口縁部は大きく外反する。口縁端部は断面T字状につまみあげられており、外面に凹線が密に巡る。口縁端部内面には、斜め方向の刺突文が施されている。頸部には横方向の簾状文が巡る。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。306は、真蛸壺形土器の上半部である。口縁は内湾しており、口縁端部は面をなしている。外面には斜め方向のタタキ調整が見られる。307は、甕の口縁部である。口縁部は、くの字状にほぼ直角に外反する。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。308は、甕の口縁部である。口縁部は、くの字状に強く外反しており、口縁端部は肥厚させて面をなしている。309～311は、甕の底部である。309・310は、いずれも外面に指頭圧痕が残っており、底は平坦である。312は、壺の底部である。外面に縦方向のヘラミガキ調整が施されている。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。313は、真蛸壺形土器の底部である。314は、壺の底部である。外面に縦方向のヘラケズリ調整が見られる。315は、真蛸壺形土器の底部である。外面に指頭圧痕が見られ、底部内面には、ヘラ状工具による調整痕が明瞭に残る。316は、甕の底部である。

317～328は、真蛸壺形土器の底部である。318は、外面に指頭圧痕が残っている。321～328は、いずれも外面に横方向および斜め方向のタタキ目が見られる。内面の調整ははっきりしないが、322は、底部内面にヘラ状工具による調整痕が残る。324は、底部内面に指頭圧痕が見られる。このほかに、図88-344の石簾が出土している。凹基式であり、先端部が欠損している。

真蛸壺形土器がまとまって出土しており、完形品は少ないものの、かなりの個体数になる状況である。出土遺物のうち、大半が真蛸壺形土器であり、特異な器種構成となっている。真蛸壺形土器については、文字通り真蛸を捕獲する蛸壺とされる意見があり、この出土状況も蛸壺が縄などの紐で結び付けられたかたまりの状態で廃棄されたものと見るのが一般的であると考えられる。器種は異なるが、飯蛸壺で、紐は検出されていないものの、あたかも紐で結び付けられたかたまりの状態出土した例が、池上曾根遺跡などでみつかっている。出土状況からみると、酷似しているといえる。溝の性格ははっきりしないが、廃絶の際に土器などを廃棄して埋めたものであり、意図して真蛸壺形土器を多く入れたものではないと考えられる。ただ、多くの土器類が中層より上に分布しているのに対し、298のように下層で完形の状態で出土しているものもあり、意図的な埋め方をしている可能性も考えられる。

真蛸壺形土器に関しては、泉南地域で多く出土する器種であり、中世以降の真蛸壺の形状に似ていることから、同様のものとの考え方が一般的であるが、一部を除いて確定できる例がなく、系譜もはっきりしないことから、ここでは、真蛸壺形土器として利用目的を限定しないこととしている。泉南地域の極めて在地性の高い器種ということができ、男里遺跡においても、特に出土地点が限定されることはなく、一般財に見られる器種である。器壁は厚く、外面にタタキ目が明瞭に残っているものや、内面にヘラ状工具の痕跡がそのまま残されているものなど、調整痕を残したままで、仕上げをおこなっていないものが多く見られる。甕のような使い方も考えられるが、出土遺物における甕の比率が低いわけではな



※レベル値 = T.P.+13.5m

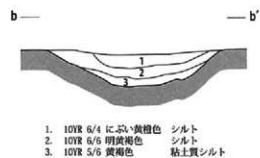
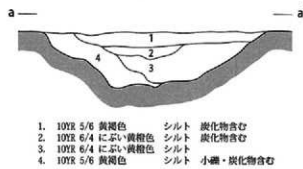


図82 溝530006平・断面図

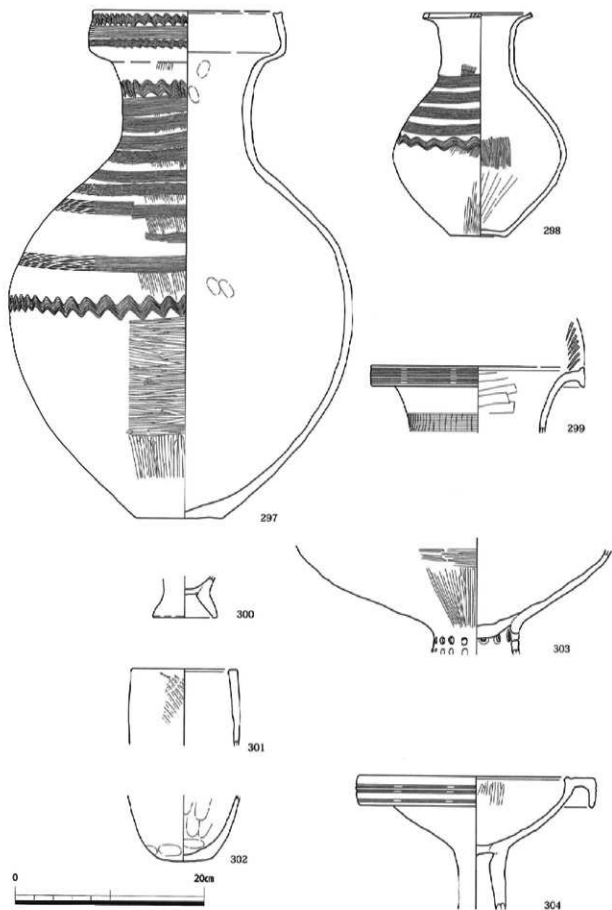


图83 清530006出土土器(1)

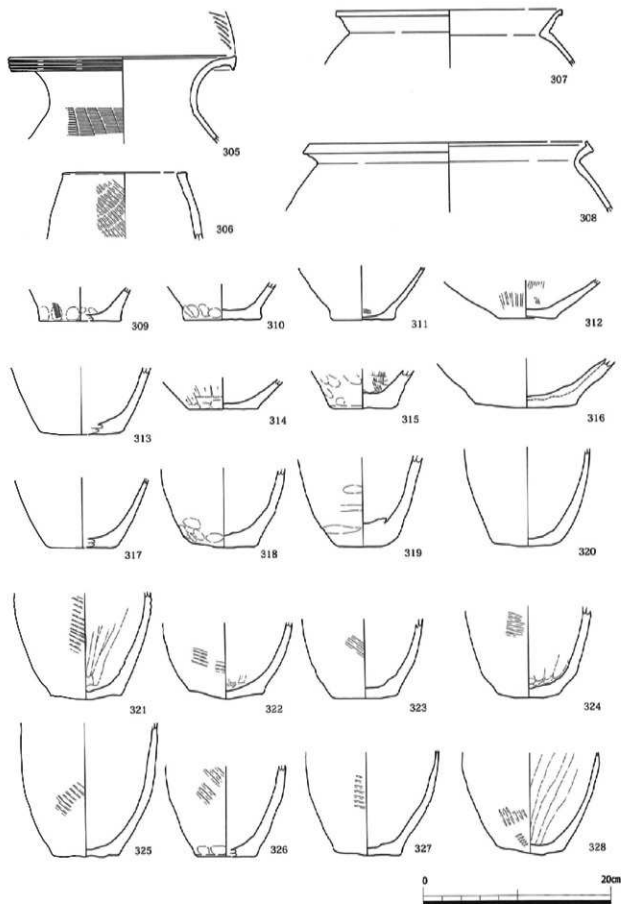


圖84 清530006出土土器(2)

い。ただし、外面に煤が付着するものが見られることから、火にかけて使用することもあったようである。現在のところ、明確な用途は不明であることから、今後、溝530006のような出土例の類例から推定していく必要があるものと考えられる。

溝260694 (図85、87、89、90、図版16、39、76)

中央南区の中央東側にあたるL区のやや北端部で検出された。弥生集落の竪穴住居が密集した部分の東側に位置しており、竪穴住居2の北西側で約2.5m離れて隣接する。周囲にはピット群や土坑がみられる。2本の溝が隣接して掘削されており、別の溝の可能性があるが、ここでは同時に存在したものと考え、一つの遺構としている。

南東から北西方向にほぼまっすぐにのびている。2本の溝が約20cm間隔で平行しているが、ややずれた状態で並んでいる。北側の溝がやや規模が大きく、検出面で長さ約7.2m、幅50～80cm、深さ約35cmを測る。南側の溝は、検出面で、長さ約6.8m、幅約40cm、深さ約35cmを測る。約20cm間隔で平行していることから、併せると、長さ約8.0m、幅約1.2mの規模となる。埋土は、2本の溝とも同様で、オリブ褐色粘質シルトが主体である。埋土は層に分かれないが、上半部に径10cm大の礫や土器、サヌカイトなどが含まれており、廃棄された状況である。北側の溝に比べて南側の溝で多く検出されている。底は平坦であるが、南東側のレベルがやや低い。掘立柱建物の雨落ち溝のような形状を呈しているが、対応する掘立柱建物は検出されていないため、考えられない。水路とも考えにくく、排水などに伴う施設とはいえない。サヌカイト片がまとまって出土していることから、具体的には不明であるが、石器製作に伴う施設と考えることができる。

遺物は、埋土中から礫とともに弥生土器や磨製石器が出土している。弥生土器は、形を復元できるものは少なく、図化できたものは3点である。図87-329は、壺の口縁部である。口縁部が大きく外反しており、口縁部内面には、斜め方向の刺突文が施されている。口縁部を肥厚させており、下方向にやや広げている。胎土の特徴から、生駒西麓産と考えられる。330は、受け口状口縁壺の口縁部である。口縁部はほぼ直立しており、口縁部は肥厚している。口縁部外面の下端には、凹線が巡る。331は、甕の底部である。熱を受けて、赤く変色している。

磨製石器は、4点図化することができた。図89-347は、砂岩製の砥石である。表面は深く、裏面は浅く窪んでおり、表裏面ともに線条痕が残っている。側面は割れたままであるが、1面のみ研磨されている。表面の窪みが深いことから、石皿として使われた可能性もある。図90-348は、砂岩製の叩き石である。卵形の礫を使用しており、全面に研磨された痕跡が残る。一端や中央部などに叩打痕が見られる。349は、砂岩製の台石である。表面が平坦で、打撃痕が少し見られる。裏面の平坦部にも打撃痕がわずかに認められる。350は、砂岩製の台石である。板状の礫を使用しており、裏面は火を受けて剥落している。表面下部に打撃痕が顕著に見られる。また、表裏面ともに線条痕が認められることから、砥石として使われた可能性もある。

溝260660 (図85、87、図版16)

中央南区の中央東側にあたるL区のやや北端部で検出された。弥生集落の竪穴住居が密集した部分の東側に位置しており、竪穴住居2の北側で約2.5m離れて隣接する。周囲にはピット群や土坑がみられる。溝260694の北東約6mに位置しており、ほぼ平行に走る。北端部は、調査区外に延びるため、全容は不明である。

溝260694と同様に、南東から北西方向にほぼまっすぐにのびている。規模は、検出面で長さ約6.6

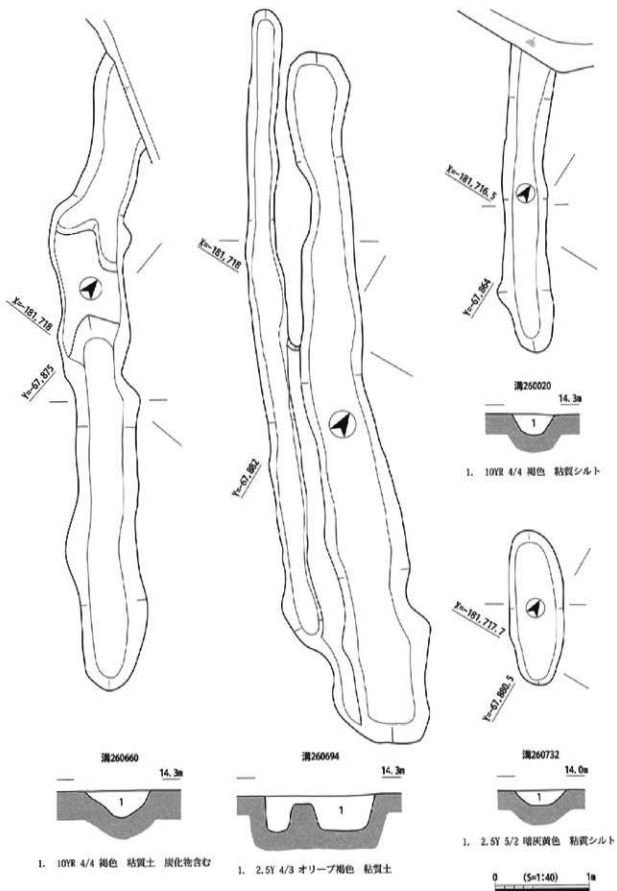


図85 溝平・断面図

m、幅約80cm、深さ約30cmを測る。埋土は、褐色粘質シルトが主体で、炭化物を含む。底のレベルは、高低差はほとんどない。掘立柱建物の雨落ち溝のような形状を呈しているが、対応する掘立柱建物は検出されていないため、考えられない。水路とも考えにくく、排水などに伴う施設とはいえない。溝260694と平行しており、形状も似ていることから、なんらかの関連性が考えられる。ここでも、径10cm大の礫や土器などは検出されているが、サヌカイトの出土量は多くないことや、底が平坦ではないことなど、相違点もある。このため、現状では関連した遺構の可能性があるとこの点に留めておく。

遺物は、埋土中から礫とともに弥生土器が出土している。弥生土器は、形を復元できるものは少なく、図化できたものは4点である。図87-334は、壺の口縁部である。口縁端部を肥厚させており、下方面にやや広げている。口縁端部には、棒状浮文が付けられている。335は、壺の底部である。外面には、縦方向のヘラミガキ調整が見られる。336は、真鍮壺形土器の底部である。破損部の上端を加工しており、小型の鉢として再利用した可能性がある。337は、壺の底部である。裏蓋の可能性もある。外面に指頭圧痕が見られる。外面に煤が付着している。

溝260732 (図85、87)

中央南区の中央東側にあたるL区のやや北端部で検出された。弥生集落の竪穴住居が密集した部分の東側に位置しており、溝260694の北側で約60cm離れて隣接しており、ほぼ平行にのびている。周囲にはビット群や土坑がみられる。溝260694と同時に存在したものでどうかは不明であるが、溝260660とともに同じ方向で掘削されていることから、関連性はあるものと考えられる。

南東から北東にのびる溝である。規模は、検出面で長さ約1.6m、幅約60cm、深さ約20cmを測る。埋土は、黄褐色粘質シルトである。溝状を呈しているが、規模が小さく、雨落ち溝や排水路とは考えられないため、土坑的な遺構といえる。溝260694と同様に、径10cm大の礫や土器などは検出されているが、サヌカイトの出土量は多くない。

遺物は、埋土中から礫とともに弥生土器が出土しているが、図化できたものは1点である。図87-338は、高杯杯部の口縁部である。破片が小さいため、鉢の口縁部の可能性もある。口縁部はほぼ直立しており、口縁端部は肥厚している。口縁部外面の上端と下端には、凹縁が巡る。

溝260020 (図85、87)

中央南区の中央東側にあたるL区の南半部で検出された。弥生集落の竪穴住居が密集した部分の東側に位置している。北側を竪穴住居4に切られているため、全容は不詳である。周囲にはビット群や土坑がみられる。

溝260694とは約26m離れているが、南東から北西方向にほぼ同じ方向でまっすぐにのびている。それぞれの溝は離れているため、直接の関連性は不明であるが、L区で検出された溝は、ほぼ同じ方向で掘削されている。地形上の制約などはないことから、集落内でなにか意味のある方向を示している可能性があるが、詳細は不明である。規模は、検出面で長さ約3.2m、幅約50cm、深さ約20cmを測る。埋土は、褐色粘質シルトが主体である。底は平坦であるが、北西側のレベルがやや低い。掘立柱建物の雨落ち溝のような形状を呈しているが、対応する掘立柱建物は検出されていない。水路とも考えにくく、排水などに伴う施設とはいえない。溝260694などで検出されている礫やサヌカイトはみられない。

遺物は、埋土中から弥生土器が出土しているが、図化できたものは1点である。図87-343は、壺の底部である。内外面に指頭圧痕が見られる。底は平坦である。外面に火を受けており、赤く変色している。

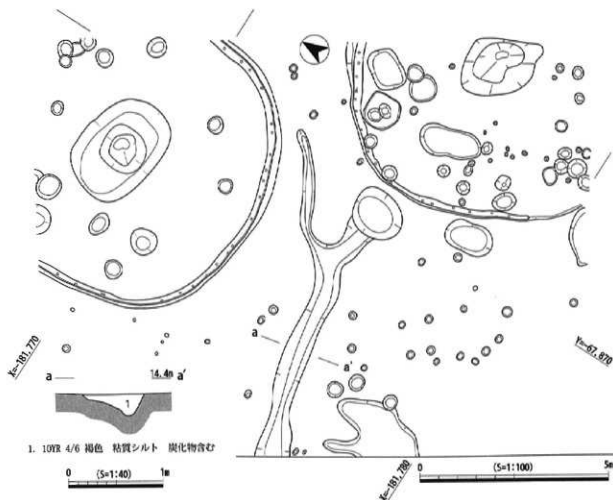


図86 溝710219平・断面図

溝710280 (図87、図版39)

中央南区の中央にあたるN区の南端部で検出された。調査区の端部で一部が確認されたのみであるため、全容ははっきりしない。大溝1に合流する溝と考えられるが、南側は調査区外であるため、詳細は不明である。さらに、東側は古代の溝とほぼ重複するため、失われている。深さ約10cm分が確認された。出土遺物の多い部分であり、大溝1の遺物との選別がむずかしい点もあった。

確実に溝710280に属する遺物のうち、弥生土器で図化できたものは2点である。図87-332は、直口壺の口縁部である。口縁は、斜め上方に向かって広がる。外面は、口縁端部のすぐ下に円形浮文が付けられており、その下には突帯が3条巡っている。口縁端部を肥厚させており、やや内湾している。表面に橙色の化粧土が施されているものと考えられ、全体に赤っぽい色調である。333は、裏の上半部である。口縁部は、くの字状に強く外反しており、口縁端部は肥厚させて面をなしている。

溝710219 (図86～88、図版7)

中央南区の中央にあたるN区の南半部で検出された。弥生集落の竪穴住居が密集した部分のほぼ中央部に位置している。竪穴住居22・23と竪穴住居25のちょうど中間部分で検出されている。平面形はY字状を呈しており、2棟の竪穴住居から派生した溝が合流し、大溝3へのびている。竪穴住居22・23と竪穴住居25は、上部構造に壁構造をもつものと推定していることから、雨落ち溝が周囲に巡っていたことが考えられる。この調査区では全体に削平が著しく、遺構の上部が失われていることもあって、竪

穴住居22・23の周囲では溝は確認されていないが、雨落ち溝が溝710219につながっている状況ということができる。竪穴住居25についても溝は確認されていない。ただ、竪穴住居25から派生している部分を土坑が切っていることから、雨落ち溝がつながる状況ははっきりしない。

竪穴住居22・23方面から合流部までは、検出面で長さ約3.4m、幅約20cm、深さ約5cmを測り、底のレベルは合流部に向かってやや下がっている。竪穴住居25方面から合流部までは、残存部で長さ約1.0m、幅約30cm、深さ約10cmを測り、底のレベルは合流部に向かってやや下がっている。合流部からは、ほぼ東西方向にまっすぐにのびており、大溝3にいたるものと考えられるが、大溝3との合流部は調査区の境界部分にあっており、明確にはなっていない。この部分は、検出面で長さ約5.5m、幅約60cm、深さ約15cmを測り、底のレベルは大溝3に向かってやや下がっている。断面形はV字状を呈している。埋土は、全体にわたって褐色粘質シルトが主体であり、炭化物を含む。合流部から大溝3に向かう部分

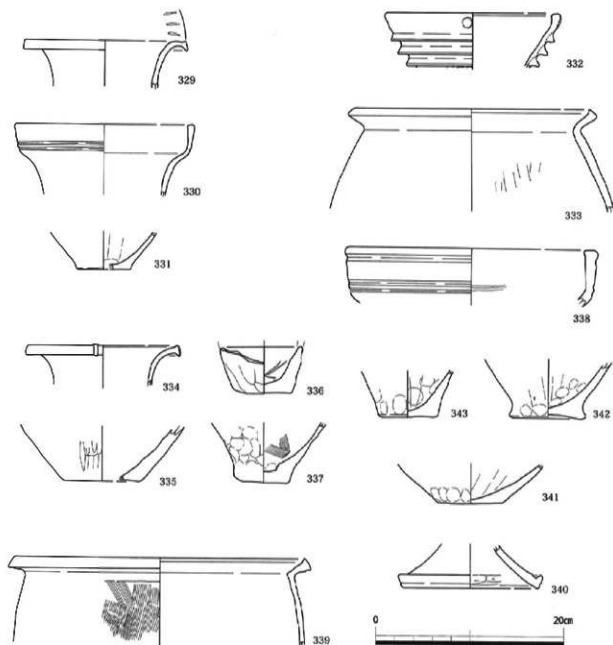


図87 溝出土土器

では、灰黄褐色粘質シルトが混ざっている。1層であることから、一気に埋められた状況といえることができる。埋土の観察からは、水路として利用されたものかどうかは確定できない。ただし、竪穴住居との関係などをみると、雨落ち溝から大溝3に向かう排水路の可能性が高いといえる。

遺物は、埋土中から弥生土器が出土しているが、図化できたものは3点である。図87-339は、竪の口縁部である。口縁部は、くの字状に強く外反しており、口縁端部は肥厚させて面をなしている。体部の外面には、縦方向のハケ調整が見られる。340は、高杯脚台部である。端部を上方に広げており、面を形成している。341は、甕の底部である。外面に指頭圧痕が見られる。底は平坦である。このほかに、打製石器も見られる。図88-345は、有茎式の石鏃である。346は、凸基Ⅱ式の石鏃である。

溝720138 (図87、図版39)

中央南区の南部にあたるR区の北端部で検出された。弥生集落の竪穴住居が密集した部分の中央部より南側に位置している。竪穴住居が少ない部分で、竪穴住居との重複関係はない。ほぼ東西方向に走る溝であるが、調査区が分割された部分にあたり、M区の南端部とQ区の東端部にまたがっているものと考えられる。ただし、M区とQ区では、削平のため検出されておらず、全容は不明である。R区でも全体に削平を受けており、上部はかなり失われているものといえる。周匝には溝はみられず、性格を判断するのはむずかしいが、なんらかの排水路のようなものと考えられる。

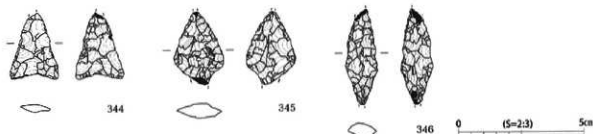


図88 溝出土打製石器

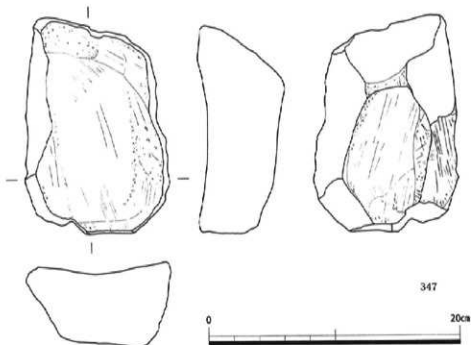
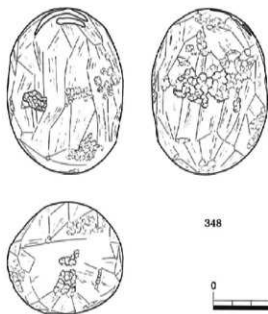
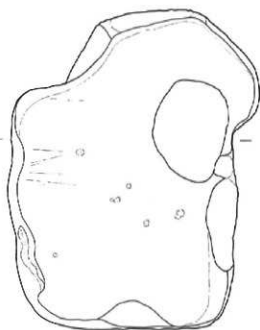


図89 溝出土磨製石器(1)



348



349



350

图90 清出土磨製石器(2)

東西方向にほぼまっすぐにのびており、規模は、検出面で長さ約5.8m、幅20～60cm、深さ約10cmを測る。西側に比べて東側がやや広がっているが、底のレベルは西側のほうが低い。埋土は、灰黄褐色粘質シルトが主体で、黒褐色粘質シルトが混じる。東側では径10cm以下の礫を多く含んでいる。

遺物は、埋土中から弥生土器が出土しているが、図化できたものは1点である。図87-342は、甕の底部である。外面に指頭圧痕が見られる。底はややへこんでいる。紀伊産の甕の底部に似た形状や調整であるが、結晶片岩を含んでいないものである。

小結

土坑の項でも述べたが、全体に集落内での竪穴住居やピット群の検出量と比較して、溝はあまり見られない。L区でややまとまった状態で検出されたほかは、単発的である。排水路と考えられる例は、竪穴住居からの雨落ち溝からのびる溝710219とH区の溝530006、R区の溝720138である。検出状況から、集落内を流れる排水路はあまり存在しなかったものということができる。

H区の溝530006は、結果的には集落の北限を示すかたちとなっており、廃絶時に多くの土器が廃棄されている。真鍮形土器がまとまって多量に出土しており、特徴的な様相を呈している。性格ははっきりしないが、堆積状況から、排水路として使われたものとは考えにくい。これより北には弥生時代の明確な遺構が検出されておらず、なんらかの境界の意味をもっていた可能性は考えられる。

L区の溝のまとまりは、排水路的なものではなく、サヌカイト片がまとまって出土していることから、石器製作に関わる遺構と考えられる。L区では、ほかに土坑でも同様に、サヌカイト片がまとまって出土したものがみられることから、具体的な施設は不明であるが、集落内において石器製作に関わる部分であったと推測することができる。

男里弥生集落では、次項で述べる大溝が隣接していることから、水に関わることは単発的な溝よりも、すべて大溝に依存していたものということができる。

2. 大溝

弥生集落の西側は、金熊寺川（男里川）の低位から中位段丘面にあたっており、調査区の隣接地で比高差1m以上の段丘崖を確認している。特に、P区やI区の西側、G区南端で顕著にみられる。この段差の形状は一様ではなく、P区西側の段差はややゆるく、徐々に下がっているのに対し、I区の西側やG区南端の段差は急に下がっている。この段丘崖に沿うかたちで大溝が検出された。現在でも、この大溝に近い部分を流れる水路が使われており、夏場には水田に水をひいている。やや流路がずれている部分もあるが、ほぼ同じような位置を流れている。もともと自然流路が流れていた可能性が高い。

調査当初は、大溝との認識がなく、特にP区の調査時には、集落の西側で一段下がった低位段丘に、集落から廃棄された遺物が堆積していたものと考えていた。この部分の段差はややゆるく、徐々に下がっていることから、自然地形との認識であった。その後、I区とJ区にまたがる部分やG区南端部で急に下がる段差をもつ流路の存在が明らかとなり、大溝との認識をもつようになった。さらに、これにつながる部分が、K区南半部を横切るかたちで調査されたことから、ようやく大溝の存在および形状が明らかになった。また、断片的に検出された大溝を集落内の位置関係で見ると、単純に1本の大溝のみとは考えられない検出状況である。詳細は個別に述べていくが、大きく4本の大溝の存在が想定されることから、この項ではこれらを中心に述べていくこととする。ただし、これらの大溝は、無関係ではなく、大溝1を中心として各大溝はつながったものであり、関連性は高いものといえる。集落の西側をほぼ南

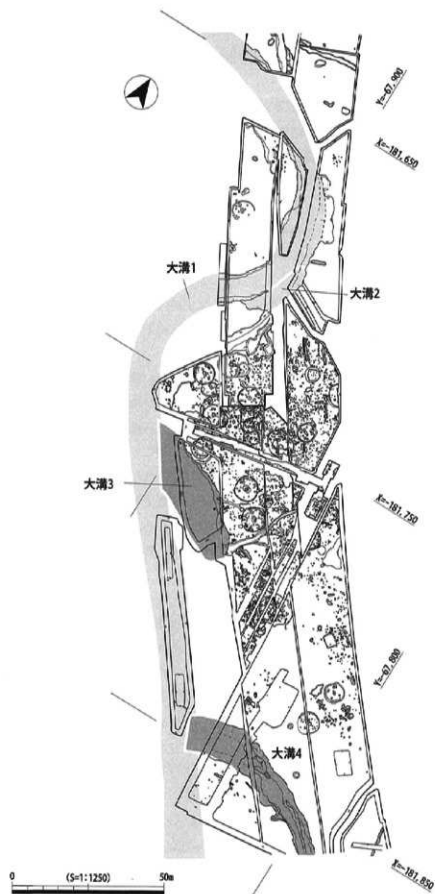


图91 大溝分布图

北方向に走る大溝1に付属するかたちで、K区で大溝2、P区で大溝3、T区からU区にかけて大溝4が検出された。大溝間の合流部が調査区外であることから、重複関係は不明なものもあり、すべてが同時に存在していたものかどうかはわからないが、大きな時期差はないものと考えられる。ほぼ同時に機能していたものといえる。

(1) 大溝1・2

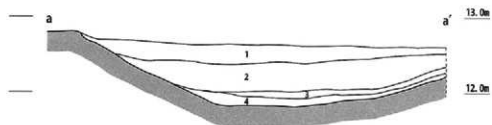
調査区の西側部分を南から北方向にのびる形状である。ただし、単純な形状ではなく、集落の北端部分では、大きく東に回りこんだ後、北に向かい大きく円弧を描いて西方向にのびている。調査で形状が確認されているのは、集落の北側部のみであり、集落の南側では、西側の調査区外を走っているため、はっきりしない。想定する流路としては、上流に上る方向でいうと、K区を横切って西方向に向かった後、O区の西端をかすめて南下し、P区の西側を平行して走り、S区に至るものである。S区は、トレンチ調査のみをおこなっているが、遺構の形状はわからないものの、厚い遺物包含層が検出されており、多くの土器類が出土している。大溝1のほぼ中央部にトレンチを掘削した状況といえる。全体形状を見ると、弥生集落の北側で蛇行していることがわかる。さらに上流の南側の状況は、調査区外を走ることから、はっきりしないが、地形的にみると、U区の南側をさらに南下し、現在の第二阪和国道の交差点付近に達するものといえることができる。

全体形状は、以上のようなものと考えられるが、推定の域を出ない部分も多々あるため、調査で確認された部分の詳細を述べていくこととする。調査の工程上、調査区が細切れになってしまい、断片的にしか確認できない部分も多いが、全体に遺物が多く出土しており、各調査区で埋土の状況も観察できることから、大溝の性格を知ることができるものとする。遺物に関しては、後に詳述するが、集落内で検出された遺物の大部分を占めているため、時期決定の根拠になるほか、弥生時代中期末の一括資料としては、泉南地域では最も出土量が多いものであるといえる。調査で明らかになっている部分を、大きく5ヶ所に分けて記述することとする。大溝の流れとしては、南から北方向だと考えられるが、調査区の設定上、北からの記述とする。G区南端部、I・J区、K区南半部、O区西端部、S区の順とし、遺物もこのまとまりで述べる。

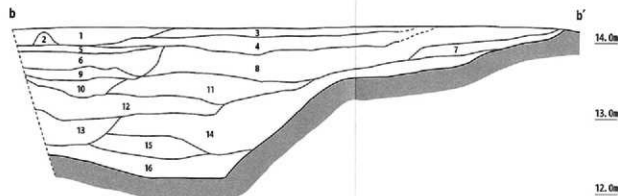
G区南端部（図92、93、97、126、図版17、40）

G区南端部では、わずかに大溝1の北側肩部を検出したにすぎない。ただし、この部分を検出したことにより、当初想定していた、I・J区から北西方向にまっすぐのびるのではなく、さらに屈曲してほぼ西方向に向かうことが確認された。想定ライン上には、近世から続いている水路がのびており、旧河道の方向に沿っていることから、自然流路としては最も適しているルートと考えたのであるが、実際は西方向の双子池下池に向かっており、より旧河道の深い部分へ直接向かうルートを通っているものといえる。現在の水路は、自然流路を利用したものではなく、より合理的なルートを掘削して双子池に向けたものといえる。大溝は、現在の西へ向かう道路の下を通っていることになる。

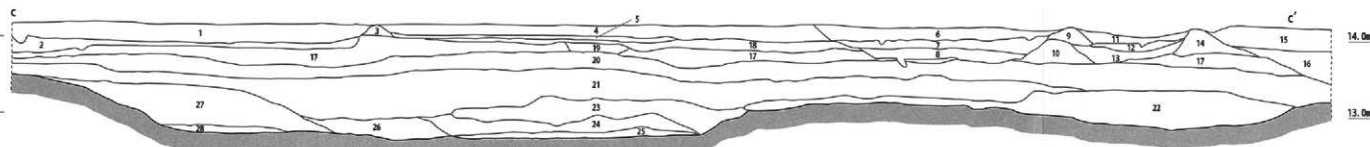
検出された部分は、最大で延長約11m、幅約4m、深さ0.7～1.0mを測る。肩部のみの検出であるため、底の状況は不明であるが、埋土の堆積状況を観察することができる。自然流路の肩部を人為的に成形して急な傾斜をつくっているものと考えられる。肩部から底にかけては、にぶい黄褐色粘質シルトを主体とする層であり、礫を含む。その上は灰色砂混じりシルト層である。上層は、にぶい黄褐色粘質シルトが主体であるが、人為的に埋められた層であり、土器を多く含んでいる。底部付近に粘質土が堆積していることから、当初は流れの弱い水たまり状態であったことが考えられる。その



1. 7.5YR 6/4 に近い褐色 砂混じりシルト 炭化物含む
2. 10YR 5/2 灰黄褐色 砂混じりシルト 炭・炭化物含む
3. 10YR 6/2 灰黄褐色 粘土質シルト
4. 2.5Y 7/1 灰白色 粘土質シルト Fe含む



- | | | |
|--------------------------------|-------------------------------|----------------------------------|
| 1. 10YR 5/4 に近い黄褐色 シルト 炭化物少量含む | 7. 10YR 4/4 褐色 シルト 礫含む | 13. 2.5Y 5/2 暗灰褐色 砂混じり粘土 礫を多量に含む |
| 2. 10YR 5/4 に近い黄褐色 シルト 礫多量に含む | 8. 10YR 5/6 黄褐色 粘土質シルト 粘土質シルト | 14. 10YR 4/3 に近い黄褐色 粘質シルト 礫を含む |
| 3. 2.5Y 8/4 に近い黄褐色 シルト 礫多量に含む | 9. 2.5Y 5/3 黄褐色 粘土質シルト | 15. 10YR 4/3 に近い黄褐色 粘質土 礫を含む |
| 4. 10YR 5/4 に近い黄褐色 シルト 砂混じりシルト | 10. 2.5Y 5/4 黄褐色 シルト 礫含む | 16. 2.5Y 5/1 黄灰色 砂混じり粘土 礫含む |
| 5. 10YR 5/4 に近い黄褐色 シルト | 11. 7.5YR 4/4 褐色 砂混じりシルト | |
| 6. 2.5Y 5/4 黄褐色 シルト 礫多量に含む | 12. 10YR 4/4 褐色 粘質土 礫含む | |



- | | | |
|-----------------------------|-----------------------------|--------------------|
| 1. N 4/0 灰色 シルト | 13. N 7/0 灰色 シルト | Fe含む |
| 2. N 5/0 灰色 シルト | 14. 10YR 7/2 に近い黄褐色 砂混じりシルト | 礫を少量含む |
| 3. 10YR 7/2 に近い黄褐色 砂混じりシルト | 4. N 7/0 灰白色 砂混じりシルト | |
| 4. N 7/0 灰白色 砂混じりシルト | 5. 7.5YR 7/1 暗褐灰色 砂混じりシルト | |
| 5. 7.5YR 7/1 暗褐灰色 砂混じりシルト | 6. N 5/0 灰色 砂混じりシルト | |
| 6. N 5/0 灰色 砂混じりシルト | 7. 10Y 7/1 灰白色 砂混じりシルト | |
| 7. 10Y 7/1 灰白色 砂混じりシルト | 8. 7.5Y 6/1 灰色 砂混じりシルト | |
| 8. 7.5Y 6/1 灰色 砂混じりシルト | 9. 10Y 7/1 灰白色 砂混じりシルト | Fe含む |
| 9. 10Y 7/1 灰白色 砂混じりシルト | 10. 10Y 7/1 灰白色 シルト | 礫を少量含む |
| 10. 10Y 7/1 灰白色 シルト | 11. N 6/0 灰色 砂混じりシルト | Fe含む |
| 11. N 6/0 灰色 砂混じりシルト | 12. N 6/0 灰色 シルト | |
| 12. N 6/0 灰色 シルト | 13. N 7/0 灰白色 砂混じりシルト | |
| 13. N 7/0 灰白色 砂混じりシルト | 14. 10YR 7/2 に近い黄褐色 砂混じりシルト | |
| 14. 10YR 7/2 に近い黄褐色 砂混じりシルト | 15. 5Y 7/1 灰白色 シルト | |
| 15. 5Y 7/1 灰白色 シルト | 16. 2.5Y 7/2 灰黄色 シルト | |
| 16. 2.5Y 7/2 灰黄色 シルト | 17. 10YR 7/3 に近い黄褐色 砂混じりシルト | |
| 17. 10YR 7/3 に近い黄褐色 砂混じりシルト | 18. 5Y 7/3 塊黄色 砂混じりシルト | |
| 18. 5Y 7/3 塊黄色 砂混じりシルト | 19. 10YR 8/3 淡黄褐色 シルト | Fe含む |
| 19. 10YR 8/3 淡黄褐色 シルト | 20. 10YR 7/3 に近い黄褐色 砂混じりシルト | |
| 20. 10YR 7/3 に近い黄褐色 砂混じりシルト | 21. 10YR 7/4 に近い黄褐色 砂混じりシルト | 炭化物・Fe含む |
| 21. 10YR 7/4 に近い黄褐色 砂混じりシルト | 22. N 5/0 灰色 砂混じりシルト | 小礫・遺物多量に含む (大溝2埋土) |
| 22. N 5/0 灰色 砂混じりシルト | 23. 10YR 5/4 に近い黄褐色 砂混じりシルト | 小礫・遺物多量に含む (大溝1埋土) |
| 23. 10YR 5/4 に近い黄褐色 砂混じりシルト | 24. 10YR 5/1 褐色 腐砂 | 炭化物少量含む (大溝1埋土) |
| 24. 10YR 5/1 褐色 腐砂 | 25. 10YR 6/2 灰黄褐色 礫混じり粗砂 | 炭化物少量含む (大溝1埋土) |
| 25. 10YR 6/2 灰黄褐色 礫混じり粗砂 | 26. 10YR 6/6 明黄褐色 砂混じりシルト | 炭化物少量含む (大溝1埋土) |
| 26. 10YR 6/6 明黄褐色 砂混じりシルト | 27. 7.5Y 6/3 に近い褐色 砂混じりシルト | 炭化物含む (大溝1埋土) |
| 27. 7.5Y 6/3 に近い褐色 砂混じりシルト | 28. 10YR 5/4 に近い黄褐色 シルト | |
| 28. 10YR 5/4 に近い黄褐色 シルト | | |

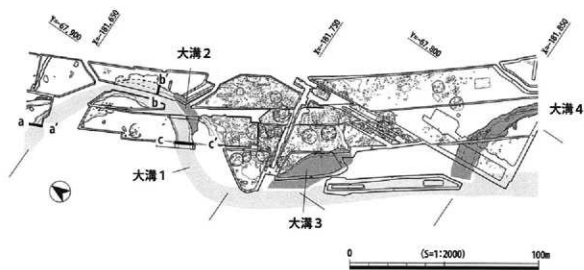
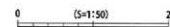


図92 大溝1・2断面図

後、砂を含む層が堆積していることから、ある程度の流れがあったということが出来る。このため、この部分での土層観察では、大溝1は当初流れの弱い状況であったが、その後ある程度の流れをもった流路であったということが出来る。

上層から、多くの弥生土器をはじめとする遺物が出土している。遺物量のわりには、完形になるものが少ない。この部分で出土した弥生土器を図93に示す。

351は、いわゆる日明山型壺の口縁部である。大型の土器であり、口縁部がゆるやかに外反する。外面には直線文が複数巡っている。内面には指頭圧痕が残る。352は、細頸壺の口縁部である。口縁部外面の上部には凹線が巡っている。その下には波状文と直線文が交互に巡っている。口縁部は、やや内湾している。353は、受け口状口縁壺の口縁部である。口縁部が直立気味でやや内湾しており、外面には波状文が巡っている。内面には指頭圧痕が残っている。354は、壺の蓋である。被熱のためか、紫色に変色している。355は、壺の蓋である。つまみ部は欠損している。2点一組の紐孔があげられている。356は、受け口状口縁壺の口縁部である。口縁部が直立気味でやや内湾しており、外面には波状文が密に巡っている。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。357は、小型の壺である。内外面ともに、縦方向のハゲ調整が見られる。358は、受け口状口縁壺の口縁部から肩部である。口縁部が直立気味でやや内湾しており、外面には凹線が密に巡っている。頸部に押捺突帯をもつ。肩部の内面には指頭圧痕が見られる。

359は、真蛸壺形土器の上半部である。口縁部は肥厚させており、面をなしている。口縁部は内湾している。外面には斜め方向のハゲ調整、内面にはナデ調整が施されている。外面に煤の痕跡が残る。360は、真蛸壺形土器の下半部である。外面にはナデ調整、内面にはヘラケズリ調整が見られる。外面に煤が付着している。361は、管状土鍾である。一部欠損しているが、ほぼ完形である。確実に弥生時代のものとは断定できないが、出土遺物の中に後世の混入品は見られないため、弥生時代の遺物と考える。362は、高杯の脚部である。外面に縦方向のミガキ調整が施されている。363は、甕の口縁部である。口縁部は、くの字状に強く外反しており、口縁部は肥厚させて面をなしている。364は、甕である。胴部中ほどは欠損しているが、口縁部から体部中ほどにかけての上半部と底部は残存しており、完形に近いところまで復元できたものである。口縁部は、くの字状に強く外反しており、口縁部は肥厚させて面をなしている。

このほかに、石器類も出土している。図97-410は、砂岩製の叩き石である。棒状の礫を使用している。一端と側縁、平面中央に打撃痕が認められる。図126-873は、凸皿Ⅱ式の石鏃である。一部側縁が欠損している。

Ⅰ区 (図92、94～97、114、図版17、40、41、74)

Ⅰ・Ⅰ区では、大溝1の両肩部を検出したのみである。大溝1が東に回りこんで、北に向かい大きく円弧を描く部分にあたり、もっとも東側に寄った部分である。大溝1と同じ位置に、近世から続く現代の水路があり、これを避けて調査区Ⅰ・Ⅰ区が設定されている。このため、大溝1の中心部分の調査はできず、両調査区で大溝1の肩部を検出したかたちとなっている。

東側のⅠ区では、削平や攪乱が著しく、肩部を明確に検出することは困難であった。中央部が未調査であるため、底の状況は不明な点もあるが、埋土の堆積状況を観察することができた。ここでも、自然流路の肩部を人為的に成形して急な傾斜をつくっているものと考えられる。大溝内から見ると、かなり比高差が感じられ、大がかりな印象を与える。

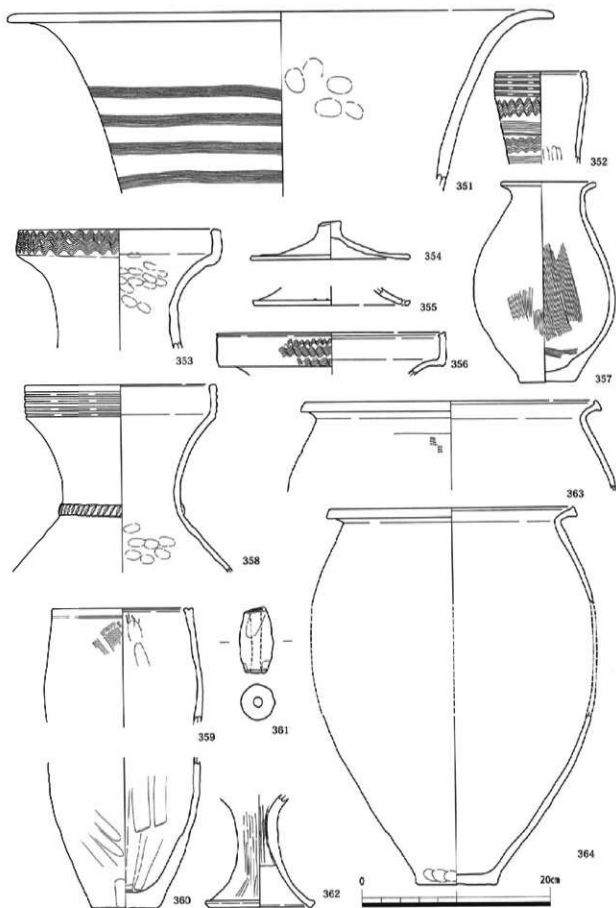


图93 大漠1出土土器(1)

検出された部分は、最大で延長約35m、幅2～5m、深さ0.8～1.2mを測る。肩部から底にかけては、灰色粘土を主体とする層であり、底付近には砂を含む。その上は暗褐色粘質シルトや暗灰黄色粘質シルト層で小礫を含む。上層は、にぶい黄褐色粘質シルトが主体で、灰黄褐色粘質シルトが混じる。人為的に埋められた層であり、径8cm程度の礫や土器を多く含んでいる。底部付近で主に粘土が堆積していることから、当初は流れの弱い水たまり状態であったことが考えられる。その中で、砂を含む層も見られることから、ある程度の流れがあった時期も存在したといえることができる。このため、この部分での土層観察でも、G区南端部の見解と同様に、大溝1は当初流れの弱い状況であったが、その後ある程度の流れをもった流路であったといえることができる。

上層から、多くの弥生土器をはじめとする遺物が出土している。遺物量のわりには、完形になるものが少ない。この部分で出土した弥生土器を図94・95に示す。出土位置で遺物を分けてみたが、あまり時期差は感じられない。

図94はI区北半部の主に上層から出土したものである。365は、壺の口縁部である。口縁部が大きく外反しており、口縁端部内面には、斜め方向の刺突文が施されている。口縁端部を肥厚させており、T字状にやや広げて面をつくっている。面には、波状文が見られる。頸部には凹線が巡る。366は、壺の口縁部である。口縁端部をほぼ直角に下方向に広げており、外面に波状文が巡る。さらにその上に縦方向のヘラ描き沈線が付けられている。口縁部内面には、ヘラ状工具による斜め方向の刺突文が施されている。367は、壺の口縁部である。口縁端部を肥厚させており、外面には凹線が巡る。口縁部内面には、紐孔が1ヶ所あけられている。368は、壺の口縁部である。口縁端部をT字状に広げており、外面には凹線が巡る。さらにその上に棒状浮文が付けられている。口縁部内面には、ヘラ状工具による斜め方向

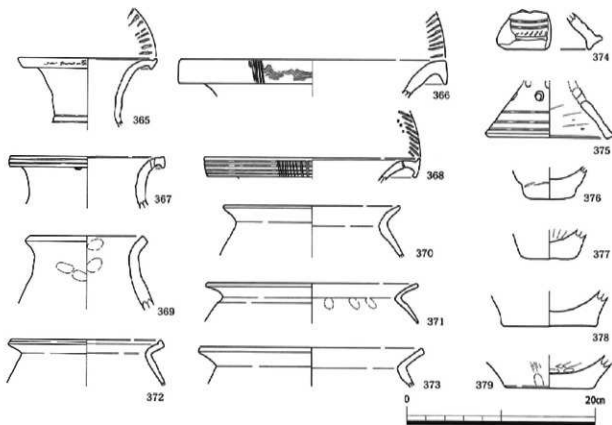


図94 大溝1出土土器(2)

の刺突文が施されている。また、口縁部内面には、3点一組の紐孔があげられている。口縁部内外面には、黒色物質が塗布されている。369は、頸部がすばまった真蛸壺形土器の上半部である。口縁部が外反している。内外面には指頭圧痕が残る。内面に熱を受けており、赤く変色している。370・371・373は、甕の口縁部である。いずれも口縁部は、くの字状にほぼ直角に外反する。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。372は、甕の口縁部である。口縁部は、くの字状にほぼ直角に外反する。外面に煤が付着している。374は、脚台部の破片で、器種は特定できない。端部を肥厚させており、T字状にやや広げて面をつくっている。外面の中央部に凹線、その下に刺突文が巡っている。375は、脚台部の破片で、高杯の可能性が高いが、器種は特定できない。外面の上半部には円形の透かし孔が2列付いており、下半部には凹線が巡る。376・377は、真蛸壺形土器か甕の底部である。378・379は、甕の底部である。底は平坦である。

図95は、I区北半部の主に下層から出土したものである。380は、甕の口縁部である。口縁端部をほぼ直角に下方向に広げており、外面に凹線が巡る。口縁端部外面の凹線の上には、上端と下端に円形浮文が連続して付けられている。381は、甕の口縁部である。口縁端部をほぼ直角に下方向に広げており、外面に凹線が巡る。頸部にも凹線が巡っている。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。382は、無頸壺の上半部である。口縁は内湾する。口縁端部を肥厚させており、凹線が巡る。383は、受け口状口縁

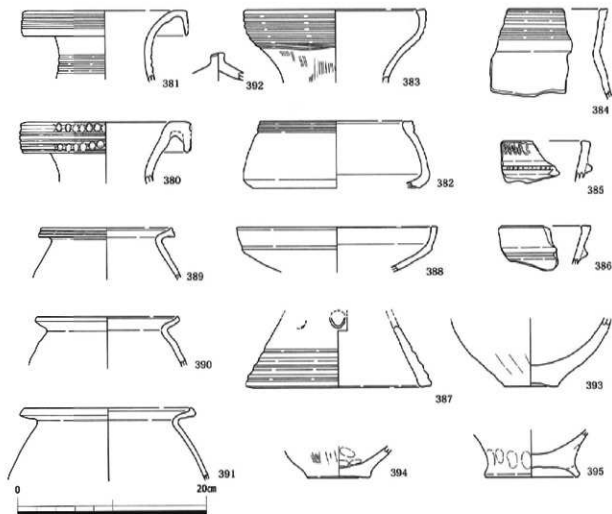


図95 大溝1出土土器(3)

壺の口縁部である。口縁は内湾気味であるが、受け口部の屈曲は甘い。口縁部外面には、凹線が密に巡る。頸部外面には、縦方向のハケ調整が見られる。384は、口縁が内湾する壺の口縁部である。口縁部外面に、凹線が密に巡っている。385・386は、直口壺の口縁部である。いずれも口縁は、斜め上方に向かって広がり、外面には、口縁端部からやや下がった位置に突帯が1条巡っている。口縁端部を肥厚させており、やや内湾気味である。385は、口縁部上端に波状文が巡っており、突帯に刻目をもつ。387は、器台の脚台部である。下半部は外面に凹線が巡っている。上半部には、透かし孔が付く。熱を受けており、赤く変色している。

388は、高杯の杯部である。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。389は、甕の上半部である。口縁部は、くの字状にほぼ直角に外反する。口縁端部は肥厚しており、外面に凹線が巡る。外面に煤が付着している。390は、甕の上半部である。口縁部は、くの字状にほぼ直角に外反する。外面に煤が付着した痕跡が見られる。391は、甕の上半部である。口縁部は、くの字状にほぼ直角に外反する。口縁端部は肥厚しており、上方につまみあげられている。外面に煤が付着している。392は、壺の蓋である。周縁部の欠損

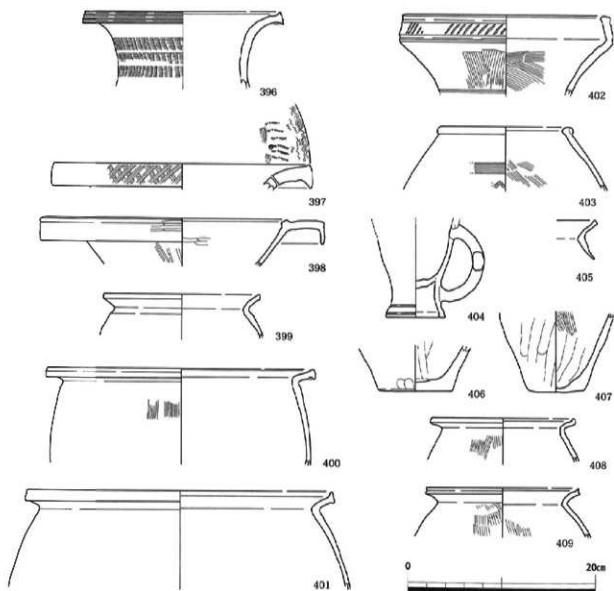


図96 大溝1出土土器(4)

後に打ち欠いており、メンコ状に再加工している。393～395は、壺の底部である。395は、胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。

このほかに、石器類も出土している。図97-411は、緑色片岩製の柱状片刃石斧である。片側面が残存しており、縦方向に欠損後、破損面を研磨している。412は、黒色片岩製の柱状片刃石斧である。片側面が残存しており、刃部に線条痕がわずかに残る。413は、下層から出土したもので、緑色片岩製の扁平片刃石斧である。石廬丁に転用している可能性がある。上辺と片側辺の研磨は少ない。414は、下層から出土したもので、緑色片岩製の石廬丁未成品である。剥離成形後の研磨段階のものと考えられる。図114-729は、上層から出土したもので、緑色片岩製の石廬丁である。片刃であり、組擦れ痕が表裏とも背側へ向いている。光沢が著しい。

図96は、I区南半部の主に下層から出土したものである。396は、壺の口縁部である。口縁部は大きく外反する。口縁端部は肥厚しており、外面に凹線が巡る。頸部には、簾状文が3列巡っている。397は、壺の口縁部である。口縁端部を下方向に広げており、外面に格子文が巡る。口縁部内面には、外から波状文、斜め方向の刺突文、扇状文が施されている。さらに、口縁部内面には、2点一組の組孔があげられている。398は、高杯杯部の口縁部である。口縁端部をほぼ直角に下方向に広げており、外面に横方向のミガキ調整が見られる。399は、甕の上半部である。口縁部は、くの字状にほぼ直角に外反する。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。400は、甕の上半部である。口縁端部は肥厚しており、口縁部は、大きく外反する。外面に縦方向のハケ調整が残る。401は、甕の上半部である。口縁部は、くの字状にほぼ直角に外反する。口縁端部は肥厚しており、上方につまみあげられている。402は、受け口状口縁部の口縁部である。受け口部の屈曲は強く、断面は逆「く」の字状を呈しており、口縁は内湾する。口縁部の上端と下端に凹線が巡り、中央には斜め方向のヘラ状工具による刺突文が巡っている。頸部には、凹線が巡っている。頸部上半部では、外面に縦方向、内面に斜め方向のハケ調整が見られる。403は、無頸壺の上半部である。口縁端部が丸くおさまられている。体部外面には、横方向の直線文や波状文、内面には斜め方向のハケ調整が見られる。404は、口縁部を欠損した把手付鉢である。把手は、挿入法で鉢に取り付けられている。405は、甕の口縁部である。口縁部は、くの字状にほぼ直角に外反する。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。406は、壺の底部である。外面には指頭圧痕が見られる。底は平坦である。407は、真蛸壺形土器の底部である。内外面ともナデ調整が残っている。熱を受けて赤く変色している。408は、甕の口縁部である。口縁部は、くの字状にほぼ直角に外反する。口縁端部は肥厚しており、上方につまみあげられている。外面には、縦方向のハケ調整が見られる。胎土の特徴から、生駒西麓産と考えられる。409は、甕の口縁部である。口縁部は、くの字状にほぼ直角に外反する。内外面ともに、縦方向のハケ調整が見られる。胎土の特徴から、生駒西麓産と考えられる。

J区 (図98～100、126、図版17、42、71)

西側のJ区では、削平や攪乱が著しく、肩部を明確に検出することは困難であった。東側のI区に比べてJ区では、遺構面のレベルが約1m低く、両調査区を分かち水路をはさんで状況がかなり異なっている。このため、整地に伴う削平の規模が大きく、大溝1の西側はかなり失われている。西側肩部の下端から底部にかけての検出であるが、東側の状況に比べて傾斜がゆるいものといえる。検出状況からは、本来の自然流路の形状を残したものか、人為的な成形によりつくられたものかは判断できない。ある程度、自然地形を残しているものと考えられる。底の状況は不明な点もあるが、埋土の堆積状況を観察することができた。大溝内から見ると、検出面のレベルが下がっているため、比高差はあまり感じられず、